

中村遺跡

長野県上伊那郡中川村片桐中央
緊急発掘調査報告書



1986

中川村教育委員会

序

この報告書は、伊南農業協同組合がリンゴ選果場を建設するにあたり、この敷地が文化財包蔵地中村遺跡にあたるため、同農協より委託を受けて緊急発掘調査を行ったその報告書です。

中村遺跡は、国道153号線牧ヶ原トンネルを抜けた南側に広がる中央部落の国道西側にあります。歴史的には既に調査を終えた「六万部古墳」「天伯古墳」も同じ部落内にあり、東山道堅錐駅があったと推定される最も有力な地域の一面にあり、この面からも重要な遺跡であると見られた所です。

発掘作業は、リンゴ選果に間に合うよう限られた期間に終了することを目途に進められたため、2月13日、厳しい寒さの中で着手し、時には除雪も行ないながら進められ、水温む3月末日をもって一応現場作業を終えることができました。

発掘の結果は、予想を遥かに上回る大量の成果を得ることができ、その代表的なものを掲げてみると縄文前期初頭中越式土器、同前期後葉諸磯式期の住居址5軒、また籠畑式や大木2b式、同中期後葉曾利Ⅱ～Ⅲ式併行の住居址15軒、縄文後期の掘ノ内式土器片、弥生時代後期座光寺原期、中島期住居址7軒、古墳時代須恵器、上伊那地方では最も古いと見られる5世紀終末の竪穴式古墳1基、奈良時代末～平安時代の住居址3軒、平安時代灰釉陶器、鎌倉時代の山茶碗など実に6,000年来殆んどの時代を通じて、この地に生活した跡を伺うことのできる発見や、出土品を得ることができた訳です。そして東山道堅錐駅の成立に至るまでの道順が整理され、この駅の一角にたどりついたのではないかとも見られています。

今回の調査は悪条件の中を短期間の作業にもかかわらず予期した以上の成果を収めてここに報告書を刊行することができますのも、地主・委託者・関係者の深い理解と協力によるものであり、特にこの仕事を担当された調査団長の友野良一先生はじめ、調査員の先生方やお手伝い頂いた皆様のご努力によるものであり心から感謝申し上げる次第であります。

昭和62年3月

中川村教育長 北沢正美

例 言

1. 本書は昭和61年に実施した、伊南農業協同組合片桐りんご選果場造成事業に伴う埋蔵文化財の、緊急発掘調査にもとづく報告書である。
2. 本事業は伊南農業協同組合の委託により、中川村教育委員会が実施した。
3. 本報告書は昭和60年度に発掘調査を行い、昭和61年度に検出した遺物等の整理をし、報告書を作成することとした。また、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点を置き、文章記述はできるだけ簡略化した。
4. 各遺構の図面の縮尺は1/60を基準とし、一部そうでないものもあるが各図に示している。遺物の縮尺は主に1/3とし、大形なものは1/6とした。また、小形や重要なものについて2/3、1/2にした。
5. 本報告書の執筆者及び図版等の作成者は次のとおりである。
 - 本文執筆者 友野 良一 ・ 松下 節子
 - 遺 構 図 高山よし子 ・ 松下 節子
 - 土器・石器の実測 友野 良一 ・ 小木曾 清 ・ 横田 愛子 ・ 高山よし子
橋沢 定子 ・ 米山 節子 ・ 松下 節子
 - 土 器 の 復 原 小木曾 清
 - 写真の撮影・図版 木下平八郎 ・ 友野 良一
6. 本報告書の編集は中川村教育委員会が行った。
7. 遺物及び実測図は中川村歴史民俗資料館に保管してある。

目次

序

例言

第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 調査会の組織	1
第3節 発掘調査の経過	1

第II章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置	4
第2節 地形及び地質	4
第3節 歴史的環境	6

第III章 遺構と遺物

第1節 縄文時代前期の遺構と遺物	11
第2号住居址	11
第3号住居址	12
第4号住居址	13
第11号住居址	15
第13号住居址	17
第15号住居址	18
土塚1号	18
遺構外出土遺物	19
第2節 縄文時代中期の遺構と遺物	23
第10号住居址	23
第12号住居址	23
第14号住居址	24
第16号住居址	25
第19号住居址	27
第20号住居址	29
第21号住居址	30
第29号住居址	30
第23号住居址	32
第24号住居址	34
第25号住居址	36
第26号住居址	37

第28号住居址	38
第31号住居址	38
土塚2号	40
土塚3号	40
土塚4号	41
第3節 縄文時代後晩期の遺物	41
第4節 土偶及び土製品	43
第5節 弥生時代の遺構と遺物	44
第1号住居址	44
第32号住居址	46
第8号住居址	46
第9号住居址	48
第17号住居址	48
第18号住居址	50
第22号住居址	52
第27号住居址	53
第30号住居址	53
遺構外出土遺物	54
第6節 奈良時代末から平安時代の遺構と遺物	55
第5号住居址	55
第6号住居址	59
第7号住居址	60
第7節 中村遺跡から出土した陶器	63
第8節 古墳時代の遺構と遺物	64
堅錐1号古墳	65
所見	67
図版	73

挿 図 目 次

第1図 中村遺跡の位置及び地形図……………4	第39図 第21号・第29号住居址出土土器拓影及び 石器実測図……………32
第2図 中村遺跡附近の地質図……………5	第40図 第23号住居址実測図……………33
第3図 中村遺跡の地層図……………5	第41図 第23号住居址出土土器拓影及び石器実測図…33
第4図 中村遺跡附近の遺跡分布図……………6	第42図 第24号住居址実測図……………34
第5図 中村遺跡附近の地形及び発掘区……………8	第43図 第24号住居址出土土器拓影……………35
第6図 中村遺跡附近の小字図……………8	第44図 第24号住居址出土土器及びNo.1119の土器 実測図……………36
第7図 中村遺跡遺構配置図……………9	第45図 第25号住居址出土土器拓影及び石器実測図…37
第8図 中川村遺跡分布図……………10	第46図 第26号・第27号・第28号住居址実測図……………38
第9図 第2号住居址実測図……………11	第47図 第26号・第28号住居址出土土器拓影及び 石器実測図……………39
第10図 第2号住居址出土土器拓影……………11	第48図 第31号住居址実測図……………40
第11図 第2号住居址出土土器実測図……………12	第49図 第31号住居址出土土器拓影及び石器実測図…40
第12図 第3号住居址実測図……………12	第50図 土塚2号・3号・4号実測図……………41
第13図 第3号住居址出土土器拓影及び石器実測図…13	第51図 土塚2号出土土器拓影及び石器実測図……………41
第14図 第4号住居址実測図……………14	第52図 縄文時代後晩期土器片拓影……………42
第15図 第4号住居址出土土器拓影……………14	第53図 土偶実測図及び土製品拓影……………43
第16図 第4号住居址出土土器実測図……………15	第54図 第1号・第32号住居址実測図……………44
第17図 第11号住居址実測図……………15	第55図 第1号住居址出土土器拓影及び石器実測図…45
第18図 第11号住居址出土土器拓影及び石器実測図…16	第56図 第8号住居址実測図……………46
第19図 第13号住居址実測図……………17	第57図 第8号住居址出土土器拓影及び石器実測図…47
第20図 第13号住居址出土土器拓影……………17	第58図 第9号住居址実測図……………48
第21図 第15号住居址・土塚1号実測図……………18	第59図 第9号住居址出土土器拓影及び石器実測図…48
第22図 第15号住居址出土土器拓影及び石器実測図…19	第60図 第17号住居址実測図……………49
第23図 土塚1号出土土器拓影……………19	第61図 第17号住居址出土土器拓影……………49
第24図 縄文時代前期初頭及び繊維土器拓影……………20	第62図 第17号住居址出土土器実測図……………50
第25図 縄文時代前期の遺物(その1)……………21	第63図 第18号住居址実測図……………50
第26図 縄文時代前期の遺物(その2)……………22	第64図 第18号住居址出土土器拓影及び石器実測図…51
第27図 第10号住居址実測図……………23	第65図 第22号住居址実測図……………52
第28図 第12号・第14号住居址実測図……………23	第66図 第22号住居址出土土器拓影及び石器実測図…52
第29図 第10号・第12号・第14号住居址出土土器 拓影及び石器実測図……………24	第67図 第27号住居址出土土器拓影……………53
第30図 第16号・第20号・第25号住居址実測図……………25	第68図 第30号住居址実測図……………53
第31図 第16号住居址出土土器拓影……………26	第69図 第30号住居址出土土器拓影……………54
第32図 第16号住居址出土土器実測図……………27	第70図 弥生時代遺構外出土土器拓影……………54
第33図 第19号住居址実測図……………27	第71図 第5号住居址実測図……………55
第34図 第19号住居址出土土器拓影及び石器実測図…28	第72図 第5号住居址出土須恵器実測図……………56
第35図 第19号住居址出土土器実測図……………29	第73図 第5号住居址出土須恵器実測図及び拓影…57
第36図 第20号住居址出土土器拓影及び石器実測図…30	
第37図 第21号住居址出土土器拓影……………31	
第38図 第21号・第29号住居址実測図……………31	

第74図	第5号住居址出土土師器・刀子・銅製品 実測図	58	第79図	第7号住居址出土須恵器実測図	61
第75図	第6号住居址実測図	59	第80図	第7号住居址出土須恵器実測図及び拓影	62
第76図	第6号住居址出土土師器実測図	59	第81図	中村遺跡出土陶器実測図	63
第77図	第6号住居址出土石器実測図	60	第82図	堅錐1号古墳実測図	65
第78図	第7号住居址実測図	60	第83図	堅錐1号古墳出土遺物実測図	66

図版目次

図版1	天竜川東より中村遺跡遠望(上) 北より中村遺跡発掘前(下)	72
図版2	住居址群(下の田)南より	73
図版3	第1号住居址土器出土状態(1) 炉址(2・3) 住居址全体(4)	74
図版4	第2号・第3号・第4号住居址(1) 第4号住居址(2)	75
図版5	第6号住居址(1) 第7号住居址(2)	76
図版6	第11号住居址 土器出土状態(1) 土器復原No.1895(2) 住居址全体(3)	77
図版7	堅錐1号古墳 周溝(南西側)(1) 葺石残存状態(東北側)(4) 出土須恵器(2・3)	78
図版8	第5号住居址 カマド(1~7) 銅製品出土状態(8)	79
図版9	縄文時代前期土器片(表面1・裏面2) 縄文時代前期初頭土器片(3)	80
図版10	縄文時代前期末 土器片(1・2)	81
図版11	縄文時代前期土器片(1~6・10) 礫器の敲打面(7~9)	82
図版12	各遺構出土土器(第11号・第16号・第18号・第24号・第10号・第28号・第31号住居址・遺構外)	83
図版13	各住居址出土埋甕(第26号・第31号・第16号・第19号・第29号住居址)	84
図版14	土偶(正面・側面1・裏面・側面2)	85
図版15	縄文時代後期土器片	86
図版16	土製品(1) 石器(2)	87
図版17	各住居址出土土器(第1号・第17号・第5号住居址)	88
図版18	刀子(1) 陶器(2) 墨書須恵器(3) 須恵器(4・5・8・9) 銅製品(6) 土師器(7)	89

《表紙》

第24号住居址より出土した土偶

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

中村遺跡の調査は、伊南農業協同組合より、片桐りんご選果場造成敷地内に埋蔵文化財包蔵箇所があるので緊急発掘調査について委託したい旨、村教育委員会への依頼があり両者協議のうえ、村教育委員会の編成した中川村中村遺跡発掘調査団が発掘業務を遂行することになった。

昭和61年2月10日伊南農業協同組合長理事と中川村長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結した。2月13日中村遺跡調査会を開催し発掘計画を協議し、午後より農協関係者・教育委員会・調査団等が参集して仕事始めの式を挙行了した。

第 2 節 調査会の組織

○ 中川村教育委員会

教育委員長	杉 沢 要
委員長代理	斉 藤 英 雄
委 員	米 山 俊 博
”	中 塚 道 雄
”	米 沢 正 明
教 育 長	北 沢 正 美
教 育 次 長	石 原 守
主 事	松 下 節 子

○ 中村遺跡調査団

団 長	友 野 良 一 (日本考古学協会)
団長代理	木 下 平八郎 (長野県考古学会)
調 査 員	小 木 曾 清 (宮 田 村)

第 3 節 発掘調査の経過

月 日	日 誌
昭和61年 2月13日	9時より教育委員会事務局において調査委員会を開催し、10時より現地で打ち合せを行い重機による表土除去を行う。16時より伊南農協片桐支所にて仕事始めの式を行う。
17日	ベンチマーク・標高の確認。10m×10mのグリッド設定。縄文時代前期～中世の遺物出土。
18日	2m×2mのグリッド設定。鋤連がけ及び、5ヶ所のグリッド掘り下げ。午後雪降り。
21日	雪が多く、除雪作業しかできなかった。
22日	調査委員会。全体平板測量及びグリッドの断面図。B～Fグリッドの表土鋤連がけ。

月 日	日 誌
2月23日	表土鋤連がけ。遺物のポイント・レベル測量及び取り上げ。
24日	第4号住居址（縄文時代前記）の調査。表土鋤連がけ。
25日	表土鋤連がけ。遺物のポイント・レベル測量及び取り上げ。
26日	第1号～4号住居址の調査。第1号住居址より甕形土器が横倒れで出土。
27日	農協・教育委員会・調査委員会合同打ち合せ。第5号住居址より中世の遺物出土。
28日	第1号～5号住居址の掘り下げ。
3月1日	第1号～4号住居址の平板測量。遺物の取り上げ。第5号住居址より銅製品が出土。
3日	第1号2号住居址の平板・レベル測量と清掃・写真撮影。
4日	第2号3号住居址の柱穴断面図。清掃・写真撮影。第4号6号住居址の掘り下げ。
5日	第6号住居址プラン検討。田の石垣（古墳の石と思われるので）測量。
6日	第5～7号住居址掘り下げ。石垣実測。
7日	第5～7号住居址のベルトセクション及び遺物の測量、取り上げ。石垣の実測。
8日	第8～10号住居址の掘り下げ。第31号住居址の埋甕を取り上げる。
11日	第6号9号10号住居址の平板・レベル測量。調査速報（No.1）発行。遺物整理。調査委員会にてF～Mグリッド（上の田）について今後の検討。期限があるため重機使用とする。
12日	第5～8号住居址の清掃・写真撮影。埋甕2ヶ取り上げ。B～Fグリッド（下の田）の全体測量。中川村議会議員視察。
13日	B～Fグリッド（下の田）の全体写真撮影。第5号7号住居址のカマド断面図。重機により石室の石（と思われる）の搬出。下の田の調査を完了とする。
14日	重機によりF～Mグリッド（上の田）の表土を、B～Eグリッド（下の田）へ動かす。午前10時頃より雨が強くなり遺物整理を行う。午後は作業を中止とした。
15日	重機による表土を動かす。表土の鋤連がけ。第1号住居址の調査。
16日	表土の鋤連がけ。第11号住居址より縄文前期の土器がおしつぶれて出土。第1号住居址からも大型の甕が横倒れで押しつぶれて出土。
17日	第1号・11～13号住居址の掘り下げ。地層調査。調査速報No.2を発行。
18日	地層調査及び写真撮影。第1号住居址の平板・レベル測量。第11～14号住居址の掘り下げ。第13号住居址の柱穴及び第12号住居址のベルトの断面図。
20日	周溝を重機により掘り下げる。第13号住居址の平板・レベル測量。調査速報No.3を発行。
22日	周溝を作業員によって掘り下げる。第12号第14～16号住居址の掘り下げ。第12号住居址の平板・レベル測量。第15号住居址のベルト断面図。調査速報No.4を発行。
24日	周溝の掘り下げ。北側には葺石があるが、東側及び南側には確認できなかった。清掃を行う。調査速報No.5を発行。
25日	周溝の清掃及びはしごを使い写真撮影。第14～16号住居址の掘り下げ。村の文化財調査委員視察。
26日	第16～20号住居址の掘り下げ。第16号住居址より埋甕、第17号住居址より弥生の甕出土す

3月	る。調査速報No.6を発行。周溝北側の断面図。
27日	第16号～20号住居址の掘り下げ。第18号19号住居址のベルト断面図。周溝茸石の測定の準備を行う。記念写真撮影。
28日	雨天のため発掘作業は中止とし、調査委員会を開き、残り少ない日数のため、調査の検討を行う。
30日	時々雨も降っていたが、第21～25号住居址の掘り下げ。遺物についてもっと丁寧に扱いたいが期限がせまっているので、そうも言っておれず残念だ。調査速報No.7を発行。
31日	第21号～30号住居址及び土塚1～5号の掘り下げ。全体の清掃及びはしごを使っての全体写真撮影。埋甕の取り上げ。本日をもって発掘作業の大体を終了とする。調査速報No.8を発行。
4月2日	第14～20号23号25号住居址の平板測量。
3日	第21号22号24号26～30号住居址の平板測量。
4日	周溝茸石の実測図。
7日	住居址のレベル測量。
8日	住居址・周溝茸石のレベル測量。現場かたづけ。全体的な最終確認をして現場での作業をすべて終了とした。
7月1日	出土遺物の整理。
12月1日	報告書作成のための整理作業を始める。
昭和62年	
2月28日	報告書作成の作業終了。

短期間にもかかわらず、大きな成果を得た今回の発掘にあたって、深いご理解とご協力をいただいた、農協や地元の関係の方々、発掘に直接参加下さった方々に心より感謝申し上げます。

発掘調査に参加された方々（順不同・敬称略）

細田 勉・中塚 益三・高坂 清人・下平 博行・浜田 琢也・田中 浩征・米山 昌宏
 横沢 克彦・高山よし子・橋沢 定子・丸田 南枝・松下千代子・永井みよ子・片桐きよみ
 小林 安子・新井甲子代・宮崎いく代・下平 敬子・米山 節子・清水 雅則・中平美帆子
 清水千恵子・米山ひとみ・松村美貴子・河田 和子・大場多津子・大場 智子・細田登志美
 横田 愛子・岡田八重子

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

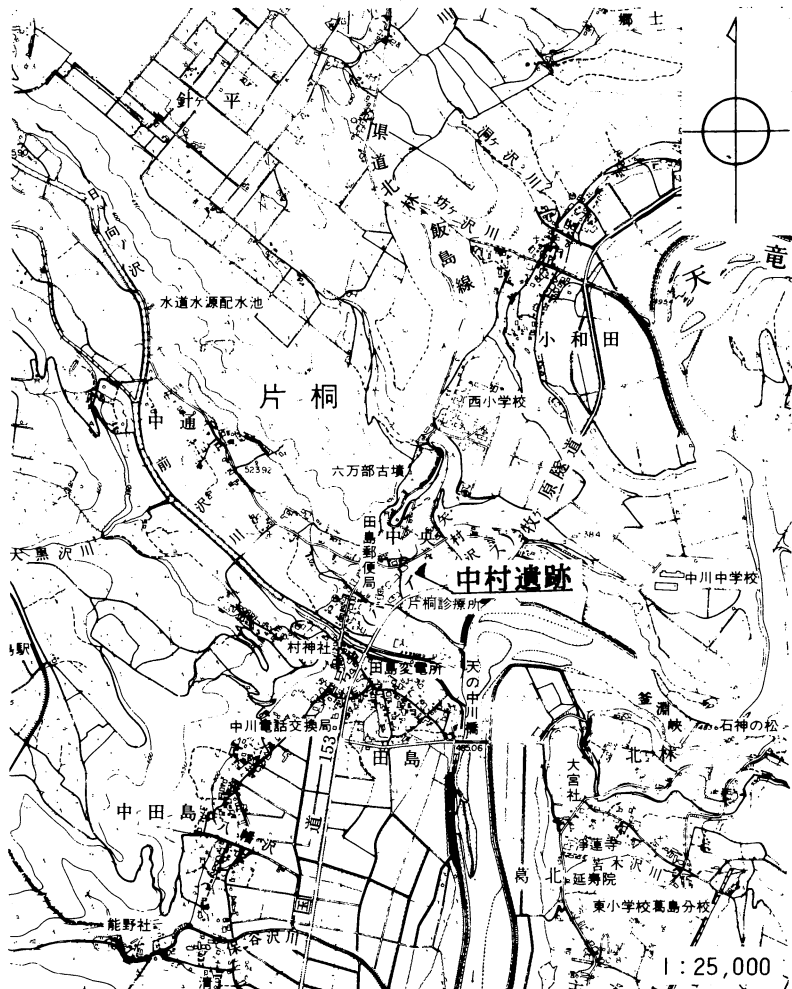
中村遺跡の位置は、東経137度55分37秒、北緯35度37分36秒、長野県上伊那郡中川村片桐中央部落に所在する。今回の調査位置は、中川村片桐4,043番地、3,944番地（所有者井沢元男）、3,945番地（所有者片桐幹雄）、前沢川の河川敷の中で、現天竜川の河床より約15mの高さにある。国鉄飯田線伊那田島駅の東北約1.3km（徒歩25分余）、国道153号線の西側に接した地点にある遺跡である。

第2節 地形及び地質

1) 地形（第1・2図）

中村遺跡にかかわる地形を概観すると、遺跡は前沢川の沖積地に属していることが地質的に理解することができるが、天竜川も遺跡の東端を浸蝕している。また、近くに「清水」という地名もあり、天竜川が浸蝕した底湿地で、現在も清水が湧き出ておりわさび畑もある。このわさび畑は「藤七垣外」と耕作者は呼んでいる。この地点あたりが前沢川の沖積地と天竜川の接点である。

遺跡からみると、縄文時代前期末の住居址が、天竜川の浸蝕によって一部削り取られた痕跡が認められるところより、天竜川は、縄文時代前期末頃、遺跡の辺まで及んでいたことも考えられる。



第1図 中村遺跡の位置及び地形図

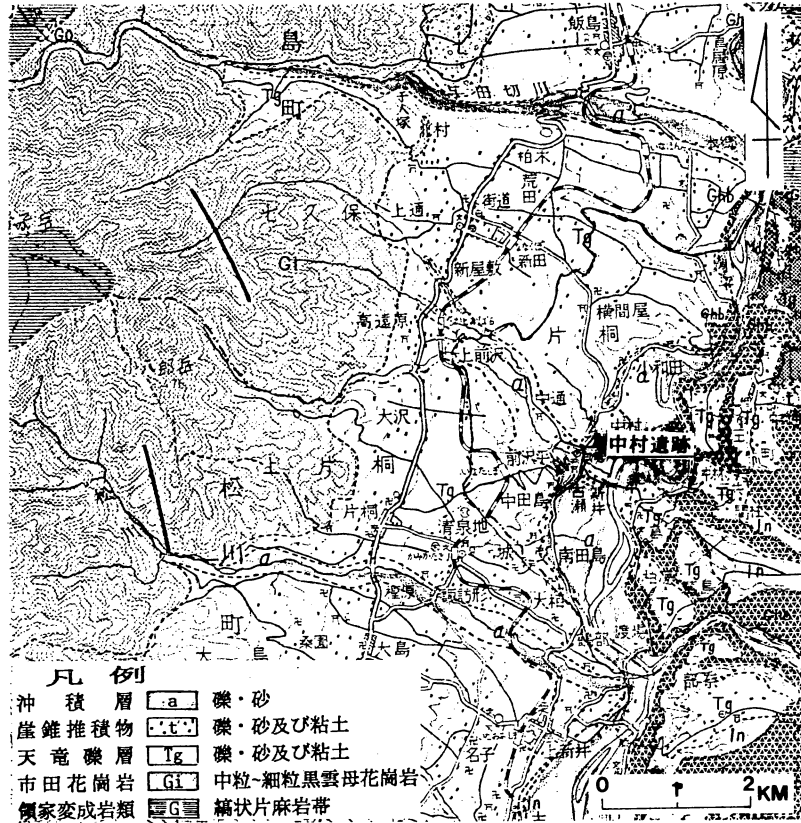
2) 地質

(第2・3図)

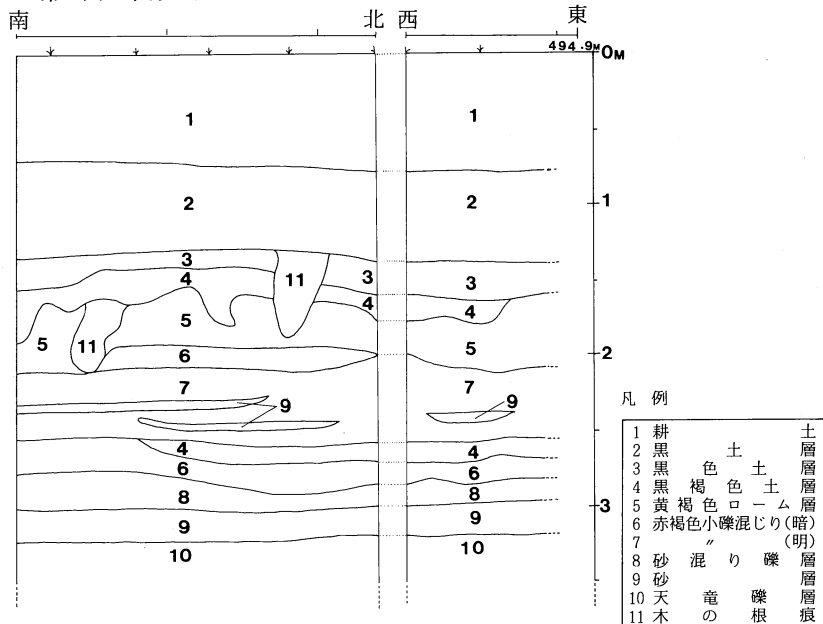
中村遺跡は前沢川の沖積面に作られたものである。この前沢川の地質を概観すると、前沢川は木曾山脈の砂礫で作った洪積層（天竜礫層）を、前沢川が開折して出来た河川である。

遺跡附近には前沢川の段丘面の適当な露頭した個所がないので、近くの河川である与田切川の露頭を参考にした。伊那谷の洪積層は木曾山脈を構成する花崗岩・変成岩類・片麻岩類の砂礫によって、現天竜川面までいたっている。その上面にはロームが堆積している地質である。現在遺跡の面は494 mであるから、六万部古墳面つまり、牧ヶ原遺跡面とは約50mの比高差がある。

遺跡の調査個所では（第3図）1層耕土が70cm、2層黒土層約60cm、3層黒色土で土器を含有する。4層黒褐色ローム層、5層黄褐色ローム層35cm、6層



第2図 中村遺跡附近の地質図（長野県上伊那誌自然編附図より）



第3図 中村遺跡の地層図

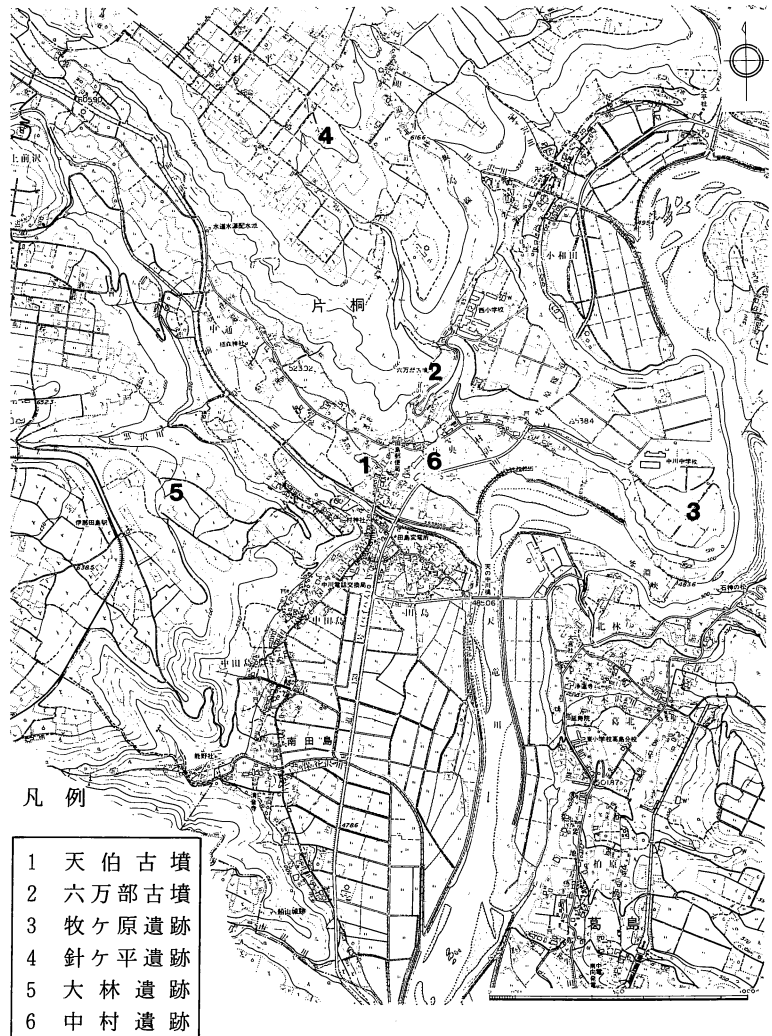
赤褐色小礫混り35cm、7層砂混り礫層、8層砂層、9層天竜礫といわれる層である。これらの堆積層のなかに注意しなければならないのは、一般的な常識として、伊那谷の小河川には、ローム層の堆積がほとんど認められないのが普通であるが、本前沢川の中村附近には新期ロームが分布している事実である。現在地表面にロームが認められるのは、天伯古墳の周辺から滝戸・清水辺であるが、地表下50～80cm下にローム層を認めることができる。しかし、中期ロームの段階は認められないところから新期ローム以降の生活面を知ることができた。今後に残された地質的課題は、縄文時代前期前葉迄の遺物が検出されたので、縄文時代早期迄さかのぼることができるか。また、遺跡附近の地質をもっと広い範囲に調べ、新期ローム以降の文化を追求したいものである。

第3節 歴史的環境

(第4図)

中村遺跡は、今回の調査で縄文時代前期初頭に位置づけられる中越式の遺物が発見されたことにより、縄文時代前期はもちろん、縄文時代早期も存在するのではないかという希望も持てそうである。現在のところ縄文時代中期後葉が多いが、縄文時代後期の土器片も見受けられた。縄文時代晩期は、はっきりしなくて終わった。

弥生時代前期末の刈谷原遺跡が同村横前にあるところから、あるいはここからも発見されるのを期待したが、これに該当する遺物は確認することができなかった。弥生時代中期の遺物は単片的であったが認めることができた。弥生時代中期は、中川村に原田遺跡が発見されているので、中期の遺物があっても不自然では



第4図 中村遺跡附近の遺跡分布図

ない。弥生時代中期の遺跡が1個所増えたことは心強いことである。弥生時代後期は、座光寺原式の遺構と遺物、中島式の遺物が発見され、この頃の集落が存在したことを証明してくれた。

古墳時代では 堅錐1号古墳が発見されたことは思いがけない収穫であった。本古墳は竪穴式古墳であったところから、5世紀終末期の時期と推定され、中川村最古であることはもちろん、現在わかっているところでは、上伊那最古の古墳と思われる。また、現アテネ工場の敷地内には、地主の話聞いてみると、人では簡単に動かせないくらいの石積の穴が三個あり、その石をこわして水田にしたのだが、今から考えると丸塚の様であったという。おそらく、円墳があったのではないかという話であった。この話より、石室のあった三個所の古墳は、6世紀前半頃の古墳と考えられる。

そのほか、今回の調査により奈良時代～平安時代にかけての遺構遺物が発見されたのは、東山道堅錐駅の所在を知る手掛りとして大きな意義をもつものである。また、表採ではあるが、平安時代後半の灰釉陶器片が発見されているところから、附近にこの時期の集落が存在することを暗示するものである。

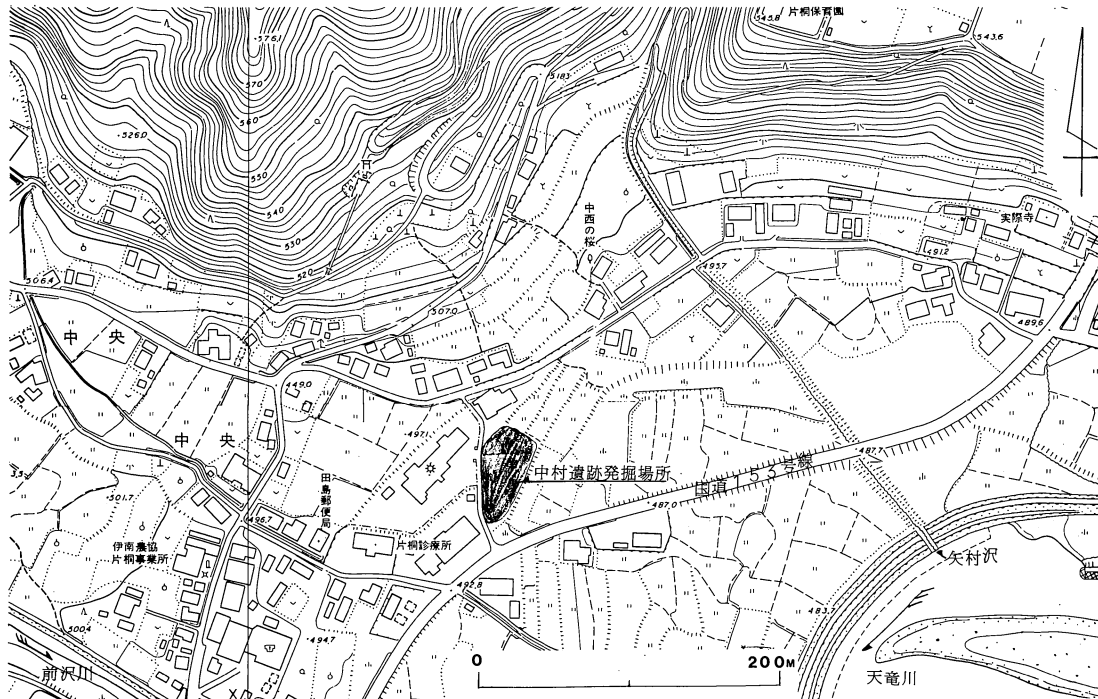
天伯古墳 中村遺跡の西方約200 m、同じ前沢川の沖積層中にある古墳で、昭和59年度中川村教育委員会が発掘調査を実施したところ、6世紀中頃の築造にかかる横穴式古墳であることが確認された。この古墳で特に注意しなければならないのは、古墳そのものではなく、古墳の周溝より縄文時代中期後葉の土器片や、弥生時代後期の土器片が出土したことである。このことは一体何を物語っているか、それはとりもなおさず、古墳周辺にその時代の村が存在したことにほかならないことだからと考え、地元の松下昇氏の手を煩わし調査を行ったところ、現アテネ工場の敷地内に縄文時代中期の住居があったことがわかってきた。今回の中村遺跡の調査についても実は、以上の研究から生まれ出た所産である。

六万部古墳 昭和52年度に調査が行われ、金銅製柄頭・直刀・鉄・小玉・馬具・刀子・須恵器土師器・人骨などが発見され、古墳時代後期の古墳であることが確認されている。

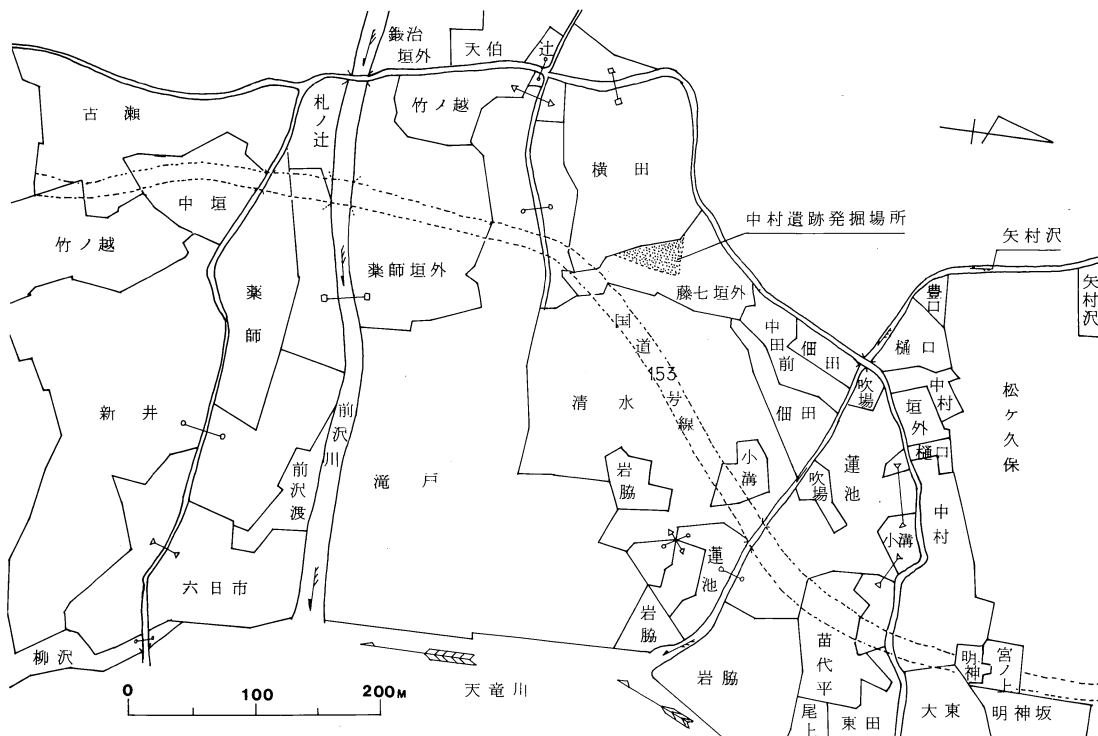
牧ヶ原遺跡 牧ヶ原台地は、天竜川が大きく釜ヶ淵峡で迂回し、前沢川の方向に流れる間に形成された舌状の台地にある遺跡で、縄文時代中期後葉・弥生時代後期・古墳時代・平安時代・中世の遺跡である。特に牧場的地名は注目するに値する。

針ヶ平遺跡 牧ヶ原台地の西方一段高い所にある遺跡で、今迄に弥生時代の遺構や遺物が発見されている。昭和61年5月飯島地区の針ヶ平から旧石器、小林達雄氏のいうⅠ期～Ⅱ期に移行するATよりやや下層より石器製造址が発見されたことは有名である。この中川村針ヶ平も、その遺跡に近接していることより注目すべき遺跡である。

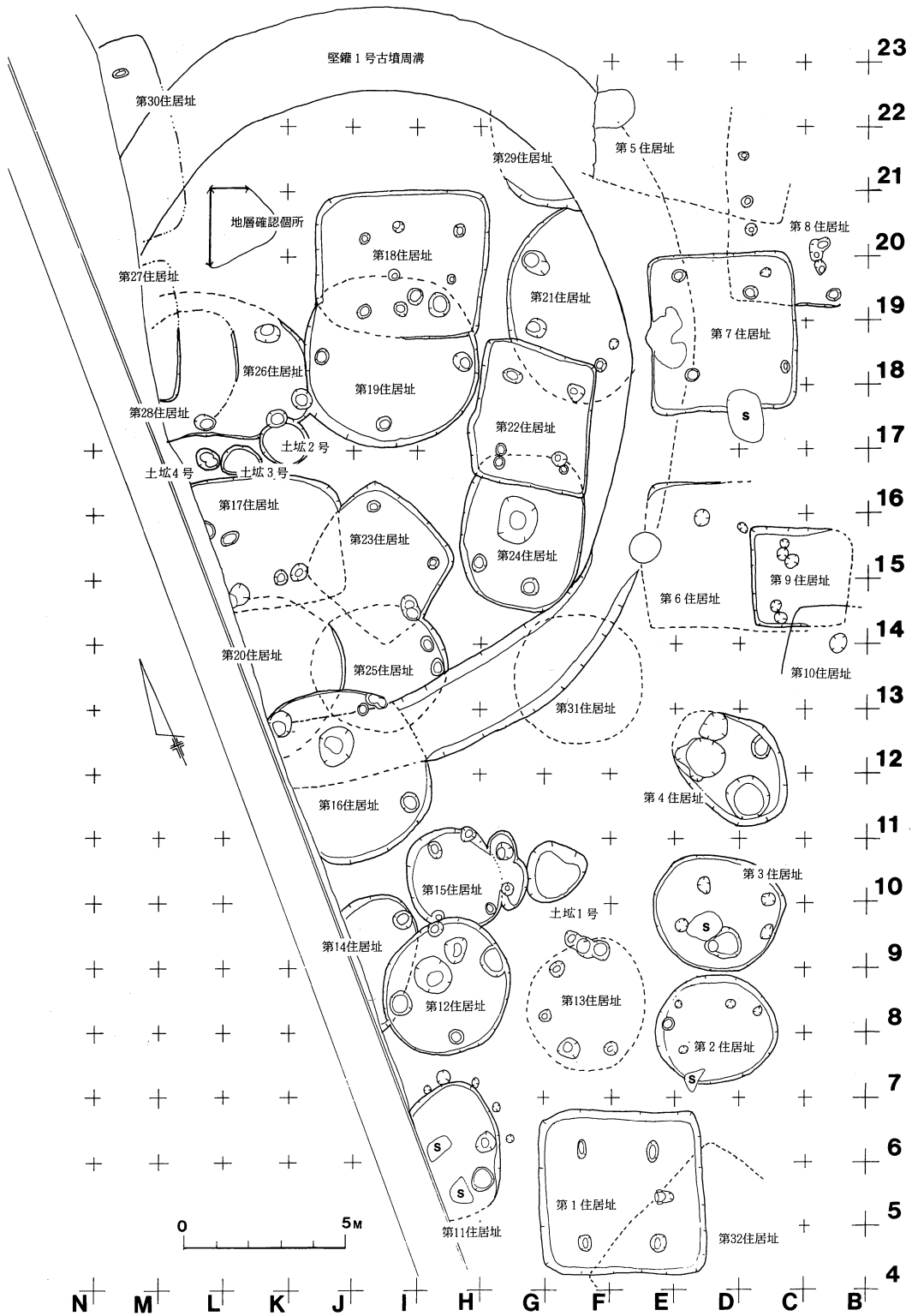
大林遺跡 本遺跡は前沢川の右岸、前沢部落の上段にあり、前沢川の古い扇状地にある。この遺跡からは、縄文時代早期の押型土器が発見された重要な遺跡である。そのほか縄文時代中期後葉・弥生時代後期や、古墳時代の遺物が発見され、前沢川河岸段丘として注目される遺跡である。



第5図 中村遺跡附近の地形及び発掘区



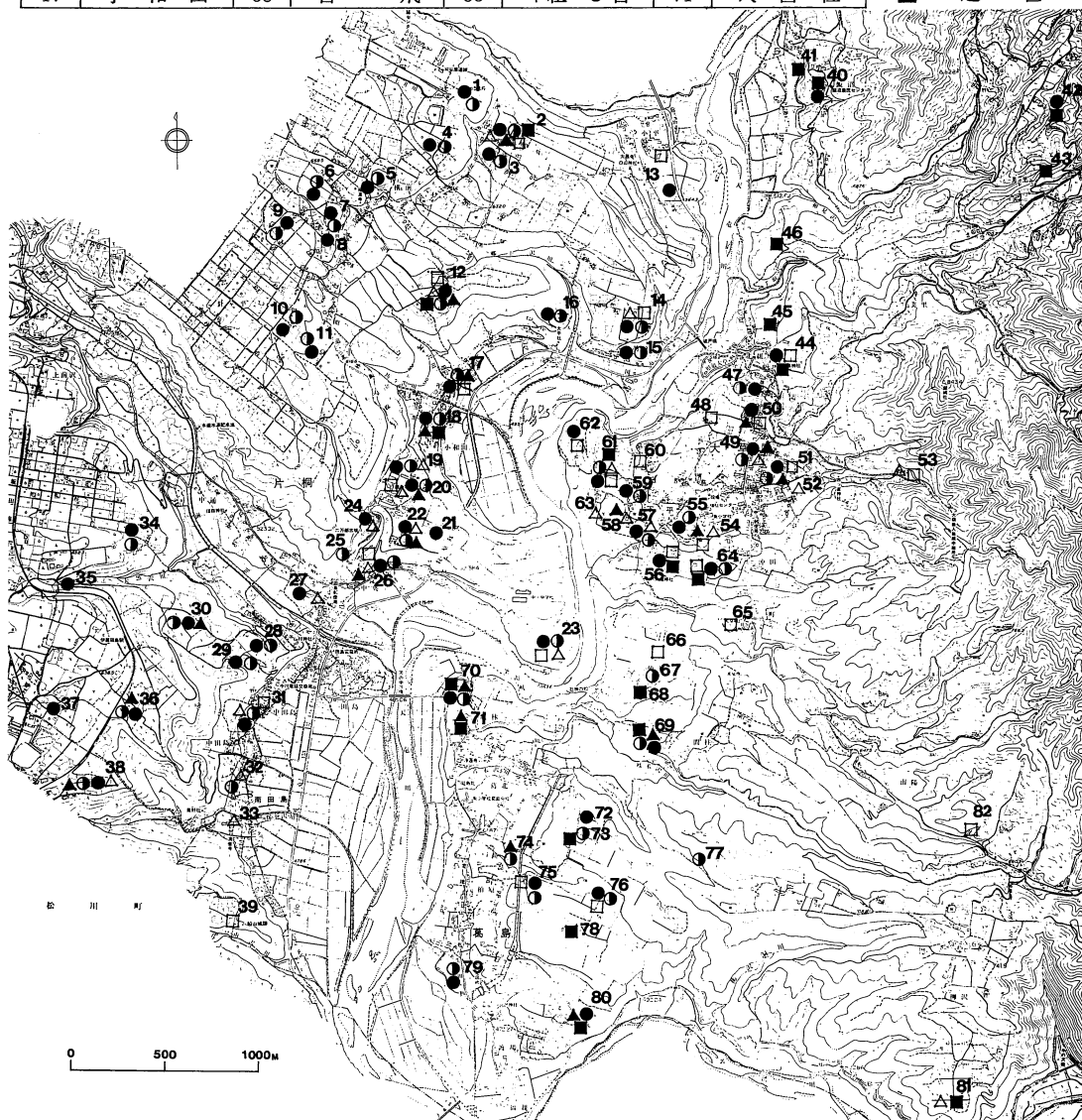
第6図 中村遺跡附近の小字図



第7図 中村遺跡遺構配置図

番号	遺跡名	18	小和田垣外	36	西原	54	東小入口南	72	池の平
1	刈谷原	19	松ノ越	37	曾利目	55	堂ヶ原	73	天伯
2	原田	20	西小学校	38	富士塚	56	下ノ坊	74	双葉園
3	原田	21	五十目	39	船山城址	57	川荒田	75	姫宮
4	梨ノ木	22	稚蚕所	40	飯沼1	58	下り	76	八ッ手
5	寺久保	23	牧ヶ原	41	飯沼2	59	中島	77	小町原
6	溝林	24	六万部古墳	42	美里1	60	下平E	78	富士塚
7	横前宮北	25	天神坂	43	美里2	61	下平F	79	下島
8	横前横山	26	中村	44	北組1	62	西瀬	80	百田
9	上新田	27	天伯古墳	45	北組2	63	劔光	81	大平
10	針ヶ平	28	桐山	46	北組3	64	太子原	82	鹿養
11	針ヶ平農場	29	古城	47	下り松	65	大草城跡		
12	茶堂	30	大林	48	中組大鹿	66	殿墓跡		
13	小平	31	中田島	49	中組A	67	仲林		
14	上ノ原	32	南田島	50	中組B	68	富士塚		
15	竹ノ原	33	塚本古墳	51	中組北原	69	下ヶ原		
16	高つなぎ	34	駒ヶ頭	52	中組住宅上	70	葛島城跡		
17	小和田	35	石飛	53	中組へび石	71	大宮社		

- 凡例
- ……縄文時代
 - ……弥生時代
 - △……古墳時代
 - ▲……平安時代
 - ……中世
 - ……近世



第8図 中川村遺跡分布図

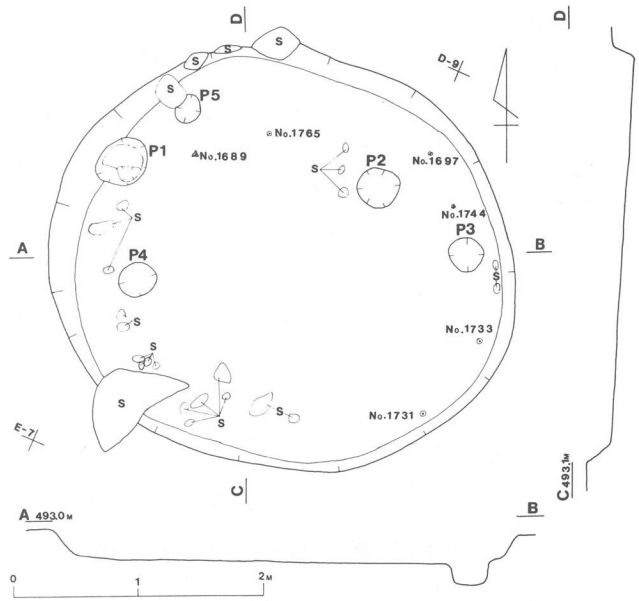
第 III 章 遺構と遺物

第 1 節 縄文時代前期の遺構と遺物

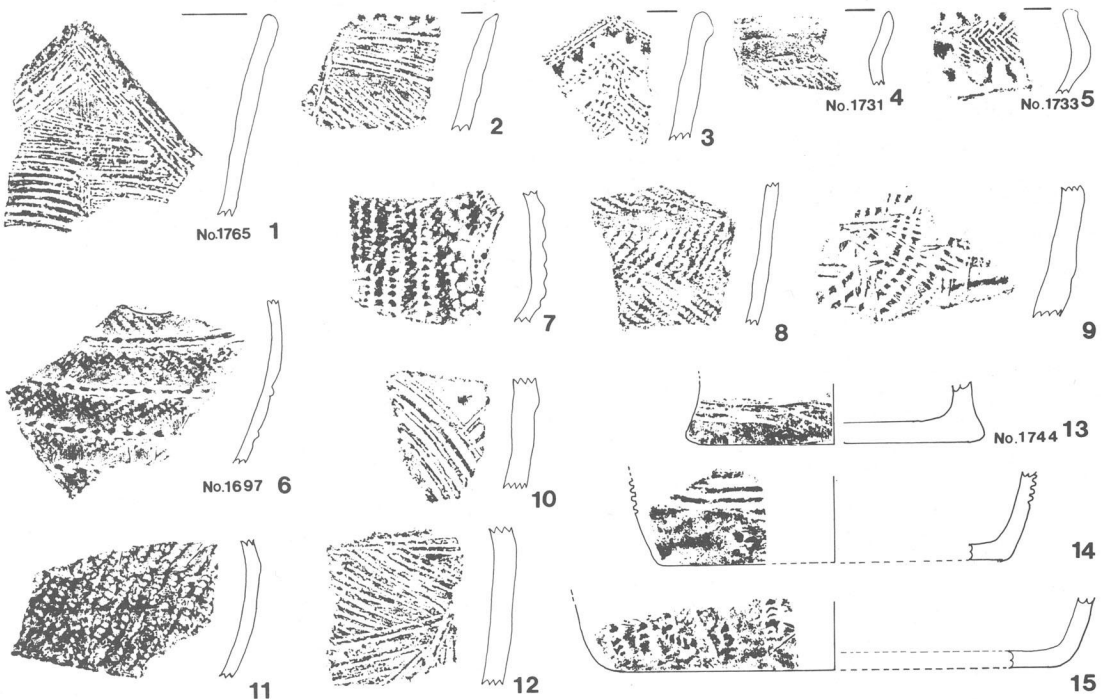
第 2 号住居址 (第 9 図、図版 2、4-1)

遺 構 本住居址は、CDE の 7~8 グリッドに発見されたものである。住居址の南側は、弥生時代後期の第 1 号住居址、北側は縄文時代前期の第 4 号住居址、西側には第 13 号縄文時代前期の住居址が隣接している。住居址のプランは東西 3.75m、南北 3.2 m、壁高 1.5~2.5 cm、東南にやや傾斜した楕円形の竪穴式住居址である。

床面は東側がやや軟弱きみ、南壁



第 9 図 第 2 号住居址実測図



第 10 図 第 2 号住居址出土土器拓影 (1:3)

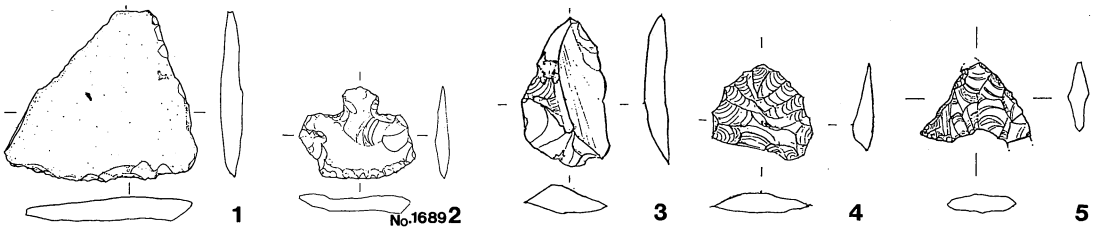
に花崗岩の自然石があるが、これは最初からのものらしい。その他の石は住居址廃絶後に投げ入れられたものらしい。柱穴はP1・P3・P4が明らかであるが、他は発見することができなかった。この柱穴の配列状況から、多柱穴の構造をもつ住居であったと考えられ、炉址はついに検出できなかった。

遺物 (第10・11図)

土器 出土した遺物は床面上より、覆土中に多かった。土器は縄文時代前期後葉が主体である。

1・2は平行線文。3は十三菩提式。4は斜状沈線文土器。5はボタン文が付された土器。6は羽状縄文土器。7は地文が縄文で隆帯に刻目の諸磯b。8は羽状縄文土器。9は隆線に刻目のある土器。10～15は竹管文土器と斜縄文土器。

石器 1. 横刀型石器。2. 頁岩石器。3. 黒曜石のスクレパー。4・5. 黒曜石の石鏃。

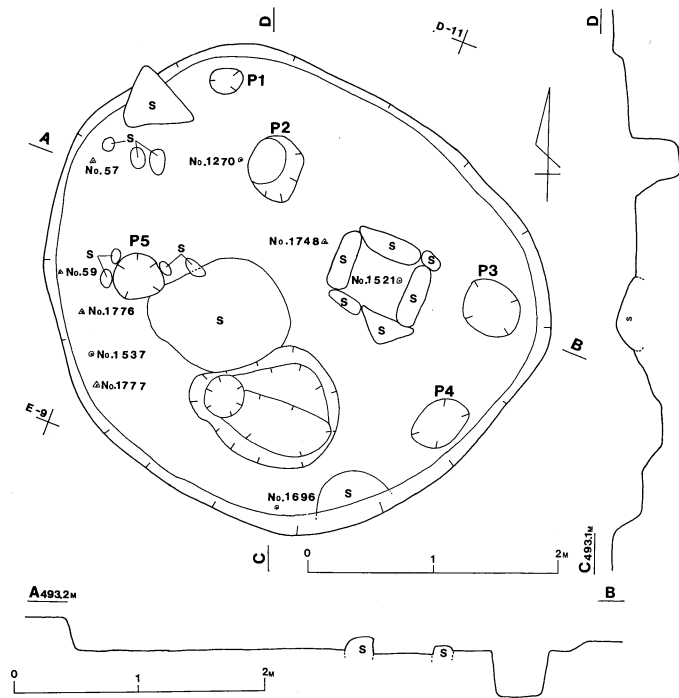


第11図 第2号住居址出土石器実測図 1.2 (1:3) 3~5 (1:1.5)

第3号住居址 (第12図)

図版2、4-1)

遺構 本住居址は、天竜川の小段丘に面しBの9～10、Eの10グリッドに発見されたもので、時期は縄文時代前期末葉に位置するものと思われる。住居址の規模は東西4.2m、南北3.6m、壁高10～30cm、これは住居址確認面からの数値である。住居址の形態は東西のやや長い楕円形竪穴式の住居址である。壁面には特別の施設は発見されなかった。柱穴は不規則であるがP1.P3.P4.P5が主柱穴と考えられる。P2は補助穴と思われる。床面の施設



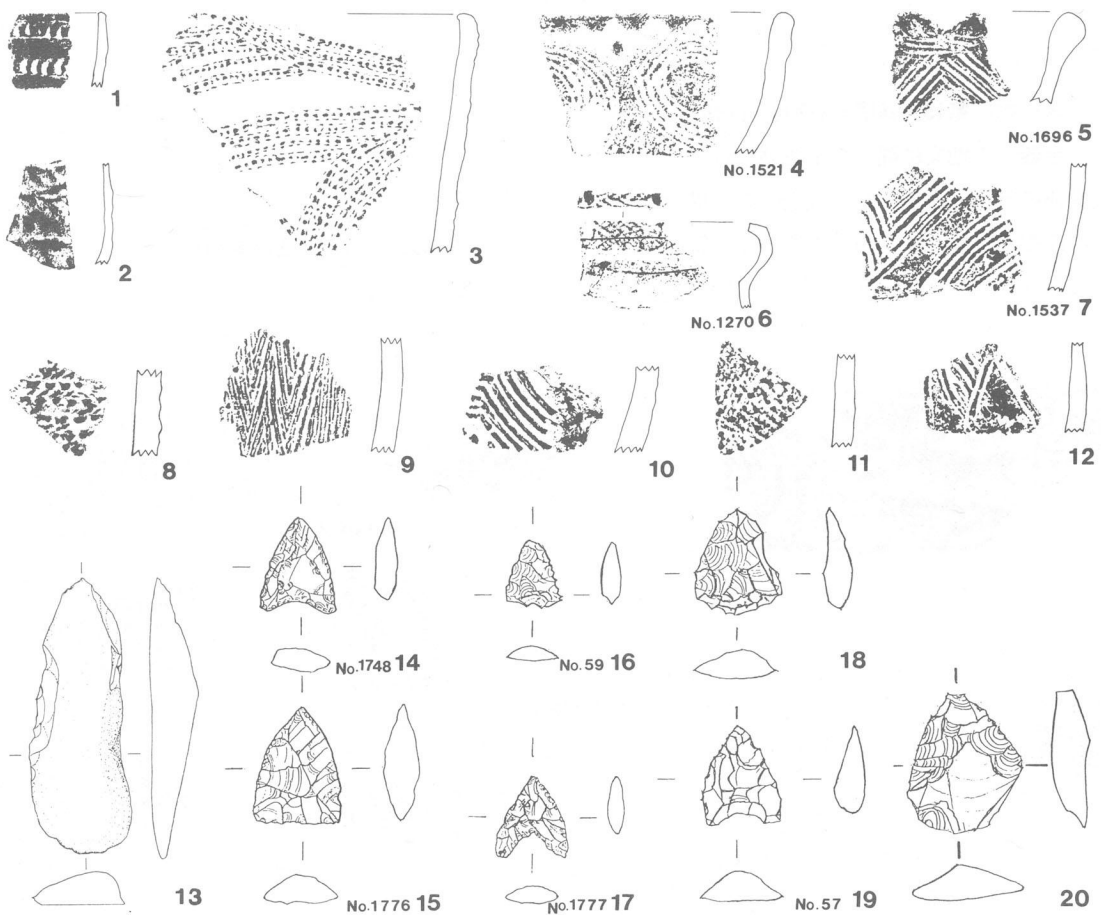
第12図 第3号住居址実測図

は柱穴との間に自然石で組まれた小形の炉址がある。炉址の南側に東西1.2m、南北1m、深さ20cmの土壇がある。土壇の西側に径1.1m、高さ14cmの花崗石の自然石があるが、この自然石は住居にはさほど不自由ではなかったかも知れない。床面は堅く踏み固められていた。

遺物(第13図、図版11-1. 11-2)

土器 1. 薄手で灰色のつめ型文土器。2. 薄手指痕文土器。3. 結節状浮線文土器 4. 口縁直下のボタン状貼付けと併行沈線文土器。5. 半截竹管文の口縁部。6. 薄手小形の斜縄文と凸帯文が施された大歳山に比定される土器。8. 浮線文土器。7・9・10・12は沈線文土器。11. 羽状縄文土器。

石器 13. 自然面を残した硬砂岩打製石斧。14・19. 黒曜石のややえぐりのある石鏃。17. えぐりのある石鏃。15・16 三角形に近い石鏃。20. 基部の丸味のもの。総じて縄文時代前期の石器。



第13図 第3号住居址出土土器拓影及び石器実測図 1~13(1:3) 14~20(1:1.5)

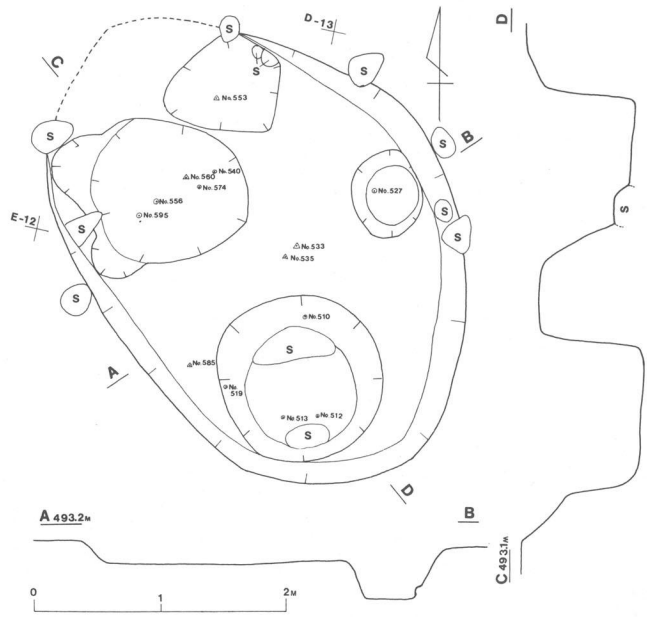
第4号住居址(第14図、図版4)

遺構 本住居址は、第3号住居址の北C12~E12グリッドを中心にした位置に発見した遺構である。この遺構は住居址内に2個の竪穴が設けられたので、柱穴は一部を残すのみで他は竪穴のため破

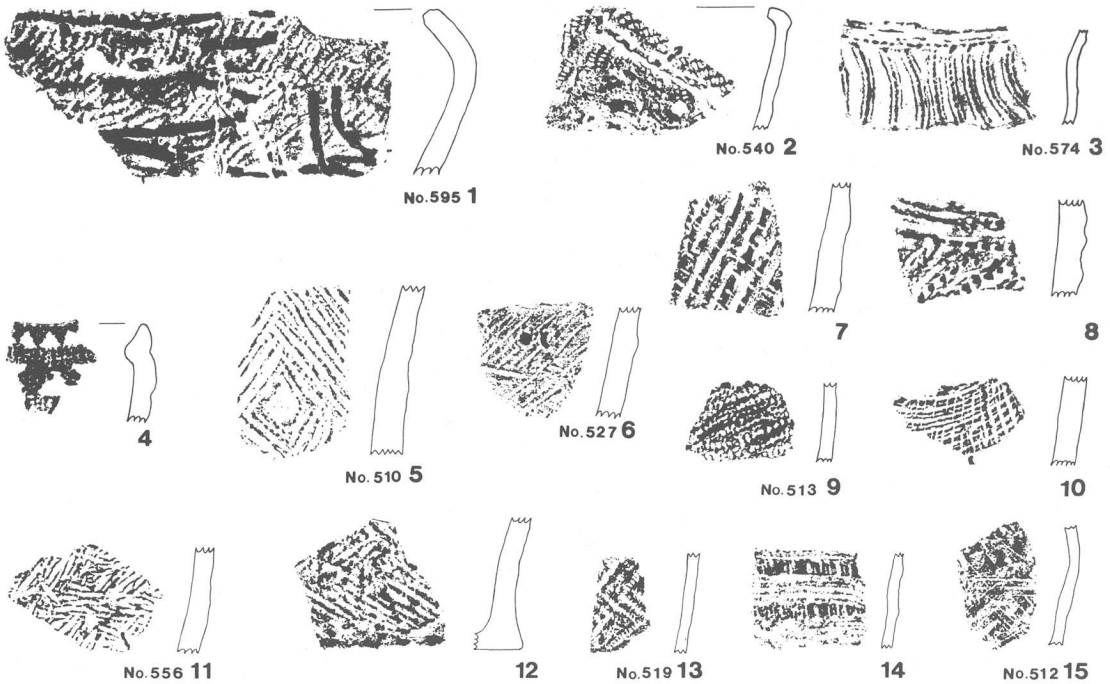
壊されてしまったと解される。現存する柱穴はP 1のみで他は土塚中であつたのではなからうか。遺構の規模は東西3.9m、南北2.9m、壁はわずかに認められるにすぎない。東西に長い楕円形のプランをもつ竪穴式住居址である。床面は土塚の北側に叩きが認められた程度であつて、他は軟弱であつた。炉址ははっきりしなかつたが、竪穴1号と竪穴2号の間あたりに焼土ばい所が見えたが地焼炉というまでにはいかなかつた。

遺物 (第15・16図・図版10・11-10)

土器 1.地文に縄文粘土紐貼付け口縁部に刻目文土器。2.大歳山。3.縦横に浮線文土器。4.三角文土器。5.竹管文。6.ボタン文。7.8.浮線文。9.斜縄



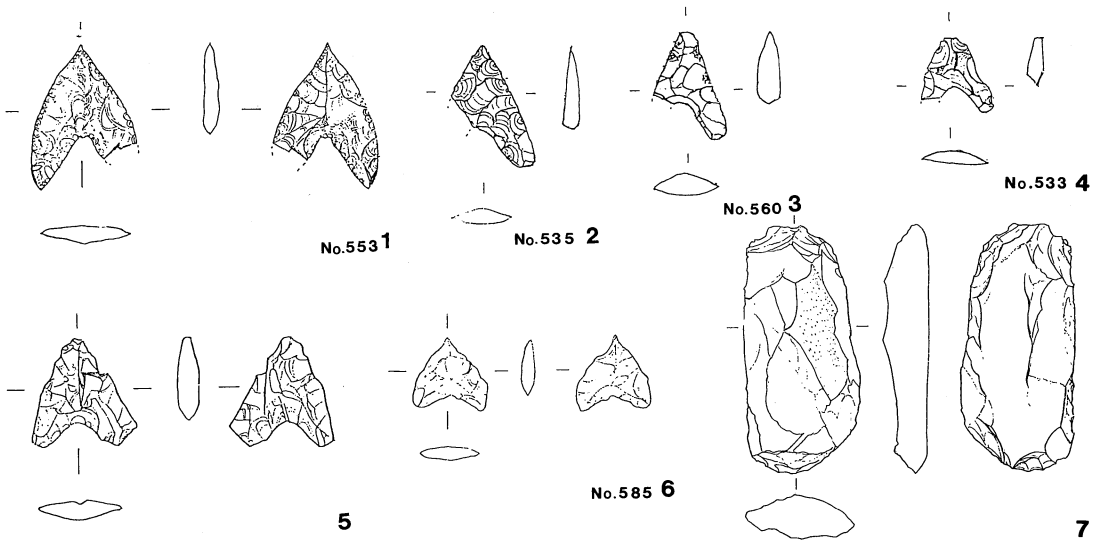
第14図 第4号住居址実測図



第15図 第4号住居址出土土器拓影 (1:3)

文。10.ひしめ文。11.縄文。12.羽状の底部。13.羽縄文。14.平たい粘土紐貼付け、その上に縦に竹管で引いた早期末。15.薄手指痕細線文土器。

石器 1～6はえぐりのある石鏃で黒曜石とチャート。7.一部に自然面をのこす打製石斧。



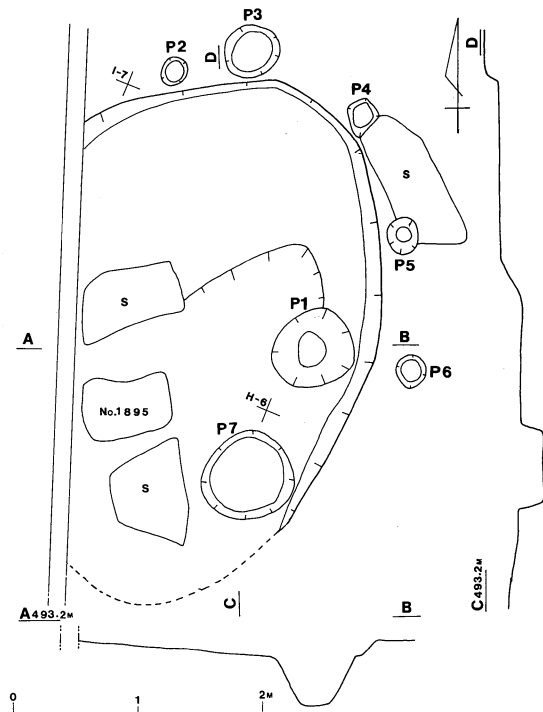
第16図 第4号住居址出土石器実測図1～6 (1:1.5) 7 (1:3)

第11号住居址 (第17図・図版6)

遺構 本住居址は、第1号住居址の西G・5～7、I 5～7に発見されたものである。この住居址の西側は道路と溝の下に入り込んでいるため住居址全体の調査はできなかった。

従って住居址の規模は南北3.9m、東西は東壁より2.4mまで調査できたが、それから西は道路の下に入り込んで計測ができない。壁は北壁のみで他は余りはっきりしなかった。

柱穴はP1は深さが40cmと深く柱穴としてもよいピットであるが、位置的にやや問題がありそうである。P7は浅くやや大きめで、柱穴とするには少し難しい。壁外P2～P6の柱穴が検出された。これらのピットは直径が20～27cm内外で、深さも10～20cmを測る。その中でP3はやや大きく径が45cmで、他のピットより大形である。これらのピットは、



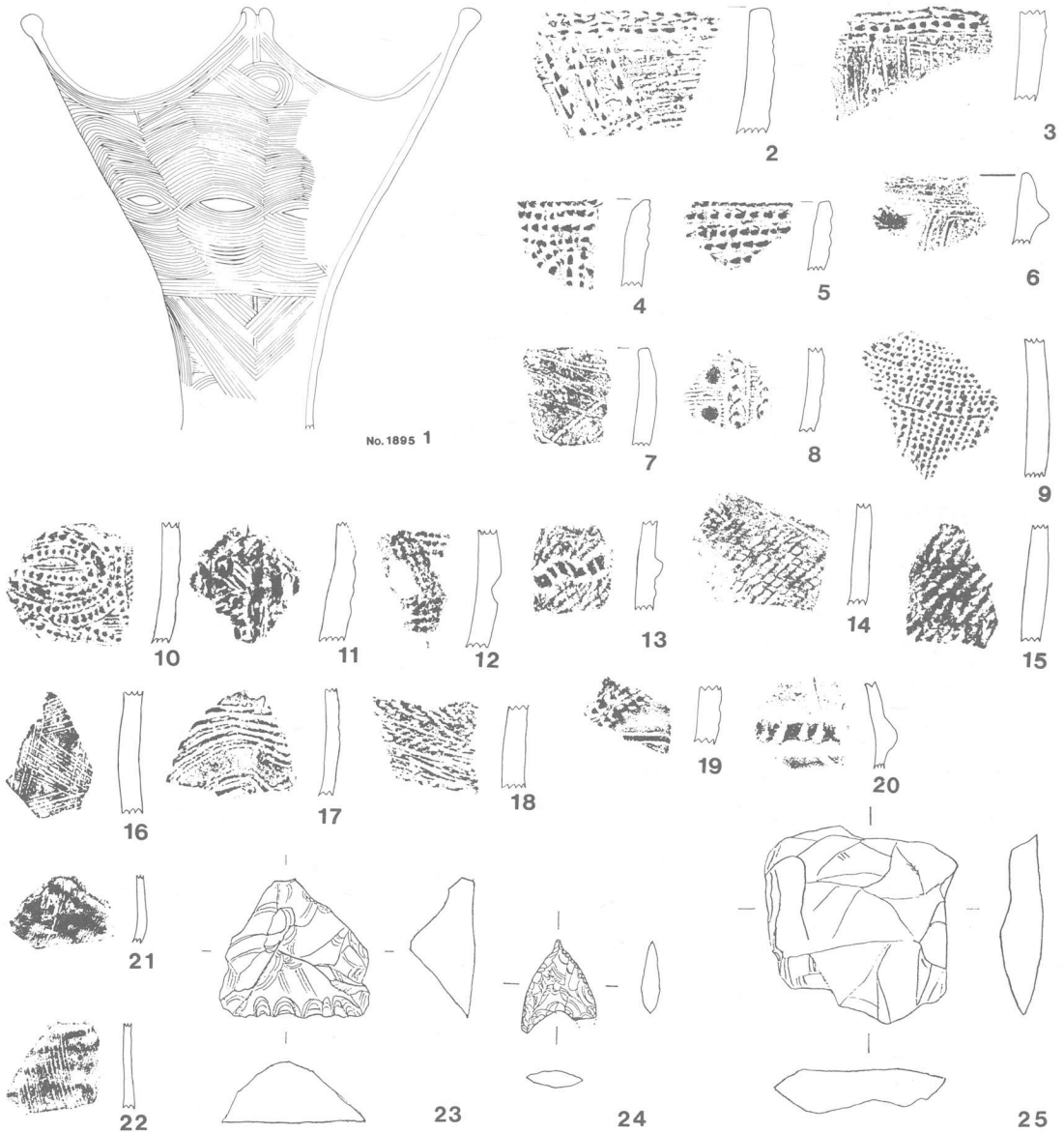
第17図 第11号住居址実測図

住居址の壁外柱とすることがよいかこれにも問題がある。本址は半分道路敷に入るので、炉址を確認することができなかった。従って住居址の条件を十分に満たすことができなかったが、今回は一応住居址として扱うこととした。

遺物 (第18図 図版6・12-1・10)

土器 1.半截竹管による併行沈線文土器。2~6・9~11併行沈線と押引文。7・8・16~18併行沈線文。12・19三角文と押引文。13地文縄文粘土紐貼付。14・15は縄文。20~22薄手指痕文土器。

石器 23黒曜石のスクレーパー。24黒曜石のえぐりのある石鏃。25Nucleus, Core。

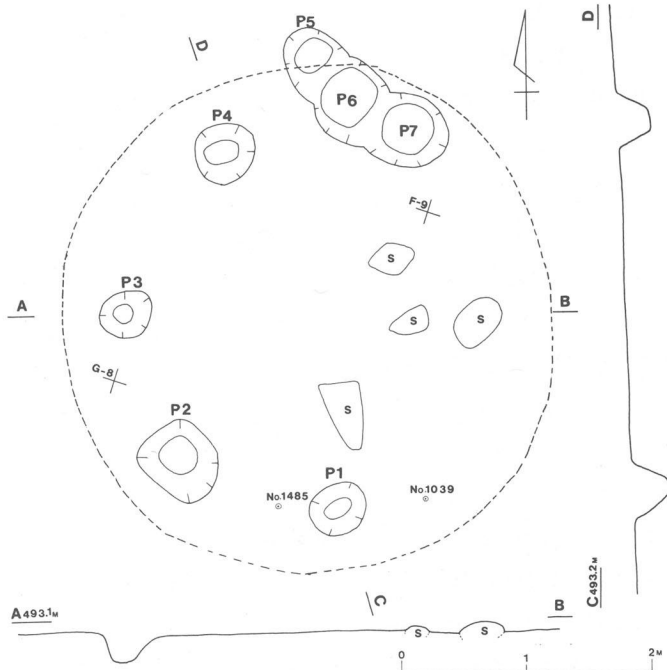


第18図 第11号住居址出土土器拓影及び石器実測図

1 (1: 6) 2~22(1: 3) 23~25(1: 1.5)

第13号住居址 (第19図)

遺構 本址は、第2号住居址と第12号住居址の中間に発見された遺構である。この遺構は水田造成の折に壁の部分まで切り取られてしまって、床面が辛じて残ったという状態の住居址である。規模については、東西2.7m、南北4.5mと考えられる概円形を呈した住居址と思われる。柱穴と思われるものは、P1、P2、P3、P4で、P5、P6、P7は北側に東西に連続しているが、この内P7が柱穴に該当するものと考ええる。



第19図 第13号住居址実測図

遺物 (第20図)

土器 1.渦巻状浮線文土器。2.貝殻状突起文土器。3.平行沈

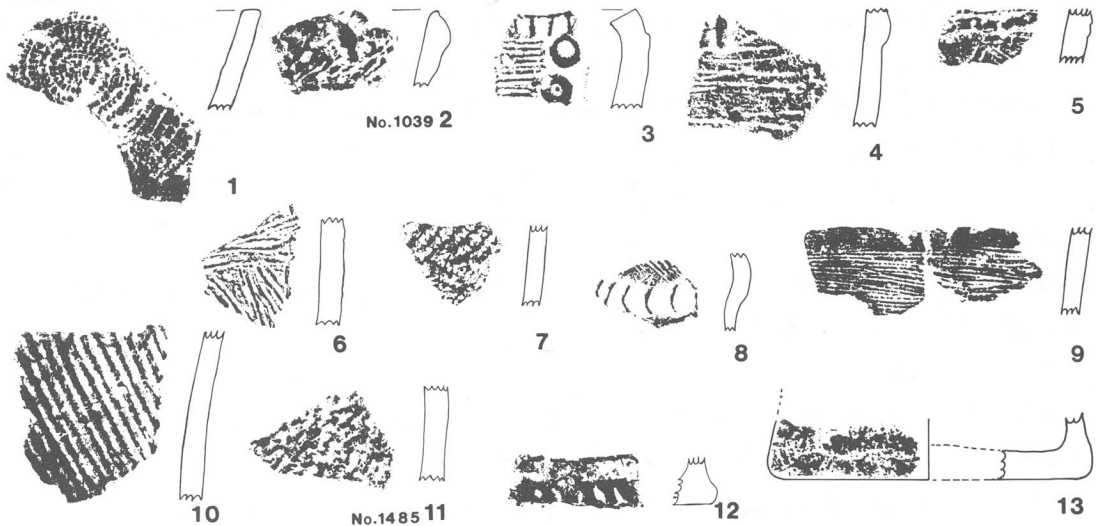
線文にボタン文が施された土器。4.ボタン文と貝殻状突起文土器。5.沈線と押引文が施された土器。

6.地文に縄文がある竹管文土器。7.斜縄文土器。以上縄文前期末葉の土器。8.薄手指痕で頸部につま

みのある縄文前期初頭型式土器。9.横位に併行沈線が施された縄文前期末の土器底部。10.半截竹管文土

器。11. 繊維の入った縄文早期末の土器。12. 繊維の入った土器底部。13. 底部であるが、時期不明の

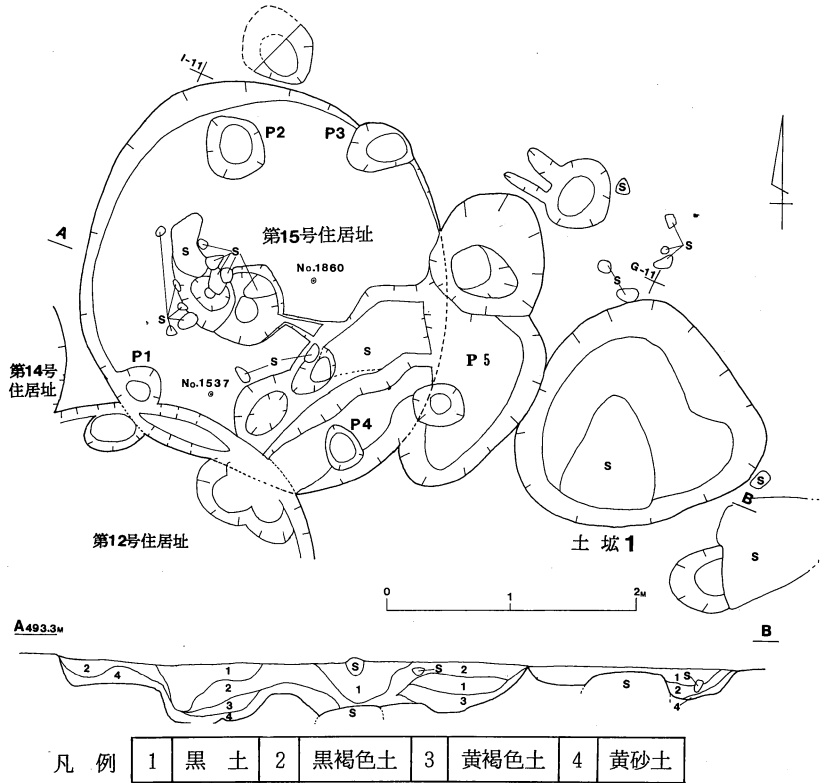
土器。



第20図 第13号住居址出土土器拓影 (1:3)

第15号住居址
(第21図)

遺構 本住居址はGHIの9～11グリットに発見されたものである。本住居址も水田造成の折、上面はある程度削り取られたり、攪乱を受けたようである。住居址の規模は、南北で3m、東側は土塚1で切られた形となったが約2.9～3mと推定され、ほぼ円形であると考えられる。柱穴P1～P4と考えられるが、P5については、隣接するピットの中にある。本住居址の柱穴は壁に接して設け



第21図 第15号住居址及び土塚1号実測図

られている形である。炉址については、この住居址も東側にピットが作られたため、あるいは破壊されてしまったかも知れない。

遺物 (第22図)

土器 1～3 薄手指痕細線文土器で縄文前期初頭。4.中厚手中越式土器。5. ¹⁵大木2式に併行する厚糸土器。7.8はボタン文土器。9.浮線文土器。10～12竹管文土器。13.斜縄文と竹管文が施された土器。14.やや厚手の縄文土器。15.中厚手で指痕の残る縄文土器。総じて縄文前期の土器。

石器 緑色岩の石錘。

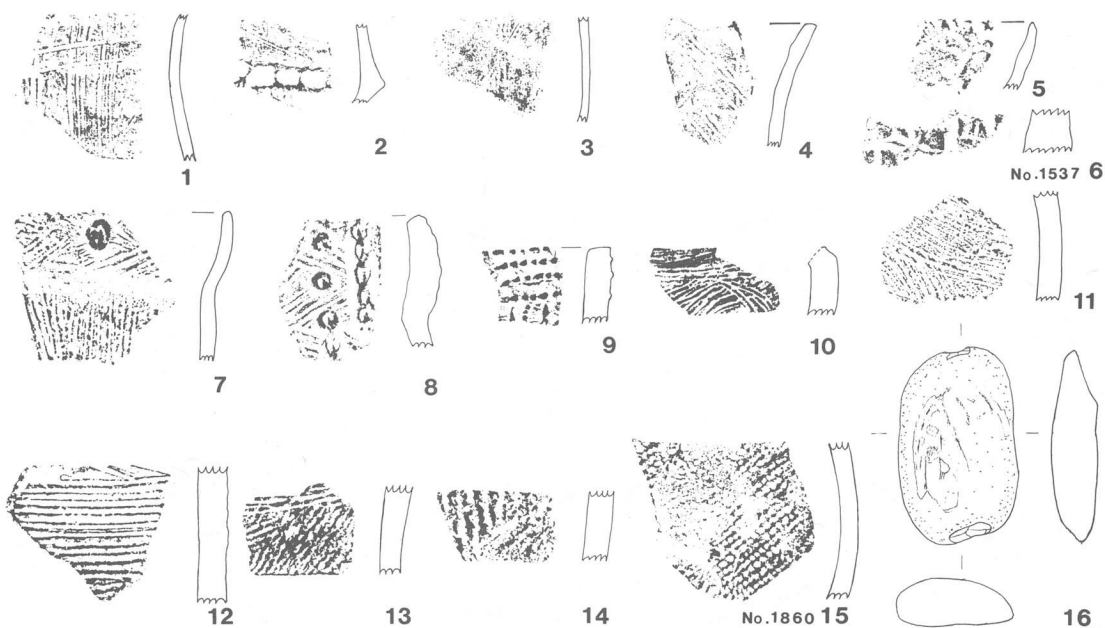
土塚1号 (第21図)

遺構 第15号住居址の東側に発見されたものである。規模は東西1.7m、南北1.8mの楕円形で土塚内に径80cmぐらいの花崗岩の自然石があり、割合浅い土塚である。

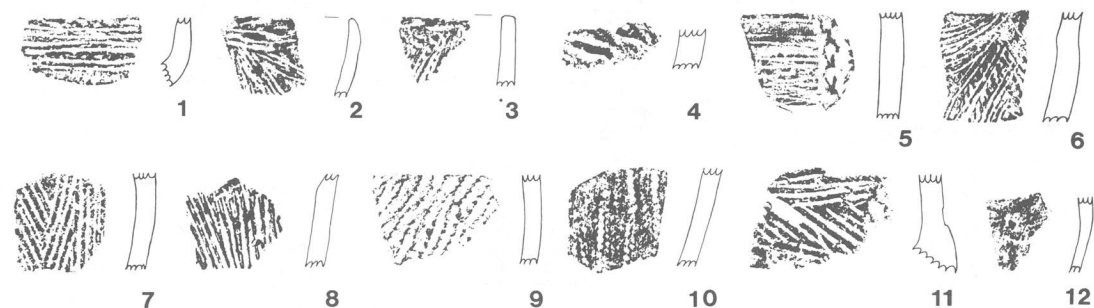
遺物 (第23図)

土器 土塚内中心部に集中して発見された。1～3竹管文土器。4.貼付けた粘土紐に刻目を付した。5.地文に竹管文縦文に隆帯に刻目を施した神ノ木・中越式にみえる土器。6～8・11.竹管文土器。9.10.縄文土器。12.薄手指痕細線文土器。本土塚の土器は縄文前期のものが主体。

石器 黒曜石剥片5個出土。



第22図 第15号住居址出土土器拓影及び石器実測図 (1: 3)



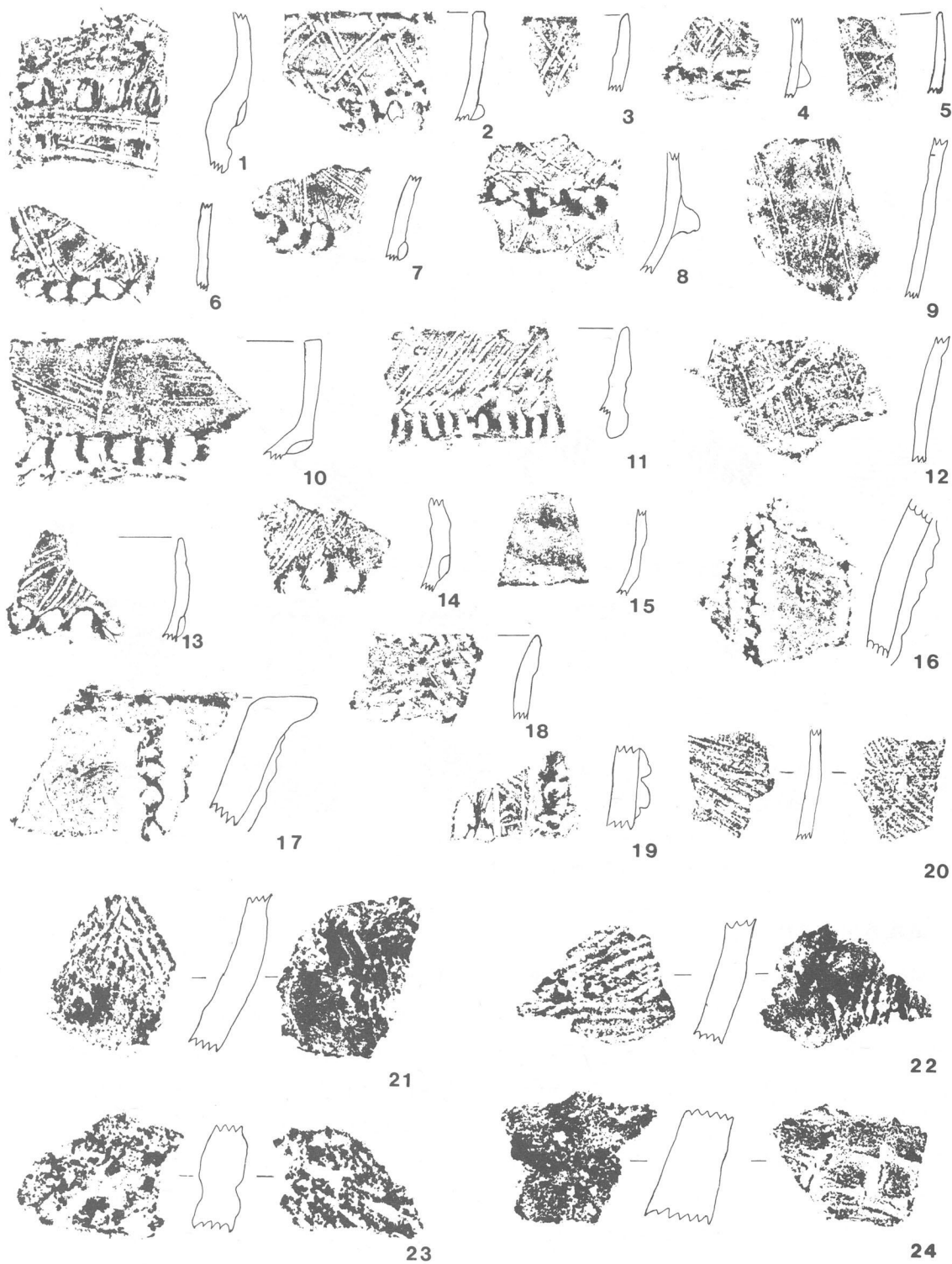
第23図 土塚1号出土土器拓影 (1: 3)

遺構外出土遺物

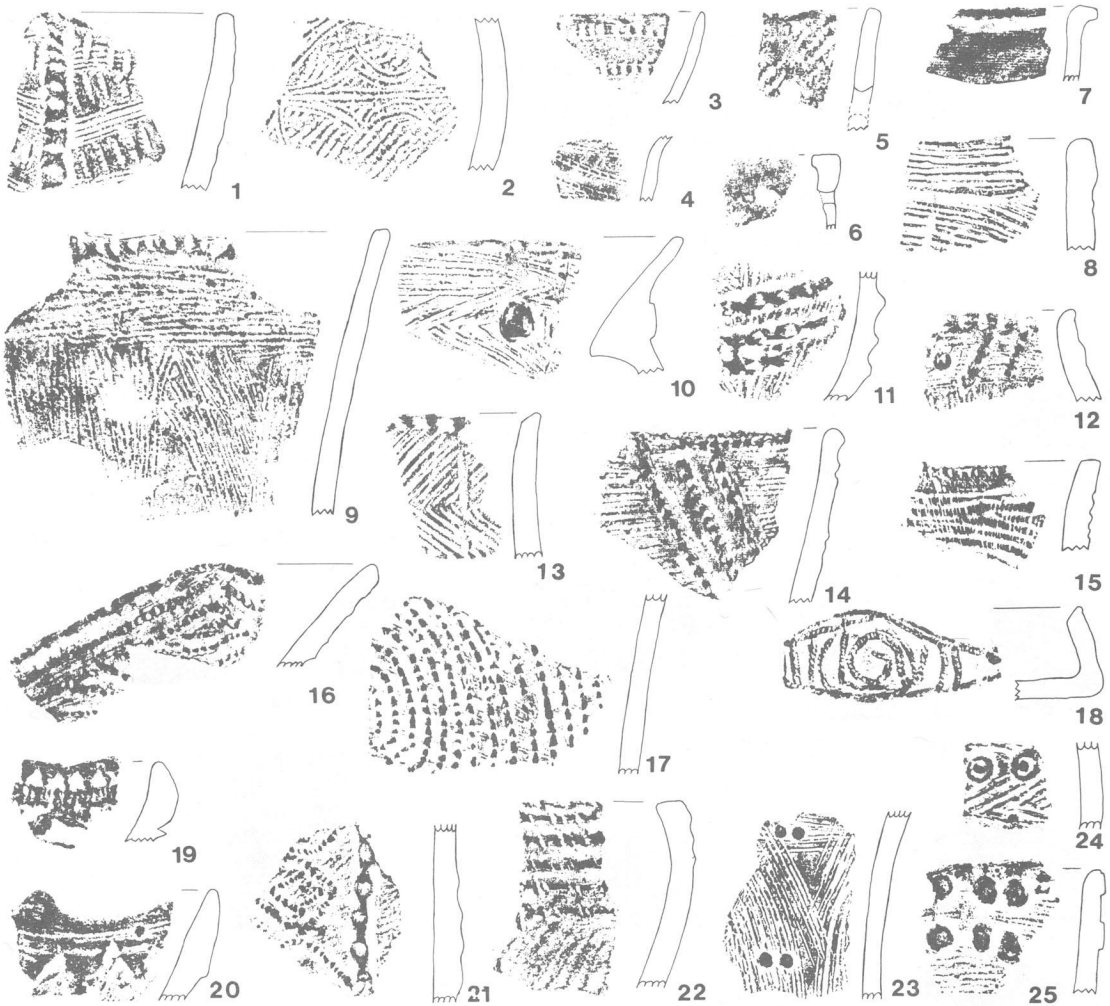
縄文時代前期初頭型式から縄文時代前期中葉の土器 (第24図)

1. 甕形土器の口縁部で中厚手。頸部につまみがあり平たい粘土紐を貼付し縦に竹管で線を引いた東海系の土器。2~4. 7~8. 12 口縁部と頸部破片。格子目状の文様と頸部につまみのある土器。5. 格子目指痕文土器。6. 指痕細線文土器。10. 11. 細線を斜方向に施した土器。13. 14. 竹管による沈線を斜方向に施文しつまみのある土器。15. 18. 薄手無文土器。16. 波状口縁のやや厚手土器で波状口縁より隆帯を垂下させ刻目を施した土器。17. 厚手平縁の甕形土器で、口縁端がくの字に外反し隆帯を垂下した土器。19. 口縁部破片で、隆帯に刻目を付した土器。20は条痕文土器。21. 22. 繊維を含み、裏面に条痕のある土器。23は胎土に多量の繊維を含んだ土器。24. 厚手で繊維を含み、方形に近い綱目文を施した大木式に類似している縄文前期の土器。

押型文



第24図 縄文時代前期初頭及び繊維土器拓影 (1:2)



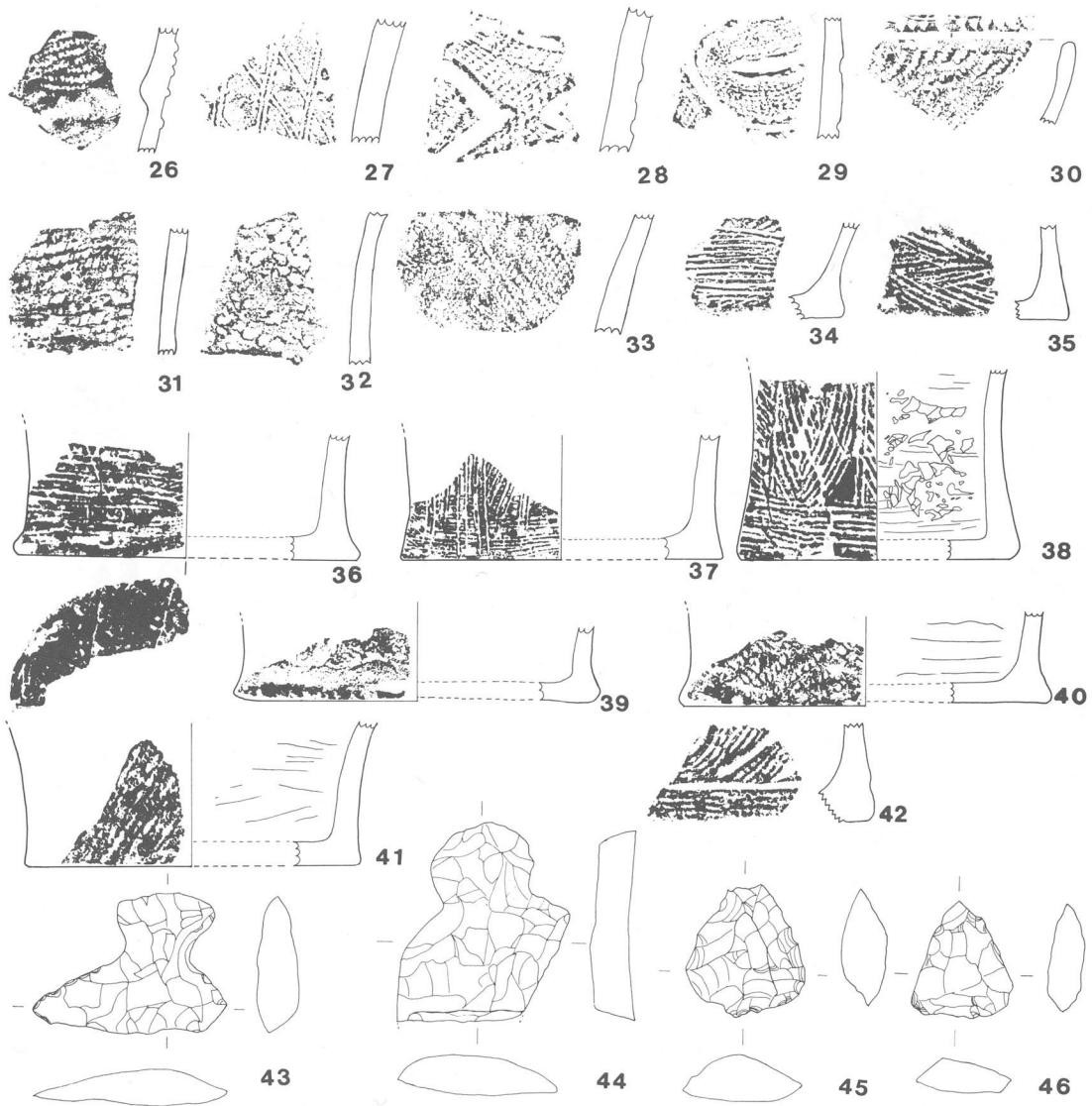
第25図 縄文時代前期の遺物（その1）（1：3）

縄文時代前期の遺物（第25・26図）

土器 1. 櫛状工具による神ノ木式。2. 三角状竹管文土器。3. 爪型文土器。4. 竹管押引文土器。5. 斜縄文の土器で補修孔がある。6～7. 有孔の諸磯b式。8～10・13は竹管文土器。11・14は粘土紐に押引文を施した土器。12はボタン文貼付土器。16・17・21は浮線文土器。15は深い沈線に櫛状工具による刻目文土器。18. 結節浮線文の十三菩提併行土器。19・20は三角印刻文の籠畑式土器。22 横に三角状の隆帯を四条にめぐらしその上に刻目を施し胴部は縄文土器。23～25は地文に竹管を施し、その上にボタンを貼付した諸磯C式に比定される土器。（以上第25図） 26. 縄文と垂文帯の十三菩提併行の土器。27はやや厚手で竹管によりひし形に施した土器。28と29は半截竹管の両端を使用し連続刺突文を直線・曲線に施した十三菩提併行の土器。30. 斜縄文の甕形土器で、口縁部に竹管で押引施文した土器。31. 縄文を横位に施文した土器。32. あまり明らかでない押圧状縄文。33は縄文を施した深鉢形土器。34は多少はり出した底部で平行沈線をめぐらした土器。35はやや張出しを

もつ底部で竹管により、三角状に施文した土器。36と37は横位及び縦位に竹管で施文した、底部張り出した土器。38. 底部のやや張り出した深鉢形土器で横・縦及び連弧文が施された諸磯C式に併行する土器。39~41は底部の張り出す深鉢形土器で、文様は縄文が施されている土器。42はやや底部が張り出した深鉢形土器で、楕歯状施文具で押し出したと思われる文様がうかがわれる。

石器 43. チャート製の横型の石さじ。44. チャート製縦型の石さじで、胴部から欠損している。45. チャート製の三角形の石鏃。46は灰色のチャート製の石鏃。



第26図 縄文時代前期の遺物 (その2) 26~42(1: 3) 43~46(1: 1.5)

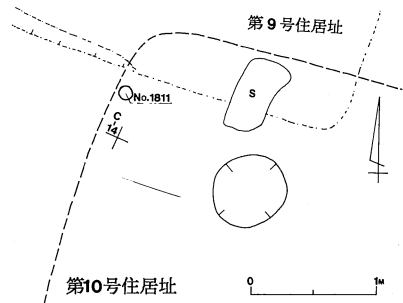
第2節 縄文時代中期の遺構と遺物

第10号住居址 (第27図)

遺構 本住居址は、B13・14グリッドに発見されたものである。この遺構は水田造成時に大方削り取られてしまったため、住居址のプランを適格につかむことができなかった。したがって、床面の一部と西側に発見された埋甕(No.1811)をもって、住居址とすることにした。

遺物 (第29図 1～3)

土器 1. 埋甕の底部胎土は粗製。文様は横位に不規則な沈線文。2・3 曾利Ⅱ式。

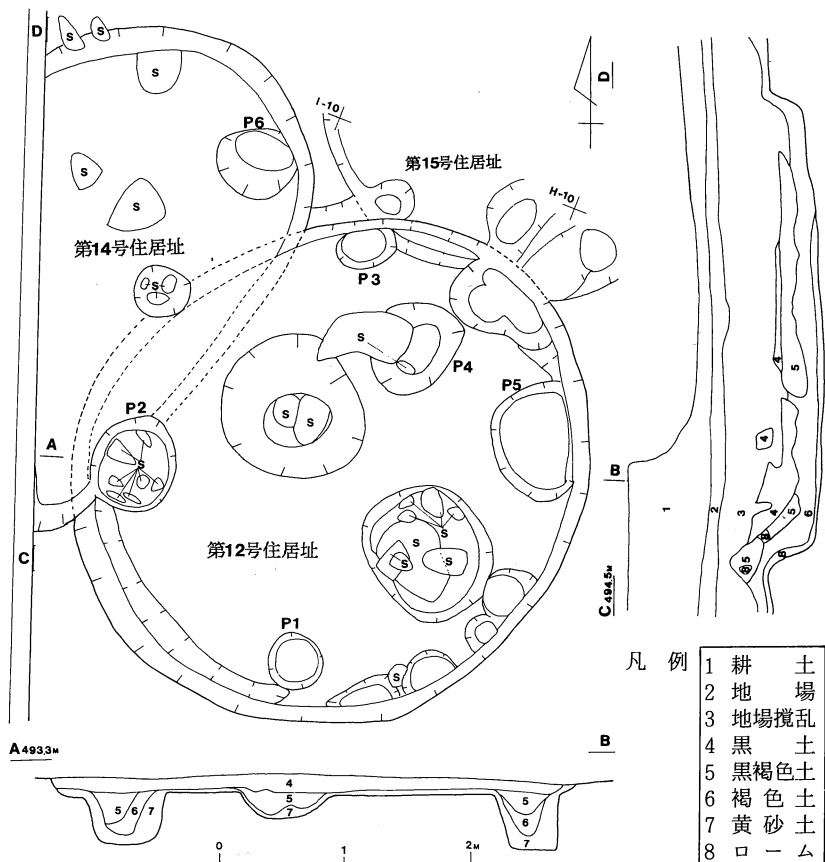


第27図 第10号住居址実測図

第12号住居址

(第28図)

遺構 本住居址は、G・H・Iの7～9グリッドに発見されたものである。住居址の西側は第14号住居址によって切られ、北側は第15号住居址と接触している。南北4.15m、東西は切られているが約4m内外と推定される。支柱穴はP1 P2・P3・P5を当ててみた。直径45cm～70cm内外で、深さは36～47cmである。そのうちP2には小石が詰められていた柱穴であった。炉址は炉石が抜き取られていて、石囲炉の形態をとどめていないが、焼土は広く認められた。床面上には石が露出している床である。



第28図 第12号・第14号住居址実測図

遺物（第29図4～13、図版12～5）

土器 5・6は深鉢形土器の口縁部で、粘土紐を縦に貼付した縄文時代中期後葉の初頭に位置される土器。4・7～10は隆帯に爪型文や彫目をもつ曾利Ⅱ式。11. 綾杉文の曾利Ⅲ式の土器。

石器 12. えぐりの深い黒曜石の石鏃。13. 頭部を欠いている黒曜石の石鏃。

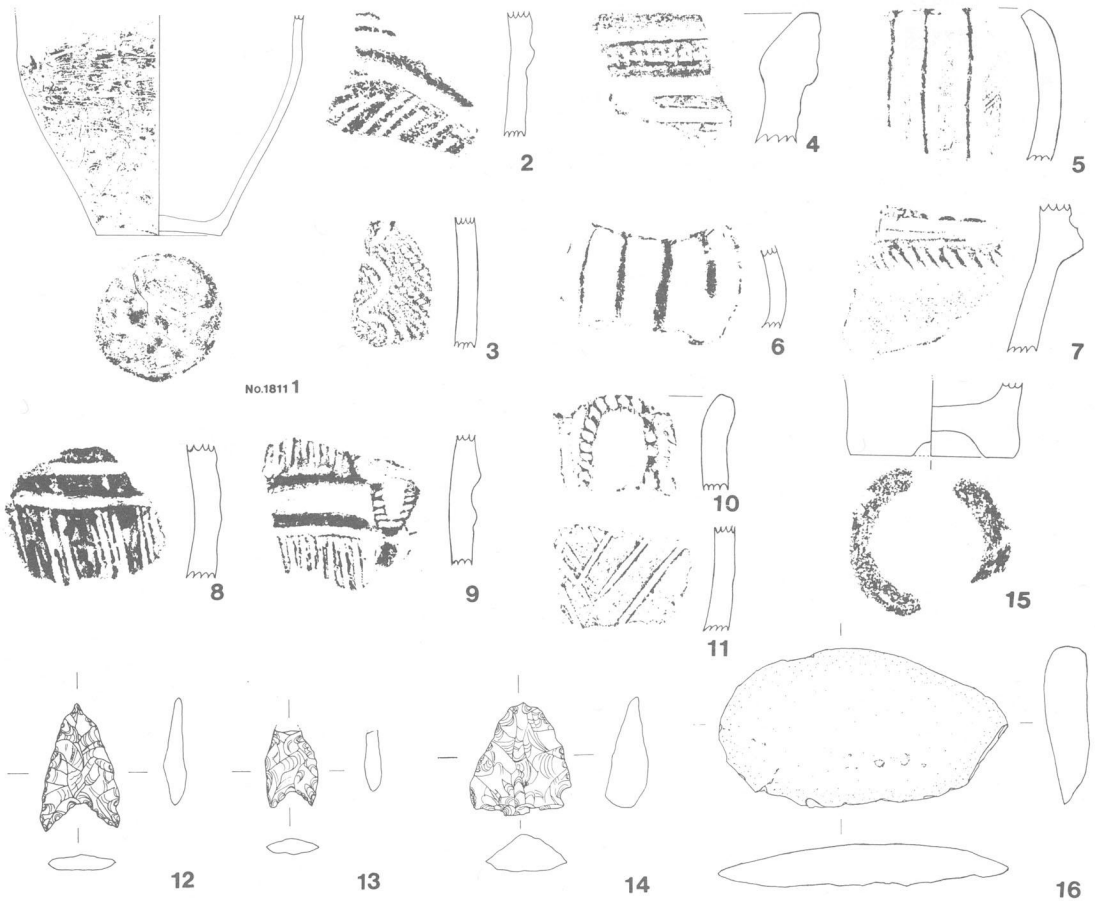
第14号住居址（第28図）

遺構 本住居址は、I・Jの8・9グリッドに発見されたもので、西側約半分は道路と水路の下に潜り込んでいるため、すべてを調査することはできなかった。床面の施設としては、P6と第12号住居址のP2が柱穴として再利用されたかもしれない。炉址も焼土も検出できなかった。

遺物（第29図14～16）

土器 15. 上底土器の底部で左右に一对のくぼみがある土器。

石器 14. 裏面が平らでやや部厚きぎみで、基部が平らな黒曜石の石鏃。16. 硬砂岩の横刃形石器。

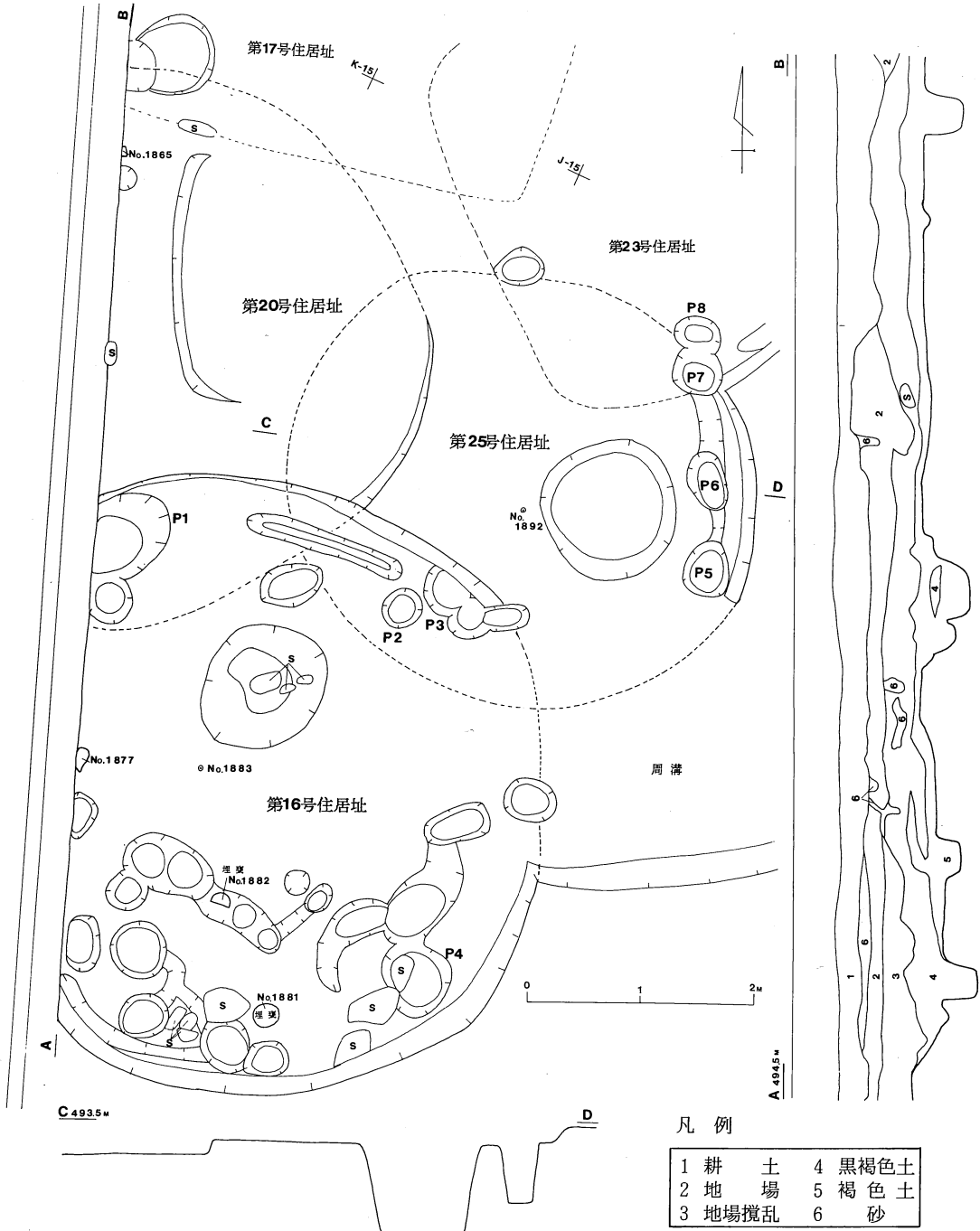


第29図 第10号（1～3）・第12号（4～13）・第14号（14～16）住居址出土土器拓影及び石器実測図

1（1：6） 2～11・15・16（1：3） 12～14（1：1.5）

第16号住居址（第30図）

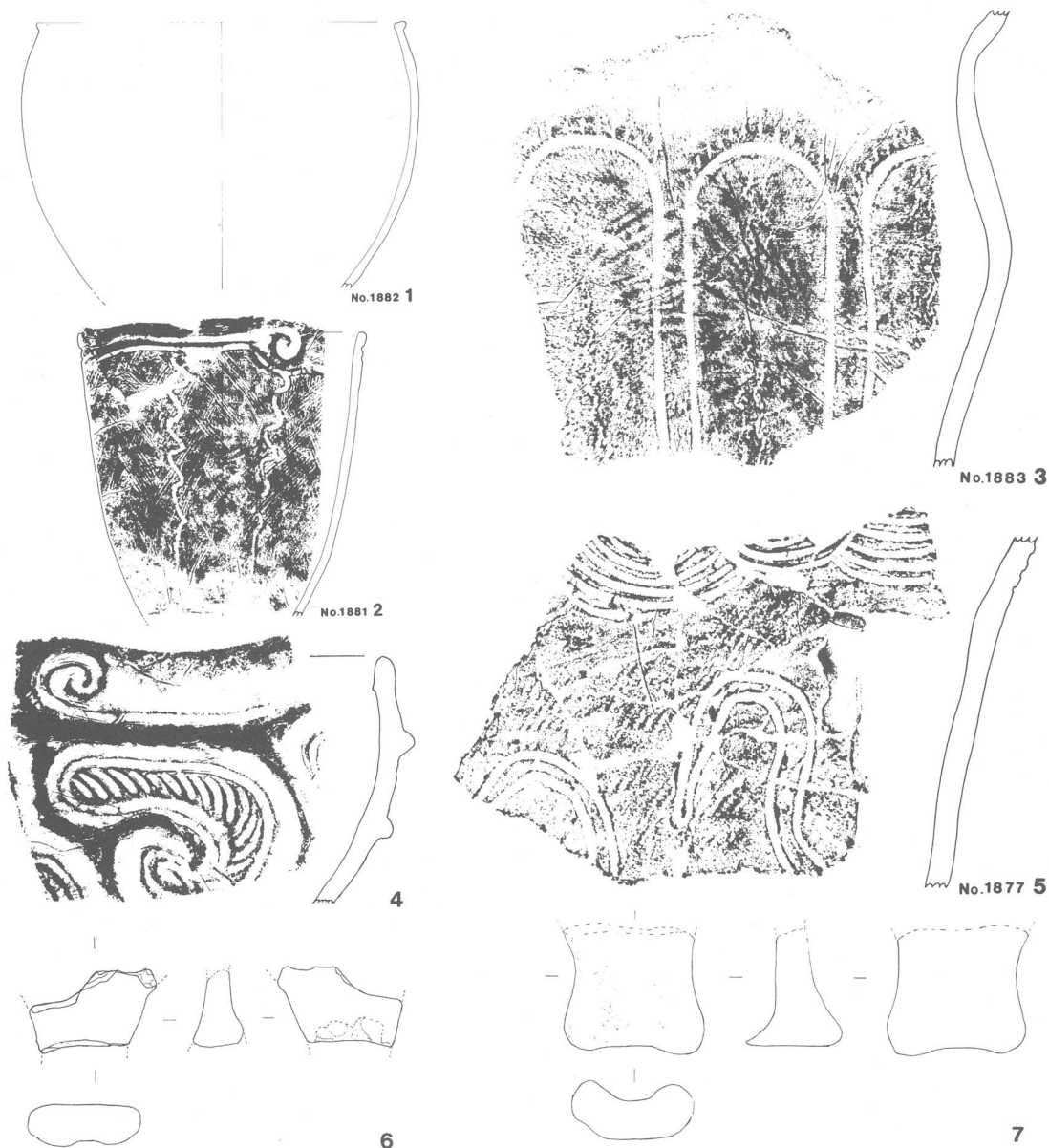
遺構 本住居址は、H～Kの1～13グリッドに発見されたものである。この住居址は第20号及び第25号住居址を切って作られたものであり、西側は道路敷のため発掘できなかった。また古墳時代に



第30図 第16号・第20号・第25号住居址実測図

なってからこの場所に堅錐1号古墳が営まれたため、その周溝が住居址の中間を切った形となっている。住居址の規模は南北が2m、東西は道路敷のため不明であるが、大方同形をなすものと思われる。

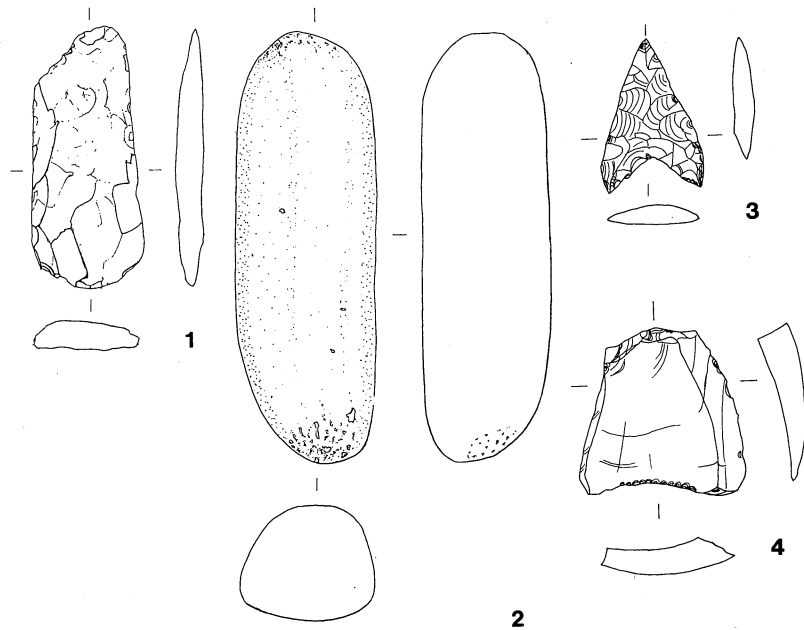
柱穴はP1、P2、P4は確認でき得たが、他の1個はたぶん道路敷中にあると考えられる。炉址は中央やや北寄りにあり、炉石は古墳の周溝にて破壊されたようである。そのほか床面には小ピットが認められたが、その性格については明かにするまでには行かなかったが、埋甕No.1882があり、外側にNo.1881が検出されたことにより、本住居址は拡張による住居址であることが確認された。



第31図 第16号住居址出土土器拓影 1・2(1:6) 3~7(1:3)

遺物 (第31・32図
図版12-2・13-3)

土器 1. 無文の甕形土器。2. 渦巻文と懸垂文の間を綾杉文で埋めた土器。3. 楕円状沈線文の頸部に刺突文を施しその中に結節文を配した土器。4. 渦巻文土器の口縁部。5. は地文に縄文を施し頸部に沈線による弧状文が描かれた土器。以上曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される土器。6 は土偶腰部。7. 土偶の脚部である。



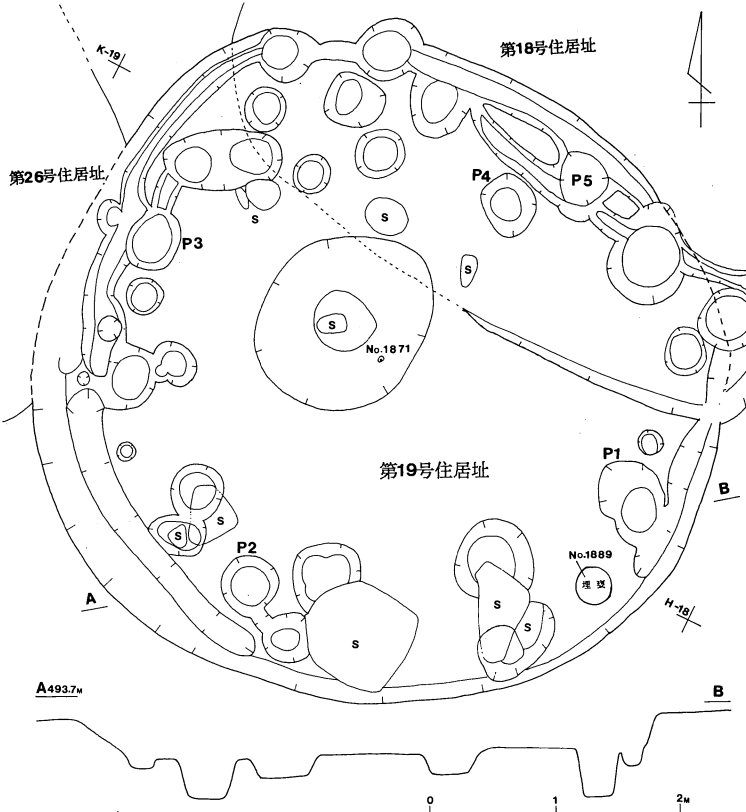
第32図 第16号住居址出土石器実測図 1・2 (1: 3) 3・4 (2: 3)

石器 1. 硬砂岩の打製石斧。2. 棒状磨石。3は石鏃。4. 二方に刃部を持つ石器。

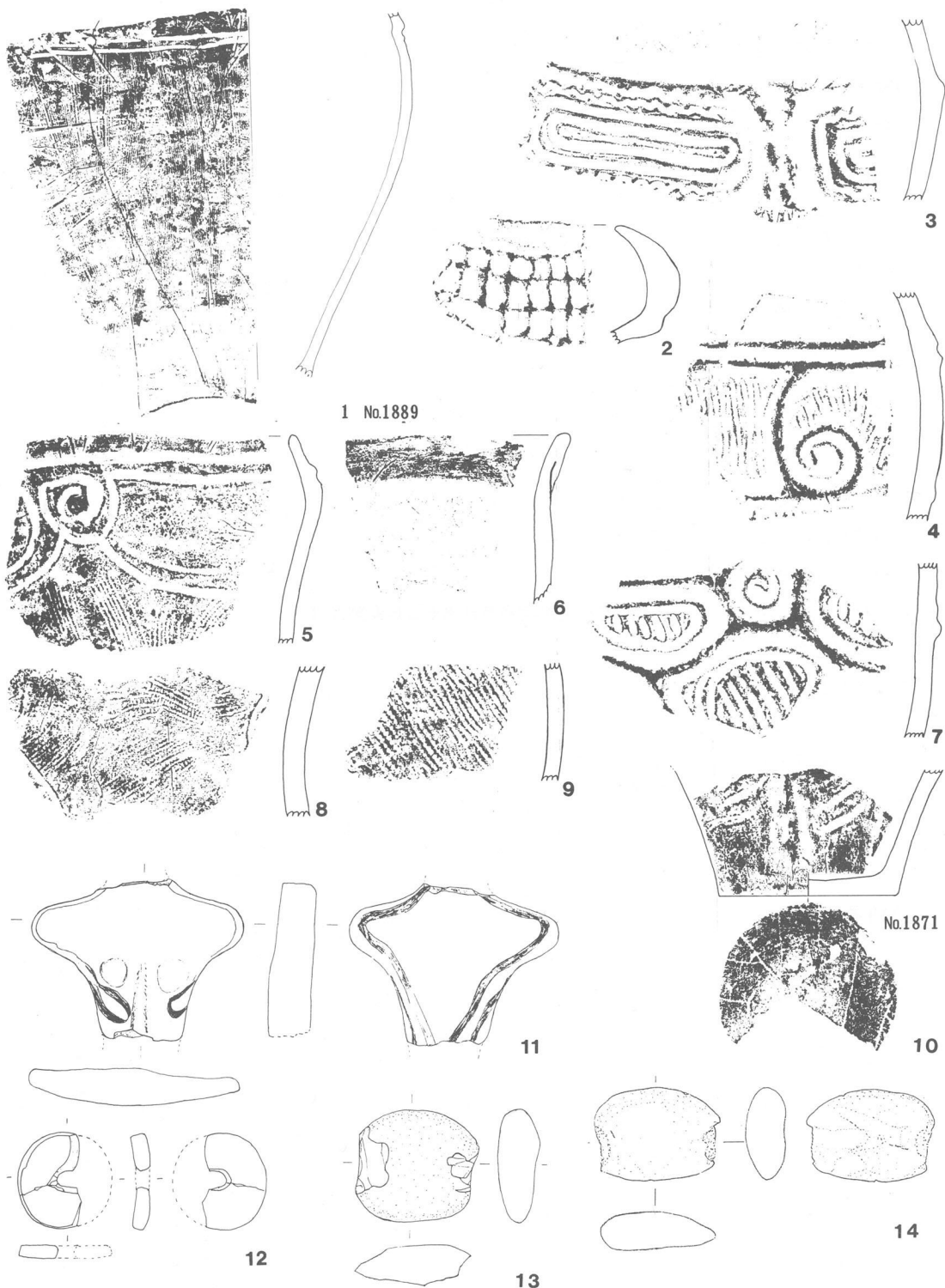
第19号住居址

(第33図)

遺構 本住居址は、H・I・Jの17～19グリッドに発見されたもので、古墳のほぼ中心に近い個所で、隣接する18号弥生の住居址と切り合って出土した住居址である。住居址の規模は東西5.4m、南北5.5mではほぼ円形をなしている。壁は北側は18号にて切られているが他は30～40cmの壁高



第33図 第19号住居址実測図



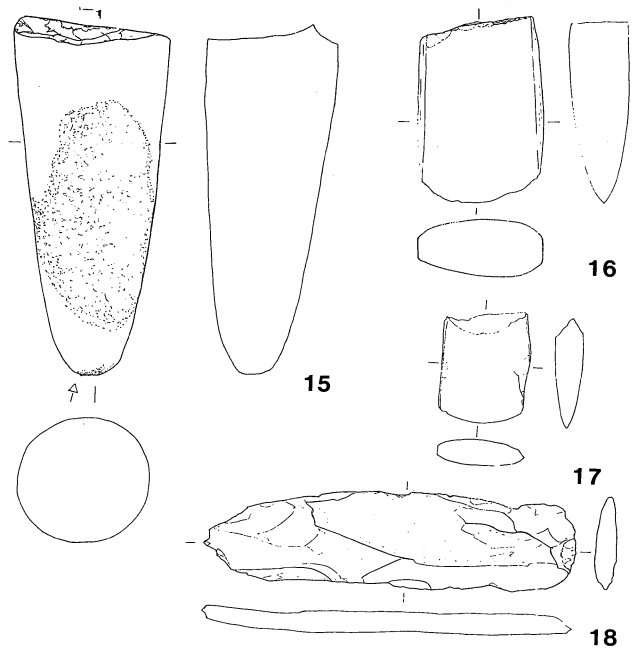
第34图 第19号住居址出土土器拓影及び石器実測図 1 (1:6) 2~13 (1:3) 14 (1:1.5)

が確認された。柱穴はP 1～P 4と考えられるが、他にも柱穴と思われるピットが認められる。周溝も壁際にそって設けられている。炉址は中央やや南寄りにあるが、炉石は抜き取られている。埋甕No. 1889は住居址の東南壁に接して発見された。

遺物 (第34・35図・図版11-1・13-4、14・16-2)

土器 1は器高34cm、口径25.5cmで口縁部を欠いた深鉢形土器である。口唇に二条の沈線文と器面全体に縦の細線を施した曾利Ⅲ式に比定される土器。2. 粘土紐を縦と横に貼付けた曾利Ⅰ式に比定される土器。3. 縄状の隆帯の区画あり、その中に沈線が施してある曾利Ⅱ式土器。4. 隆帯に渦巻文の曾利Ⅱ式の土器。5. 沈線渦巻文土器の口縁部。6. 無文で口縁が折返し土器で曾利式には見られない土器。7. 隆帯渦巻文土器。8と9は縄文土器。10. 木葉痕の付された曾利Ⅲ式の土器。11. 土偶の胸部。12. 土器を利用した有孔円板。

石器 13. 緑色岩の石錘。14は硬砂岩の小形の石錘。15. 硬砂岩敲打製石斧。16と17は緑色岩の磨製石斧。18. 緑色岩の石匙である。



第35図 第19号住居址出土石器実測図 (1:3)

第20号住居址 (第30図)

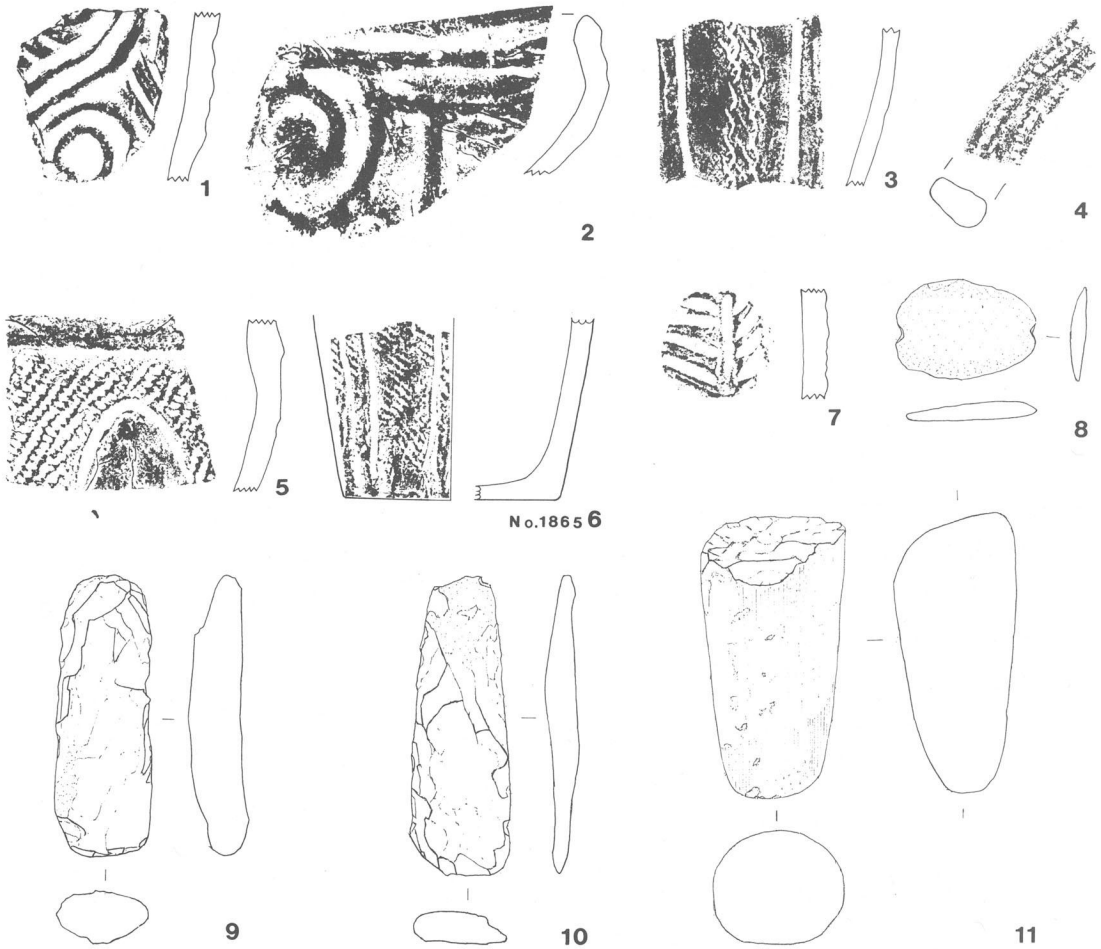
遺構 本址は、KLの12～14ゲリッドに発見された住居址で、南側は第16号住居址で切られ、東側は第25号住居址を切り込み、北側は第17

号住居址 (弥生時代) に切込まれ、西側は道路敷となり、主体部が半分以上破壊された住居址である。したがって、柱穴や炉址は検出されなかった。ただし、住居址の中央部に堅い叩きが認められているに過ぎない住居址であった。

遺物 (第36図)

土器 1. 隆帯にて横位又は渦巻文を構成した曾利Ⅱ式土器。2. 深鉢形土器の口縁部で文様は平な隆帯で縦及び渦巻文状に施文した曾利Ⅲ式と考えられる土器。3. 深鉢形土器の胴部破片で、縦に沈線で区画した中に縄文による結節文を施した土器。4. 土器の把手破片。5. 斜縄文と磨消文のある土器。6. 深鉢形土器の底部で、地文が縄文に篋で縦に区画した曾利Ⅲ式に比定される土器。7は篋状工具で施文した土器を“メンコ”に再使用したもの。

石器 8. 緑色岩の石錘。9と10は短冊形打製石斧。11は緑色岩の敲打製石斧頭部破片。



第36図 第20号住居址出土土器拓影及び石器実測図 (1: 3)

第21号住居址 (第38図)

遺構 本住居址は、E・F・Gの18、19、20にまたがって発見された住居址である。住居址の南側は第22号住居址で切り取られ、東側は第7号住居址と古墳の周溝によって切り取られたため、住居址の壁の残ったのは西壁の一部のみである。柱穴はP1、P2のほかP3で他は古墳の周溝によって削り取られたものと考えられる。炉址は検出できなかった。

遺物 (第37図・39図3～9)

土器 1. 隆帯で区画し半截竹管で縦に施文した深鉢形土器曾利Ⅱ～Ⅲ式。2. 粘土紐貼付の曾利Ⅰ式土器。3. 内湾した口縁部東海系土器。4. 隆帯で楕円に区画した曾利Ⅲ式。5・6 竹管文曾利Ⅱ式。
石器 7. 表自然面の分銅形石器。8. 粘板岩の短冊形打製石斧。9. 硬砂岩縦形石斧。

第29号住居址 (第38図)

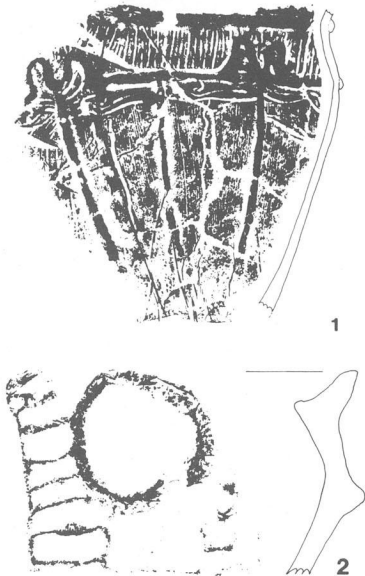
遺構 本住居址はE・F・Gの20～22グリッドに発見されたものである。この住居址は南側は第

21号住居址と切り合い、東から北側は古墳の周溝で破壊され、西側の一部と南側の一部に壁を認めるだけで、柱穴も確認がとれなかった住居址である。

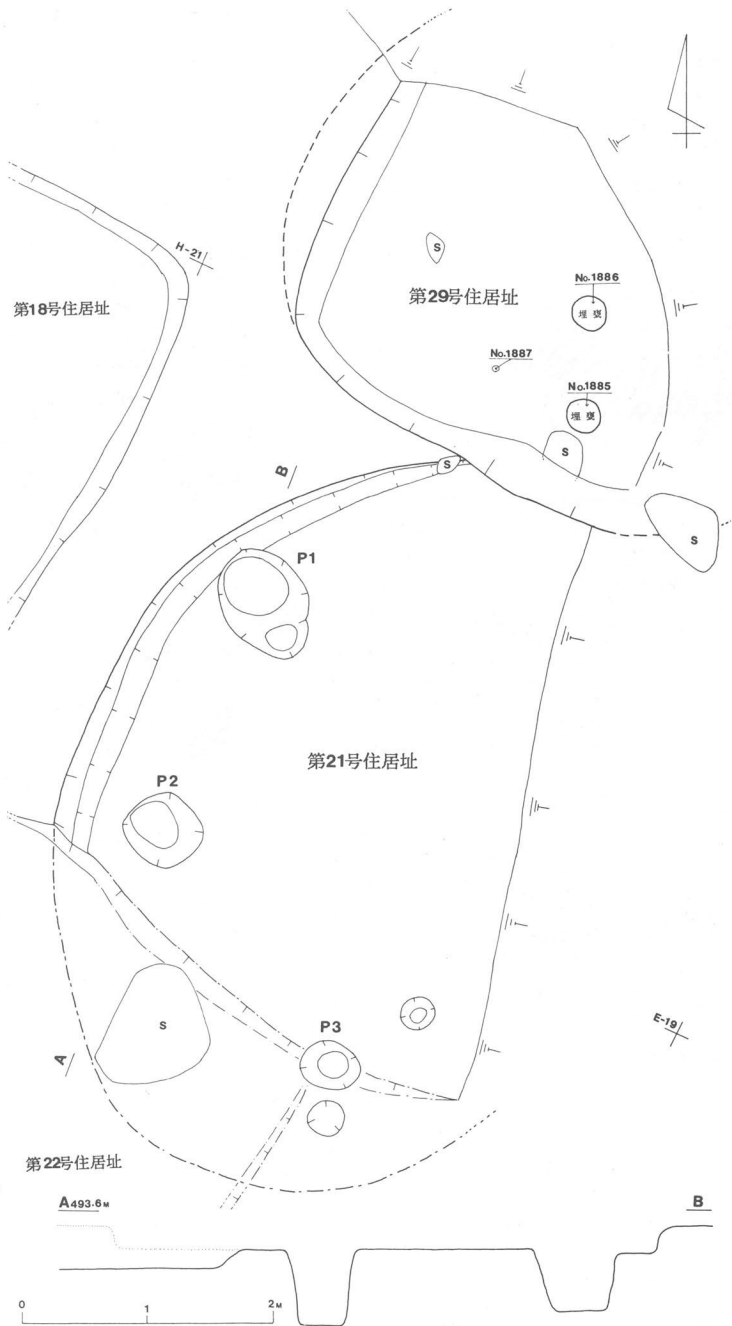
遺物 (第38図10~17・図版13-4, 5)

土器 10. 口縁部を欠いている埋甕土器で、隆帯による渦巻文と綾杉文を施した曽利Ⅱ~Ⅲ式の土器。11. 粗製無文の埋甕土器で10と同時代と考えられる。12. 縄文の地文に隆帯で区画した曽利Ⅲ式の土器の口縁部。13. 波状口縁の深鉢形土器で、口縁にそって円形・楕円形に隆帯で囲んだ曽利Ⅲ式土器。14. 連続刺突文の曽利Ⅱ式土器。15. 綾杉文の曽利Ⅲ式土器。

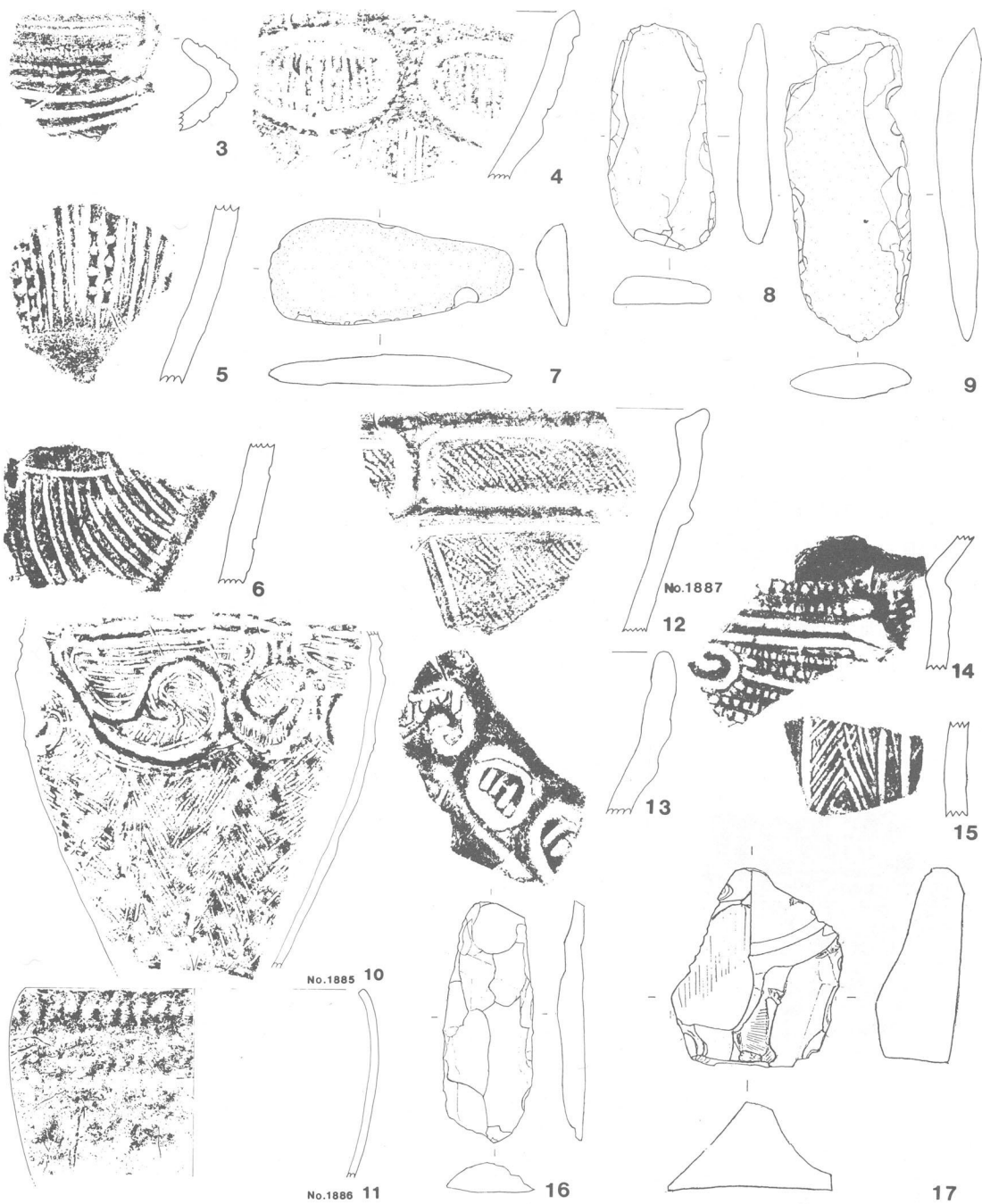
石器 16. 緑色岩短冊形の打製石斧。17. スクレパー。



第37図 第21号住居址出土土器拓影
1 (1:6) 2 (1:3)



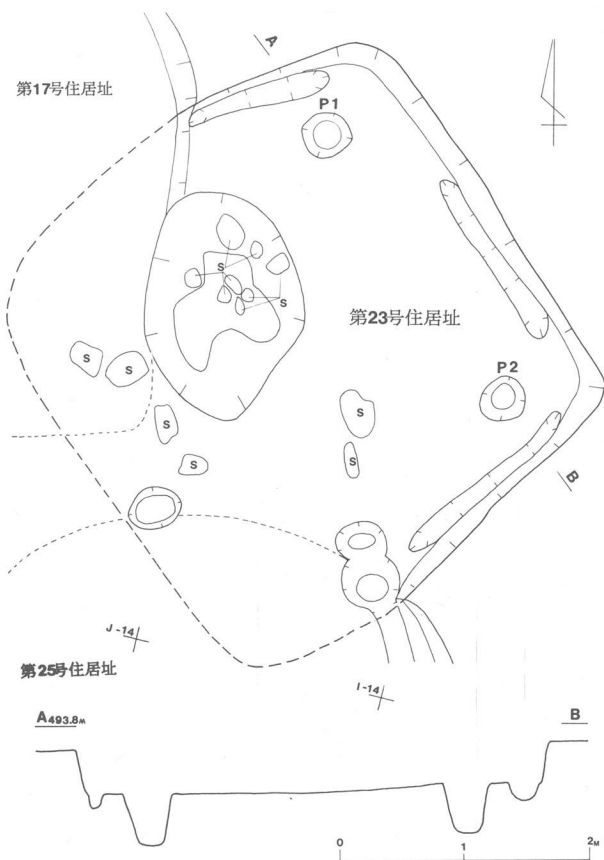
第38図 第21号・第29号住居址実測図



第39図 第21号(3~9) 第29号(10~17) 住居址出土土器拓影及び石器実測図
 3~9、12~16(1:3) 10、11(1:6) 17(1:1.5)

第23号住居址 (第40図)

遺構 本住居址は、H・I・Jの14~16グリッドに発見された住居址で、西側は弥生の第17号住居址、南側は縄文の第25号住居址を切ってつくられた住居址である。従って住居址の壁は北から東側



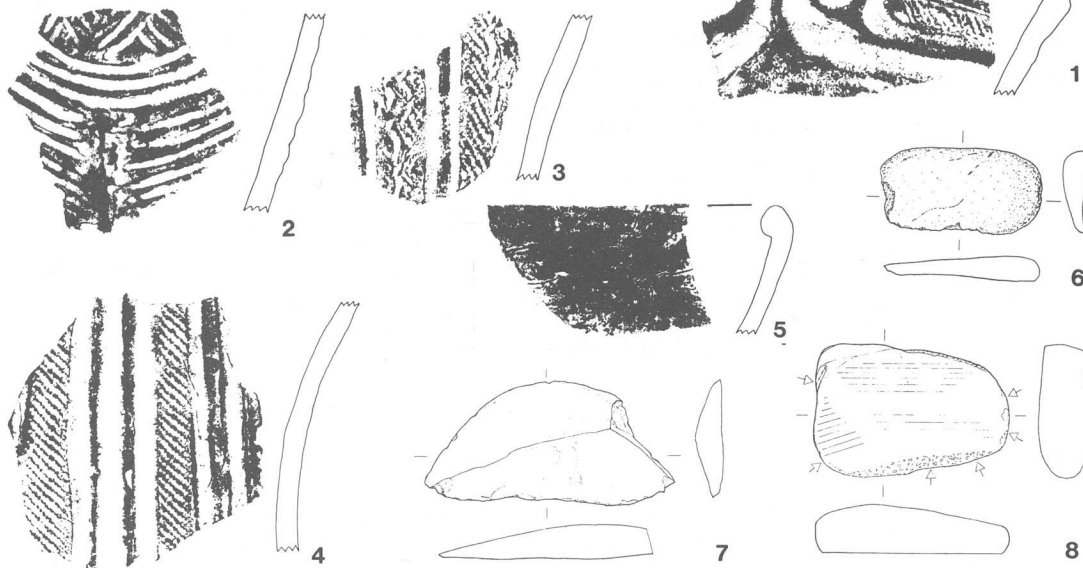
第40図 第23号住居址実測図

の一部に残っただけとなった。柱穴 P1 と P2 は本住居址に属する柱穴と考えられるが、他のピットとの関係は不明である。住居址の規模は残存壁から 4.1 m 内外の隅丸方形の住居址で、一部に周溝が認められる。炉址は中央やや西寄りに設けられているが、炉石は抜き取られ残石が残っている。

遺物 (第41図)

土器 1. 渦巻文と斜縄文の曾利Ⅲ式。2. 隆帯と篋状工具沈線文曾利Ⅱ式。3~4. 縄文地文と沈線文の曾利Ⅱ~Ⅲ式。5. 無文鉢形土器。

石器 6 は石錘。7. 横刃形石器 8. 砂岩の磨石である。



第41図 第23号住居址出土土器拓影及び実測図 (1: 3)

第24号住居址

(第42図)

遺構 本住居址は、F・G・Hの14～16グリッドに発見されたもので、北側は第22号弥生時代の住居址と切り合い、東側は古墳の周溝に切りとられているので、壁の残った個所は西側の一部となってしまう。柱穴はP1～P4と考えられる。周溝は西側に添って設けられているところから他の部分にも設けられているものと考えられる。炉址は中央やや西寄りに設けられているが、炉石は抜き取られている。住居址の規模は残存の壁から南北5m、東西もその位の隅丸方形のプランをもった住居址と推定される。

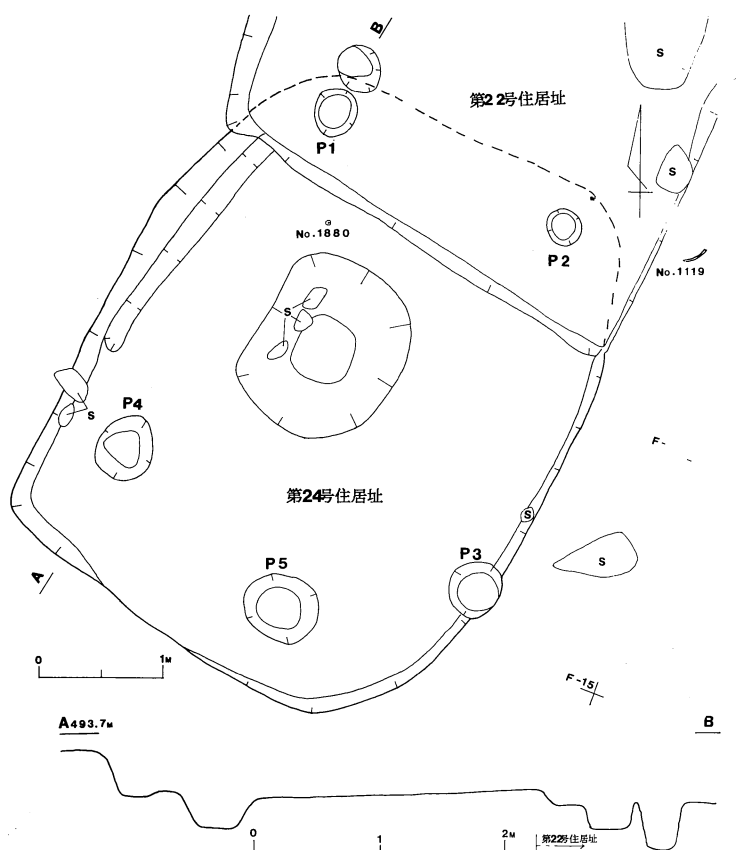
遺物 (第43・44図、表紙
図版12-4・14)

土器 1. 高さ30cm、口径19cmで口縁部に1個のミミズクの文様を付した把手があり、胴部には縦に隆帯と篋状工具で描いた沈線文。頸部の締りの強い新潟県の塔ヶ崎土器の系譜を引いた、やや変形したキャリパー形を示した曾利Ⅱ～Ⅲ式の深鉢形土器。2. 口縁に添って楕円形の隆帯で囲み、内部に刺突文と併行沈線を配した深鉢形土器。3. 口縁部に隆帯による楕円の区画文をつくり、内部に隆帯による波状文を描き、区画と区画の中間に粘土紐による縄目文を垂下している。胴部には唐草文と竹管文が施された土器。4～8. 縄文地文に沈線や斜縄文を施した土器の口縁部。9. 底部に木葉痕のある土器。10. 口縁部が少し厚くなり、縦に沈線が施された土器。11. 綾杉文が施された土器。12は左手がない土偶の上半身で、文様から縄文中期後葉と考えられる。

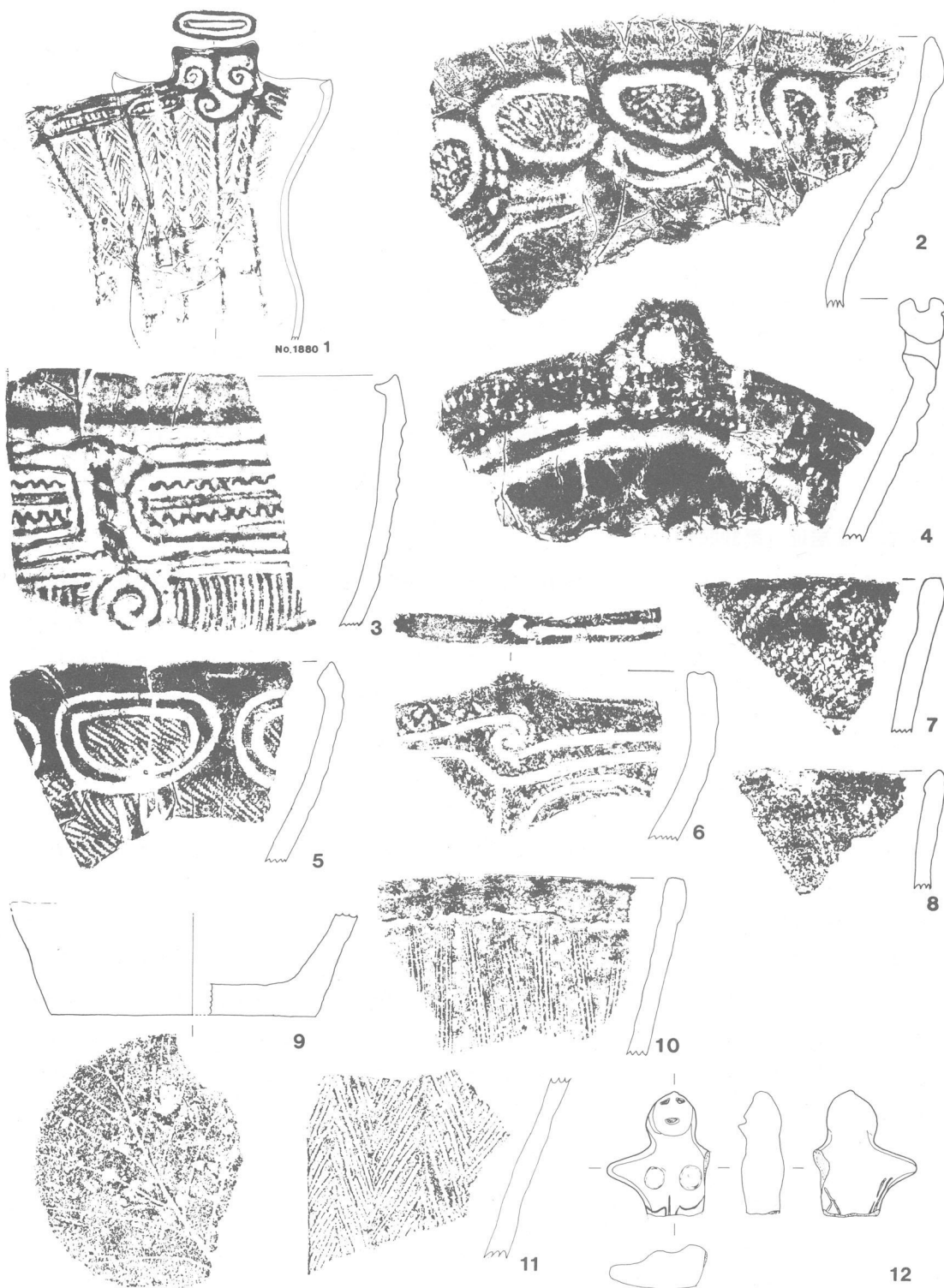
石器 1. 緑色岩打製石斧。2. 小形局部磨製石斧。3. 小形打製石斧。

遺構外出土遺物

第44図4と5 (No.1119)は第24号住居址外東より重複して発見されたが、遺構は確認できなかった。4は口縁部破片で、口唇には重ね合せた様に見える溝状痕がある。口縁外側にわずかであるが折返したような口縁部がついている無文深鉢形土器。5. 無文の深鉢形土器。曾利のⅢ式に併行する土器と考えられる。

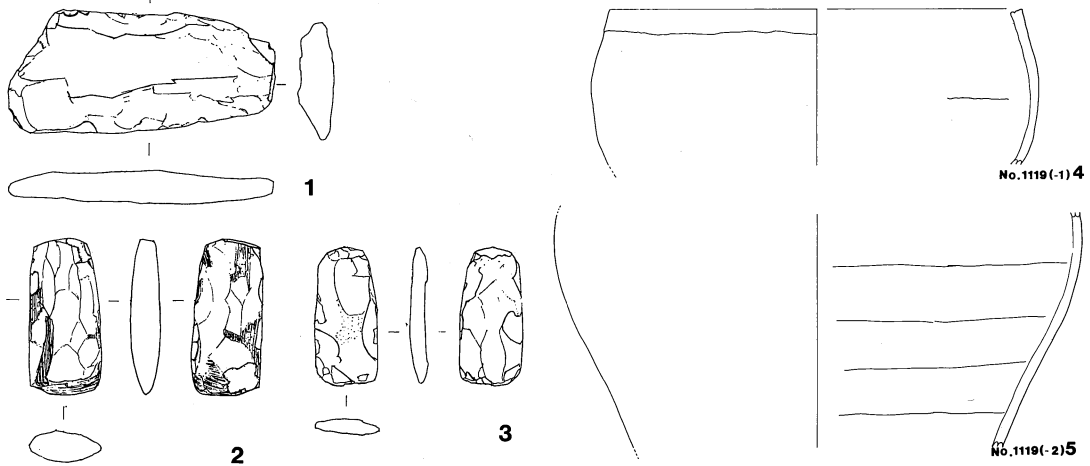


第42図 第24号住居址実測図



No.1880 1

第43图 第24号出土土器拓影 1(1:6) 2~12(1:3)



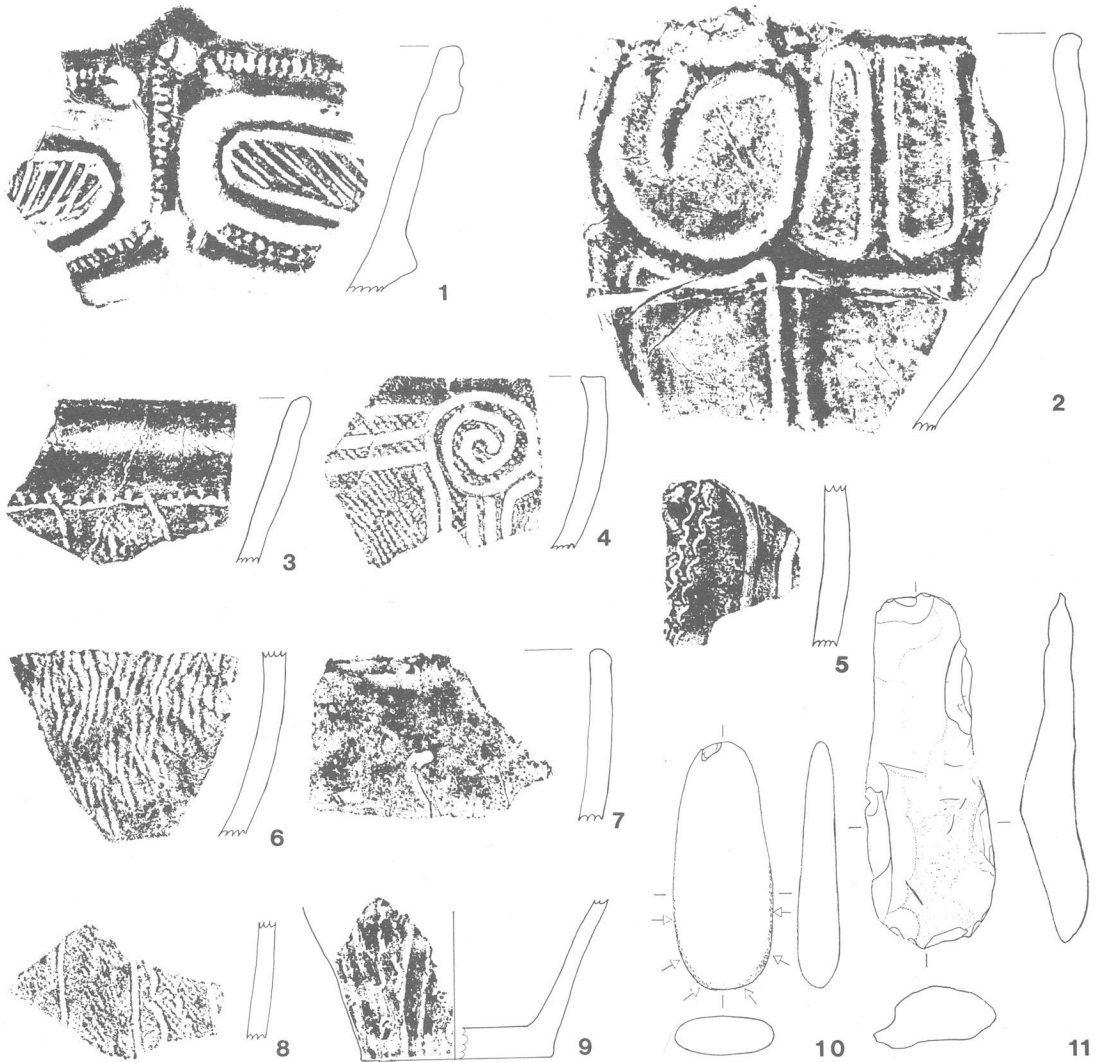
第44図 第24号住居址出土石器及びNo.1119の土器実測図 1~3 (1: 3) 4・5 (1: 6)

第25号住居址 (第30図)

遺構 本住居址は、H・I・Jの12~14にまたがって発見された住居址で、北側は第23号住居址、西側は第20号住居址で切られ、南側は古墳の周溝と第16号住居址によって切られているため、本住居址の壁は東側の一部に残存したのみとなってしまった。壁に添ってP 5~P 8のピットからわかれているが、周溝内にあるところから柱穴としたらよいかどうか問題である。しかしその中でP 7は柱穴としてもよいピットではないかと思われるものである。そのほか第16号住居址にあるピットのうち本住居址の柱穴があるかも知れない。しかし現地で見ただけでは明かにすることはできなかった。住居址中に径1.2m×1.25m、深さ80cmの竪穴が検出されたが、ここの竪穴は貼床もしていないところから、住居址内にあったものか、あるいは廃絶後に掘られたものか明らかでなかったが、竪穴の位置からすると後で掘られたものではないかと思われる。

遺物 (第45図)

- 土器** 1. 口縁部が波状で隆帯に連続刺突文が縦横に施され、楕円区画文内には竹管による斜線文が引かれた曾利Ⅱ式の深鉢形土器。2. 隆帯による楕円形や渦巻文の区画がなされた波状口縁の深鉢形土器で曾利Ⅲ~Ⅳ式と考えられる。3. 口縁部が無文で、頸部以下は地文に縄文を施した平口縁の深鉢形土器で、曾利Ⅲ式に併行すると考えられる土器。4. 地文が縄文で平行沈線文と渦巻文の施された曾利Ⅱ~Ⅲ式に併行する土器。5. 縄文による結節文の施された曾利Ⅱ~Ⅲ式の土器。6. 斜縄文の曾利Ⅱ~Ⅲ式の土器。7. 無文の平縁の深鉢形土器で曾利Ⅱ~Ⅲ式と併行すると考えられる土器。8. 結節縄文のある磨消文土器でやはり曾利Ⅱ~Ⅲ式の土器。9. 結節縄文のある深鉢形土器の底部。
- 石器** 10. 緑色岩の敲打石器。11. 硬砂岩の短冊形打製石斧。



第45図 第25号住居址出土土器拓影及び石器実測図(1:3)

第26号住居址(第46図)

遺構 本住居址はL・Mの17・18グリッドに発見されたもので、東側は第19号住居址の壁と接し、南側は土壇2が切っている。西側は第28号住居址に切り込まれていて、本体は半円形に残った状態の住居址となってしまった。はっきりとしたプランは不明である。柱穴はP1・P2・P3で他の柱穴については不明である。東側に埋甕(No.1890)が出土したが、炉址は不明である。

遺物(第47図1~8・図版13-1)

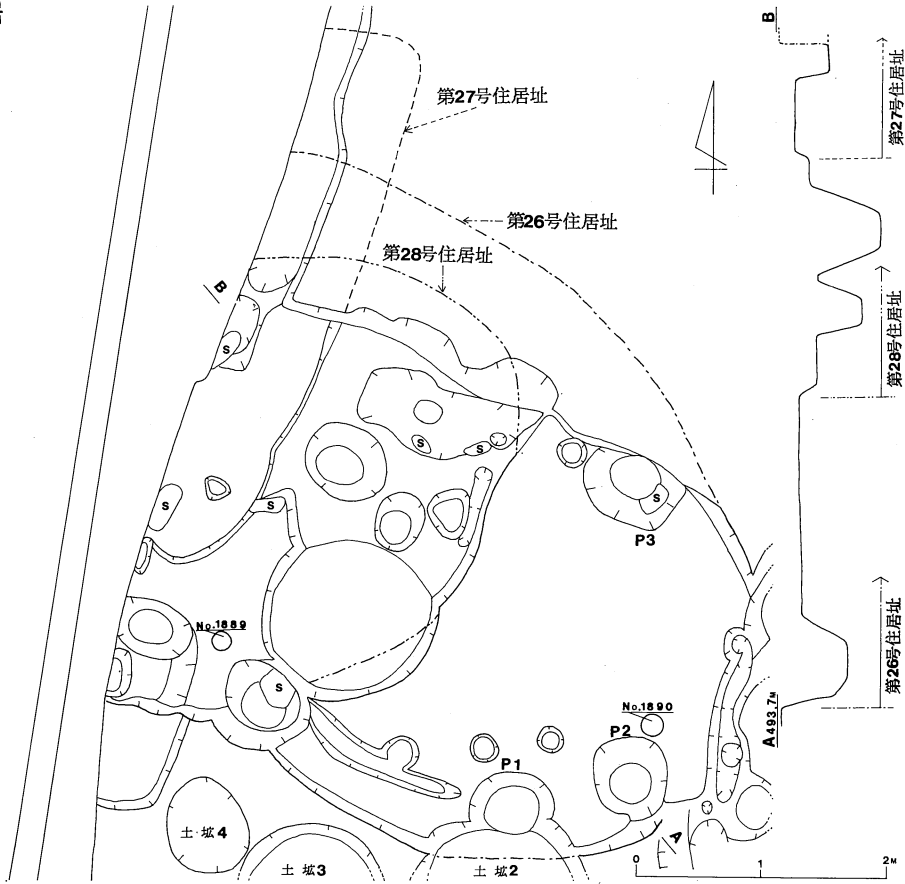
土器 1. 口縁を欠き唐草文と綾杉文の深鉢形土器。2.3. 唐草文と刺突文のある曾利Ⅲ式。4は薄手沈線のメンコ土器。5. 隆帯と綾杉文の曾利Ⅲ式。6. 木葉痕のある土器。

石器 7. 黒曜石の石鏃片。8. 黒曜石の錐。

第28号住居

址 (第46図)

遺構 本址はK～Mの17～19グリッドに発見されたもので、東側の第26号住居址に切り込んでおり、西側は道路敷の下にあるため、調査は充分できなかった。また、第27号の弥生時代後期の住居址に切り込まれていたため、完掘することができなかったが、南側に埋



第46図 第26号・第27号・第28号住居址実測図

甕 (No.1889) が出土した。

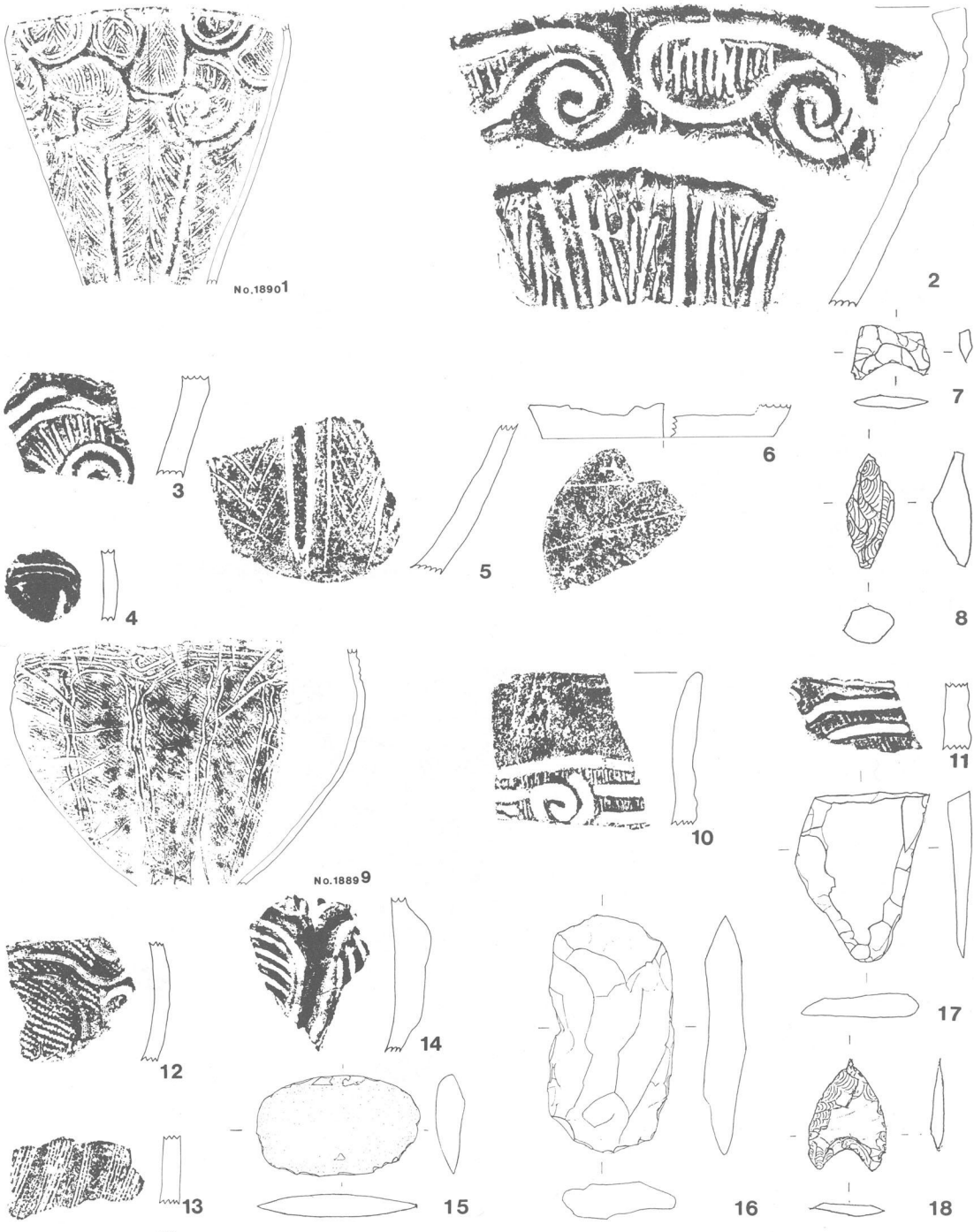
遺物 (第47図9～18・図版12-6)

土器 9. 口縁部を欠き、地文が縄文で口縁部近くに篋書沈線文の渦巻文が施された深鉢形土器。10. 口縁部が無文で頸部に沈線による渦巻文と沈線の上に縦に櫛状工具で引いた土器。11. 地文が縄文で篋描で横位に施文した土器。12. 地文が縄文で篋先を櫛状に割った施文具で唐草文風に文様を施した土器。13. 櫛状工具を縦及び斜状に引いた深鉢形土器の胴部。14. 隆帯と篋描による文様を施した縄文土器。以上曾利Ⅱ～Ⅲ式に併行する土器。

石器 15～17は硬砂岩で、15は横刃形石器。16と17は打製石斧。18は黒曜石の石鏃。

第31号住居址 (第48図)

遺構 本住居址は、E～Gの10～12グリッドに発見されたものである。住居の北側半分は古墳の周溝で削り取られ、東側も水田造成の折、床面まで破壊されてしまっているため、殆んど壁は残っていない状態であった。しかし埋甕と古墳の周溝ぎわに炉址の焼土が発見されたので住居址と考えた次第である。従って住居址の規模等は不明である。



第47図 第26号(1~8) 第28号(9~18) 住居址出土土器拓影及び石器実測図

1・9(1:6) 2~6・10~17(1:3) 7・8・18(1:1.5)

遺物(第49図・図版13-2、12-8)

土器 埋甕が2個体重なって発見され、さらにその埋甕の中より石器が出土した。1. 口縁部に隆

帯による唐草文を描きさらに胴部から底部にかけて垂下させ、その空間に綾杉文を施した土器。2も同類土器。曾利Ⅲ式に比定される土器。

石器 3. 局部磨製石斧。

土坑2号 (第50図)

遺構 本址はK・Lの16・17グリッドに発見されたもので、径は1.4m～1.5m、深さ50cmで立上りは直に近い土坑である。

遺物 (第51図)

土器 1. 把手のついた小形深鉢形土器で、頸部に一列刺突文とその下部に結節文が施された土器。2は1と同様な施文土器。3.地文が縄文で篋状工具で縦に磨消している土器。4. 渦巻文と結節文土器。5. 綾杉文を施した土器。6. 土器片を利用した土錘的な土製品。以上曾利Ⅱ～Ⅲ式に併行する土器である。

石器 7. 磨石。8. チャート製の短冊形打製石斧。

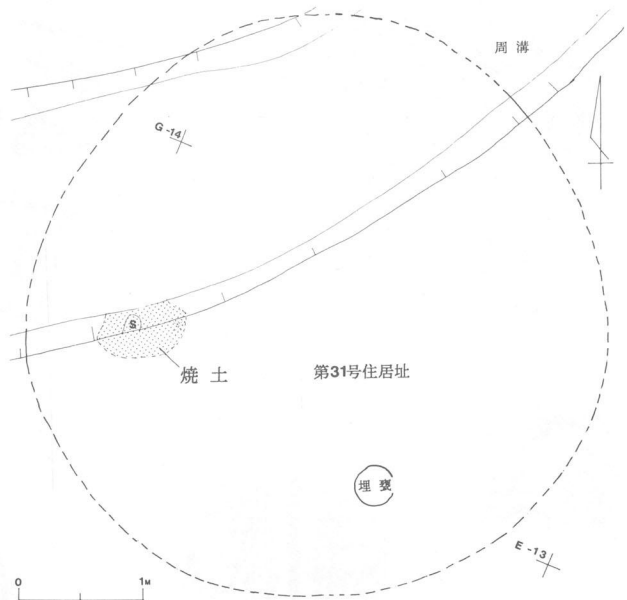
土坑3号 (第50図)

遺構 土坑3号はK・Lの16・17グリッドに発見された。大きさは長径1.25m、短径90cm、深さ38cmの楕円形の土坑である。南側は第17号住居址に北側は第26号住居址にはほぼ接している。

遺物

土器 小破片で文様構成が明らかでないの、拓影を載せないが、土坑2号と同時期の土器片と考えられる。

石器 本遺構からは石器の出土は確認できなかった。



第48図 第31号住居址実測図



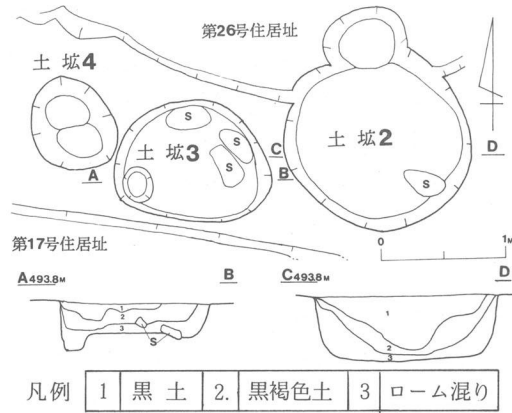
第49図 第31号住居址出土土器
拓影及び石器実測図
1・2 (1:6) 3 (1:3)

土坑4号 (第50図)

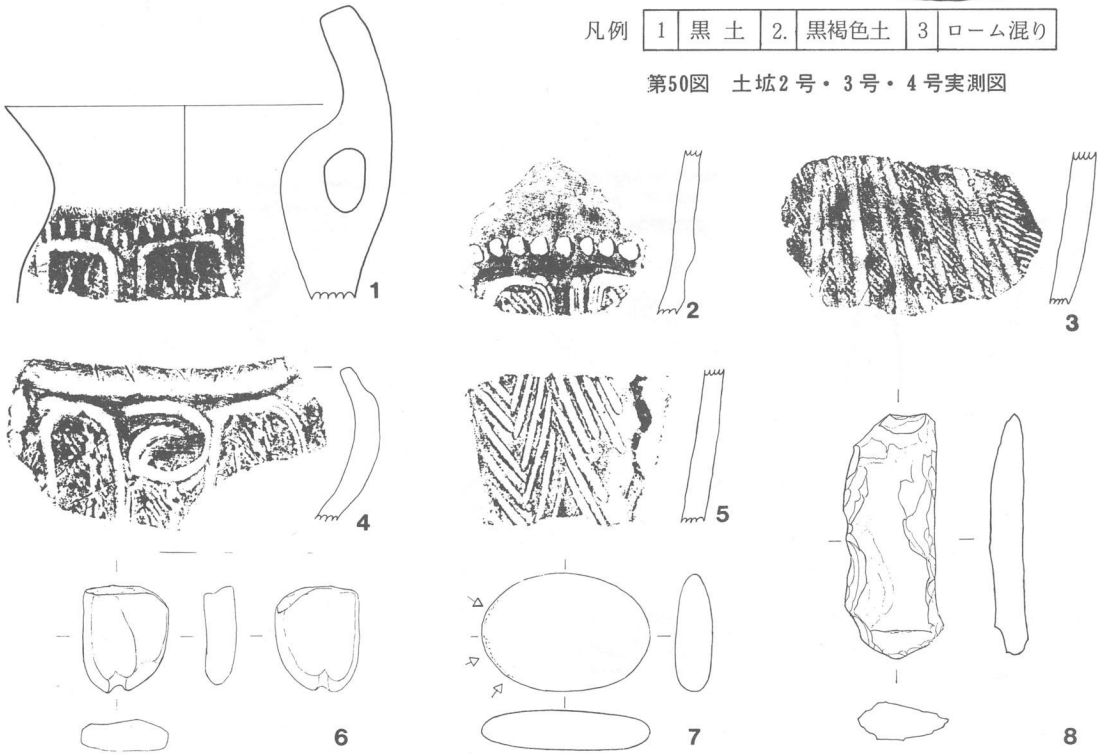
遺構 本址はLの16グリッドに発見されたもので、長径80cm、短径60cm、内底が2個に分かれている土坑で、深さは33cmと24cmの楕円形のものである。

遺物

本土坑からは遺物はなにも検出されなかった。



第50図 土坑2号・3号・4号実測図



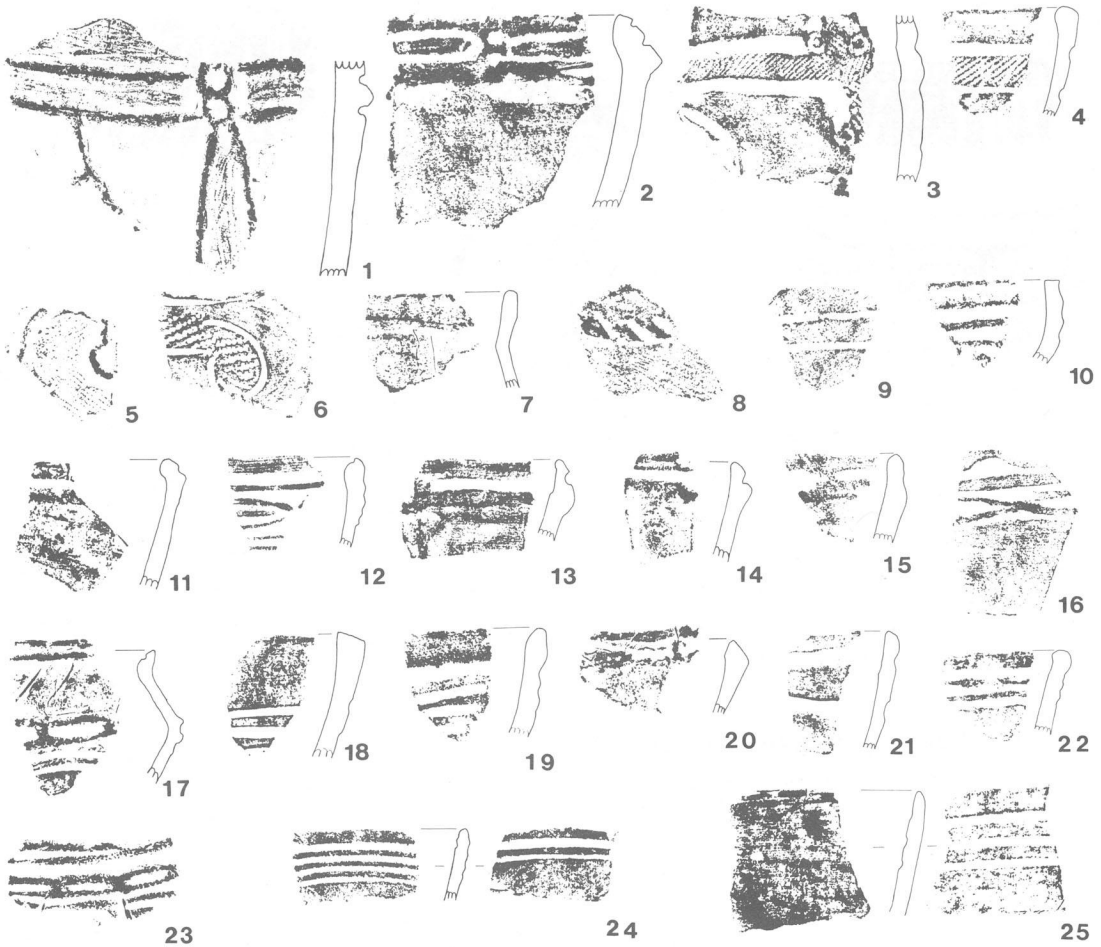
第51図 土坑2号出土土器拓影及び石器実測図 (1:3)

第3節 縄文時代後晩期の遺物
(第52図・図版15)

今回の調査においては、縄文時代後期の遺構を確認することはできなかった。しかし、表採・古墳の周溝・各住居址より遺物は何点か出土したので、その一部を拓影として載せることとした。

第52図の1. 口縁付近に2条の隆帯をめぐらし、その上に「8」の字状文を施した土器 (第10号住居址) 2. 口縁部に2条の沈線をめぐらし、刺突による「8」の字を描き出した無文の深鉢形土器 (第8号住居址) 3. 4 縄文と磨消文の土器で、3は深鉢形土器 (第25号住居址) 4. (第7号住居址)

5. 隆帯文の縄文土器（第7号住居址） 6. 磨消文土器（表採） 7. 無文粗製の折返し口縁の土器（表採） 8. 地文は縄文隆帯に刻目の土器（周溝）以上1～8については掘之内I式併行時の土器と考えられる。 9. 磨消縄文土器（周溝）で掘之内II式併行時の土器と思われる。 10. 口縁付近に2条の沈線をめぐらした、加曽利B式に類似している土器（第7号住居址） 11. 口縁部に隆帯をめぐらしたやはり加曽利B式土器と思われる（第5号住居址） 12. 細隆線状の変形工字文土器（第5号住居址） 13～15. 磨消文で口縁部に一条の隆帯をめぐらしてある土器（第10号住居址） 16. 浮線工字文土器（第1号住居址） 17. 口縁「く」字形の工字文土器（表採） 18～20 沈線文土器の口縁部（表採） 21・22. 併行沈線文土器の口縁部（周溝） 23. 工字文土器（周溝） 以上については永I式併行時の土器片と考えられる。 24. 口縁の表側に4条の内側に2条の沈線の施された、縄文時代晩期の土器（周溝） 25. 表側は無文に対し、内側に3条の沈線文のある土器口縁部（周溝） （ ）内は出土場所



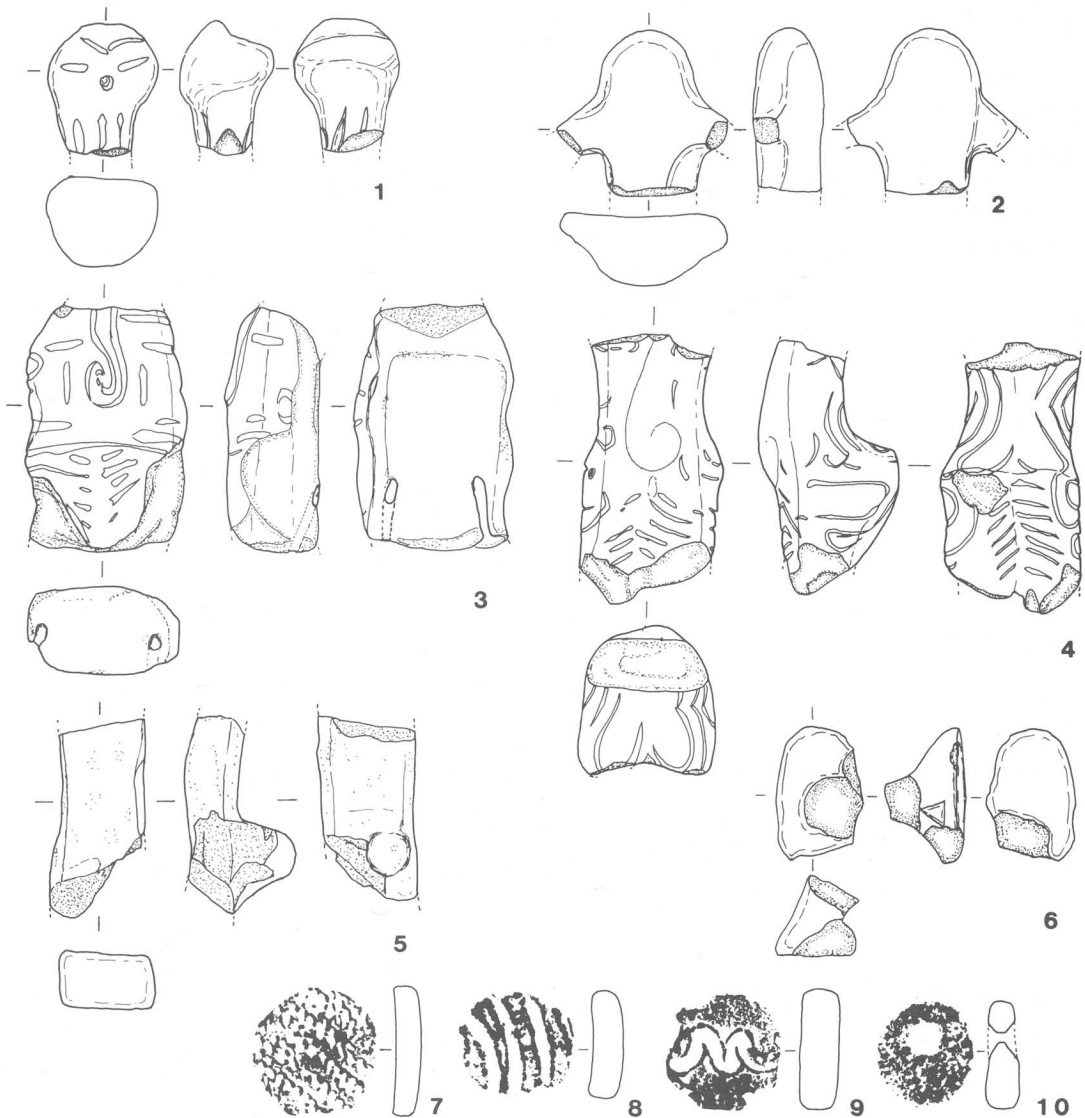
第52図 縄文時代後晩期土器片拓影（1：3）

第4節 土偶及び土製品

(第53図・図版14、16)

土偶 完形品は一点も確認することができなかった。各遺構中にもあげてあるが、他にも出土しているのので、ここにまとめた。1. 周溝より出土の頭部。2. 顔の表情のない素朴なもので表採。3. 第18号住居址出土の胴部。4. 第19号住居址出土の胴部から腰部。5. 第23号住居址出土の胴部から腰部。6. 左足部分と思われるもので表採。以上縄文時代中期後葉と考えられる。

土製品 7. 斜縄文のメンコ。8. 篋状工具による円弧文のメンコ。9. 篋状工具による波状文のメンコ。10. 無文の有孔円盤。以上縄文時代中期後葉と考えられる。



第53図 土偶実測図及び土製品拓影 (1:2)

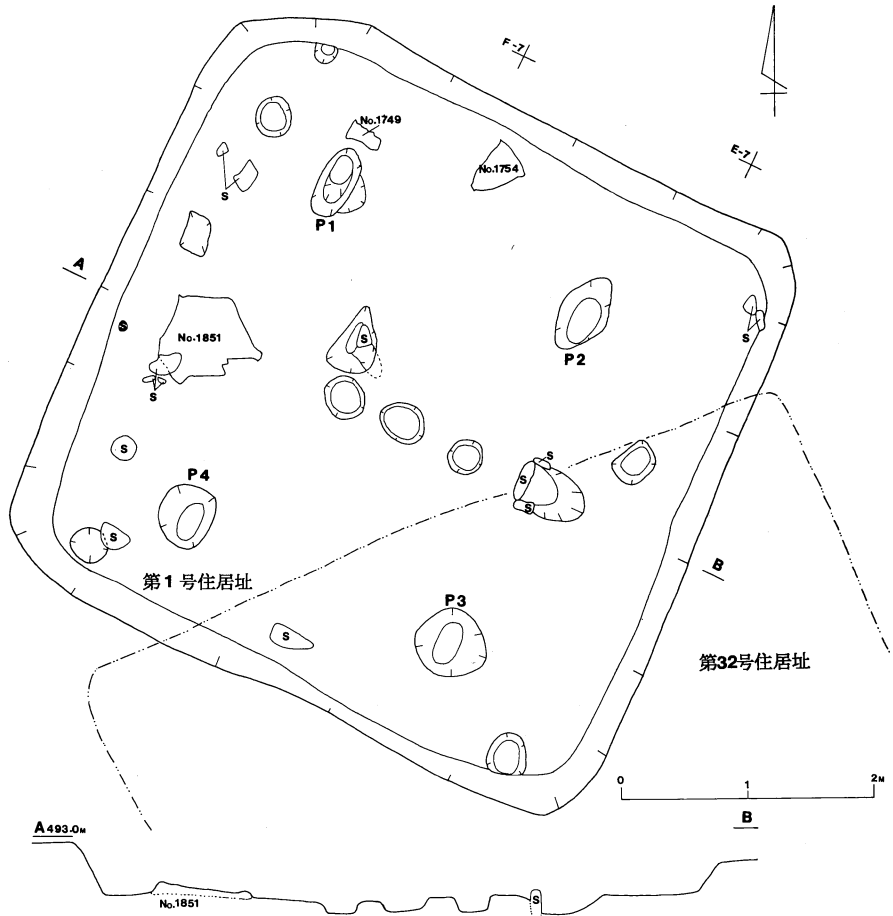
第5節 弥生時代の遺構と遺物

第1号住居址 (第54図・図版3)

遺構

本住居址は、D～Gの4～6グリッドに発見されたもので、南東側は第32号住居址を削り取る形になっているが、住居址の大方のプランをつかむことができた。東西は5.1m、南北4.95m、深さ平均45cm、隅丸方形の住居址である。

主柱穴は、P1～P4が考えられる。そ



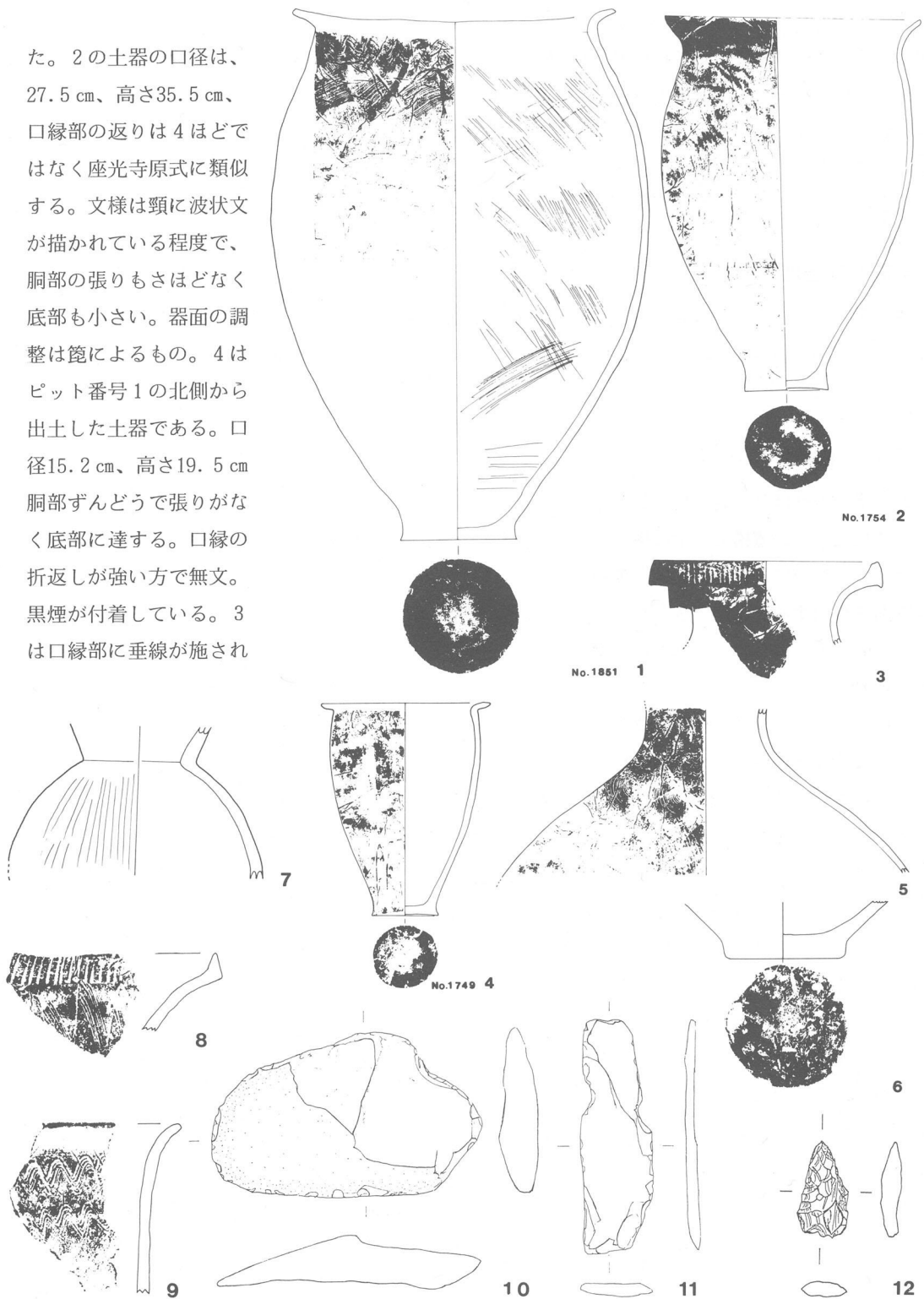
第54図 第1号・第32号住居址実測図

の規模は外形が南北の楕円形、内形はやはり南北に長い楕円形の掘り型であるところから、おそらく柱に割材を使用したことが考えられる。炉址は細長い自然石を用い南西北の三方を囲んだ石囲で埋甕は発見されなかった。また炉の西側にピットが3個同形直列に配されている。深さは浅く12cm～14cm内外といずれも浅い穴。おそらく桁か梁に横木を渡しそれに縛りつけ工作用または間仕切用として使われたのではなかろうか。壁外にはピットは認められなかった。

遺物 (第55図・図版3-1・17-1・17-2・17-6)

土器 1. (No.1851) の土器は西壁に倒れ込んだ状態で出土した。復原を試みたところ、口径30.5cm高さ50.4cm、口縁の折返して強い土器で、文様は頸部に櫛かきの波状文と、同工具で斜軸短線文が描かれた下伊那地方の中島式系の甕形土器である。2は発掘中の住居址の北側が先に掘られた時点で確認された土器で、この付近には床面上に小ピットが見えたが、最終発掘時には不明瞭になってしまっ

た。2の土器の口径は、
 27.5 cm、高さ35.5 cm、
 口縁部の返りは4ほどで
 はなく座光寺原式に類似
 する。文様は頸に波状文
 が描かれている程度で、
 胴部の張りもさほどなく
 底部も小さい。器面の調
 整は篋によるもの。4は
 ビット番号1の北側から
 出土した土器である。口
 径15.2 cm、高さ19.5 cm
 胴部ずんどうで張りがな
 く底部に達する。口縁の
 折返しが強い方で無文。
 黒煙が付着している。3
 は口縁部に垂線が施され



第55図 第1号住居址出土土器拓影及び石器実測図 1~6 (1: 6) 7~11(1: 3) 12(1: 1.5)

頸部に波状文と直線文の施された中島式土器。5. 頸部に直線文と波状文その下に¼円弧文が施された座光寺原式と併行する壺形土器。6. 壺形土器底部。7. 無文ではあるが篋消痕の残る小形壺形土器。8. 口縁部が屈折し平行沈線が施され、頸部に波状文のある座光寺原式の壺形土器。9. 波状文が二段に施された座光寺原式の土器。

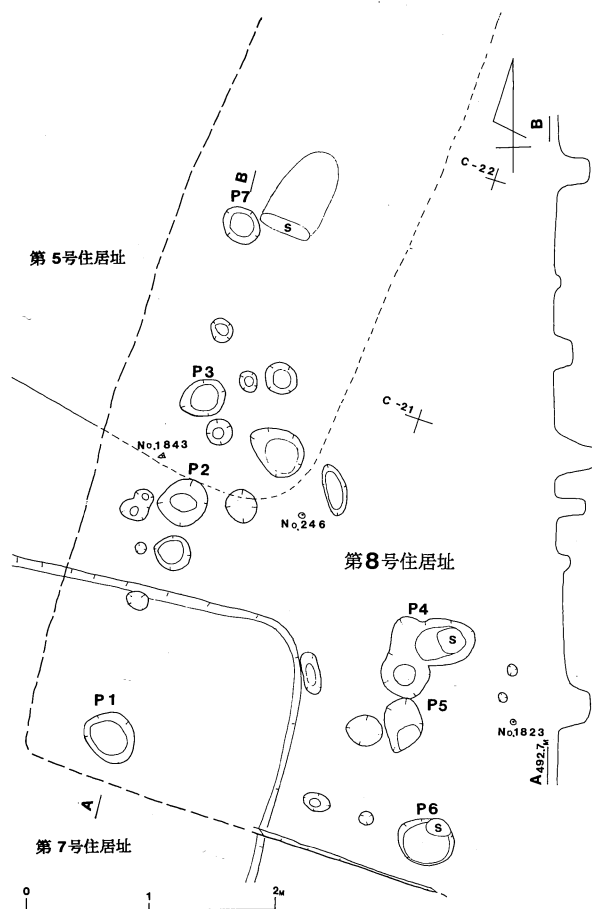
石器 10. 緑色岩の横刃形石器。11. 抉入の縦型石匙。12. 黒曜石の石鏃。

第32号住居址 (第54図)

遺構 本址はC～Fの3～6グリッドにあると思われるが、第1号住居址を切ってつくられており、床面が黒土中にあった為など、確認が困難であったが、一応弥生時代の住居址とした。

第8号住居址 (第56図)

遺構 本址はB～Dの19～21グリッドに発見された遺構で、主に黒土中に発見されたので、西側、北側、東側は壁面を検出することができなかったが、南面の東側にわずかではあるが壁を確認することができた。この壁も7号住居址の北東の壁にて切り込まれているが、第7号住居址の北壁が途中で不明になっている個所が第8号住居址の境であることがわかり、第8号住居址の一部のプランが確認されたのみで、そのうちP1～P6は柱穴と思われるが、ほかのピットはどこに所属するか不明である。またP7の近くに、炉址の囲石があり、その附近に焼土があるが、住居址の位置的からみてやや不自然と思われる。それと所属不明のピット群から、ほかの住居址がまた別の遺構が重複している可能性もありえる。



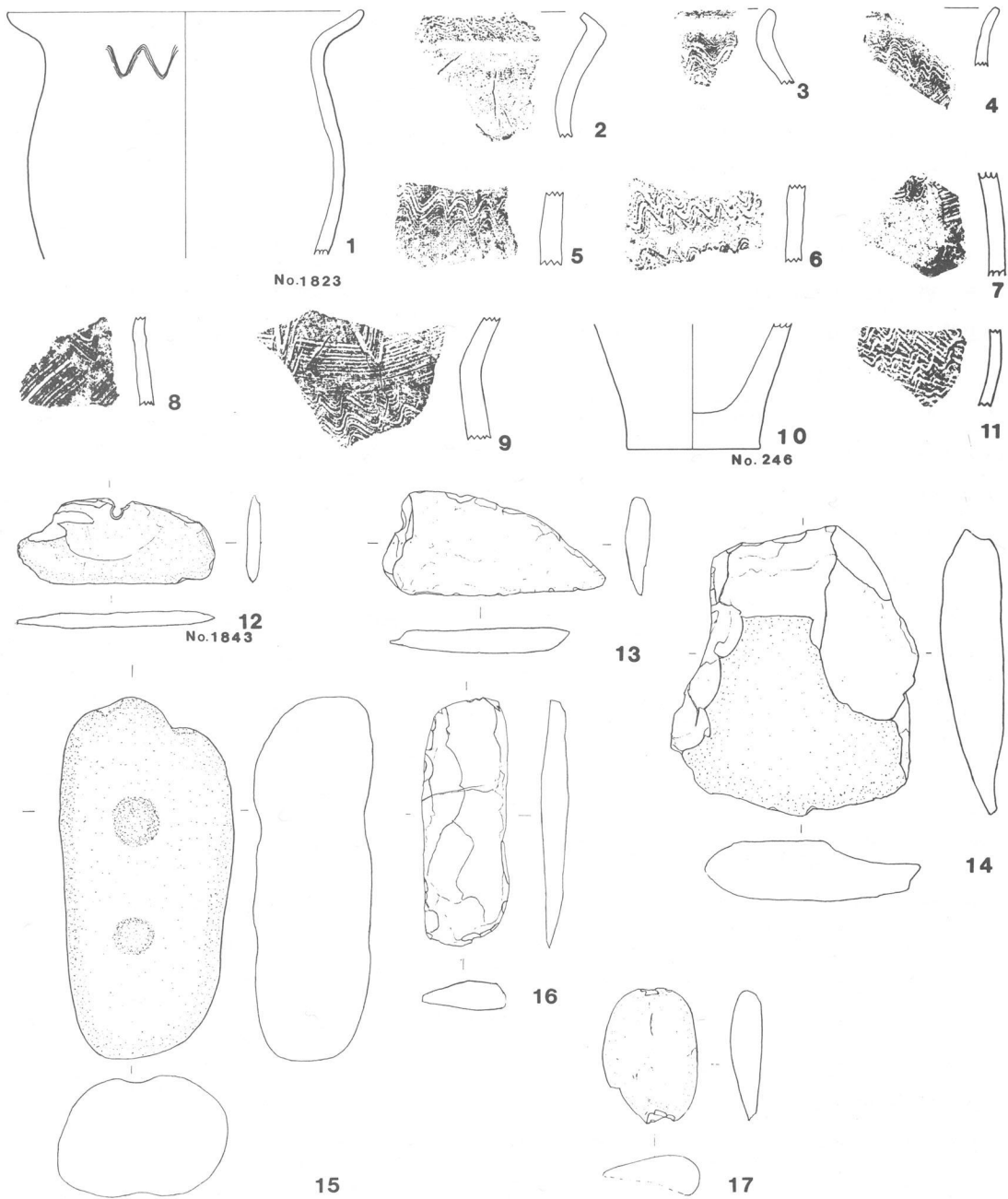
第56図 第8号住居址実測図

遺物 (第57図・図版16-2)

土器 1. 口縁の返りのある甕形土器で、頸部に波状文が施されている土器。2. 口縁部の立ち上りに特徴を持ち口唇に波状文が施された土器。3～7は波状文の土器片。8. 波状文と下に斜軸短線文を施した土器。9. 波状文と直線文が少し重なって、その下に短い波状文の施された土器。10. 甕形土器の底部。11. 波状文と斜軸短線文

の重複した土器。以上総じて座光寺原式に比定される土器と考えられる。

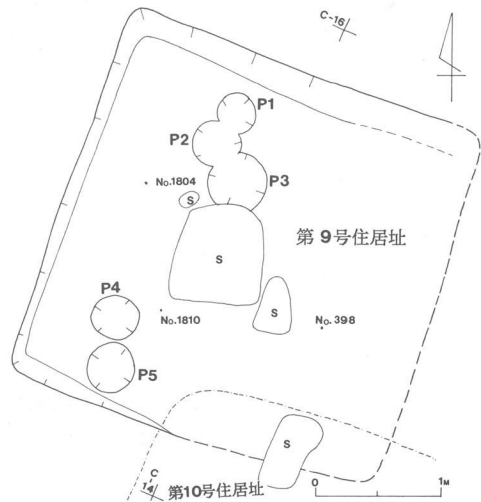
石器 12. チャート製の有孔石包丁。13. 硬砂岩の横刃型石器。14. 大割調製の石斧。15. 花崗岩で表裏にくぼみの付けられたくぼみ石。16. 粘板岩の打製石斧。17. 硬砂岩の石錘。



第57図 第8号住居址出土土器拓影及び石器実測図(1:3)

第9号住居址 (第58図)

遺構 本住居址はB、Cの14～15グリッドに発見されたものであるが、北西南側にわずかに壁が認められる程度で、東側は水田造成時に削り取られたため不明である。西と南北の残った壁から3m～3.5m位のプランをもつ小形の住居址と考えられる。本址の支柱穴はP2～P4と考えられるが、他の柱穴については明らかでない。炉址もついに検出するにいたらなかった。本住居址は土器型式から弥生時代後期座光寺原式に比定される住居址と考えられる。

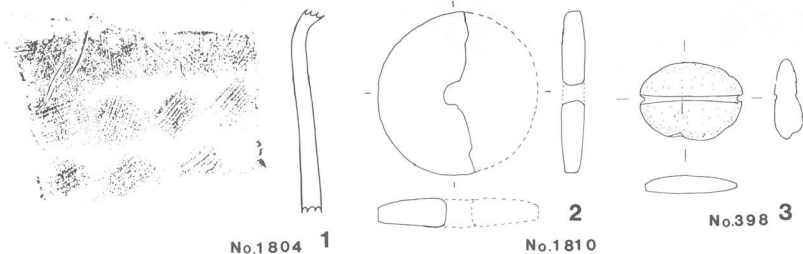


第58図 第9号住居址実測図

遺物 (第59図・図版16-1)

土器 1. (No.1804)

は口縁を欠いている甕形土器で、頸部に波状文とその下に二段に斜軸短線文が施された座光寺原式に比定される土器。



第59図 第9号住居址出土土器拓影及び石器実測図(1:3)

石器 2. 石質は

明らかにできないが

径6.3cm、厚さ1.0cmで、中心に両面から径8mmの穴がけられている紡錘車で、P4のそばの床面より出土した。3. 粘板岩の石錘。

第17号住居址 (第60図)

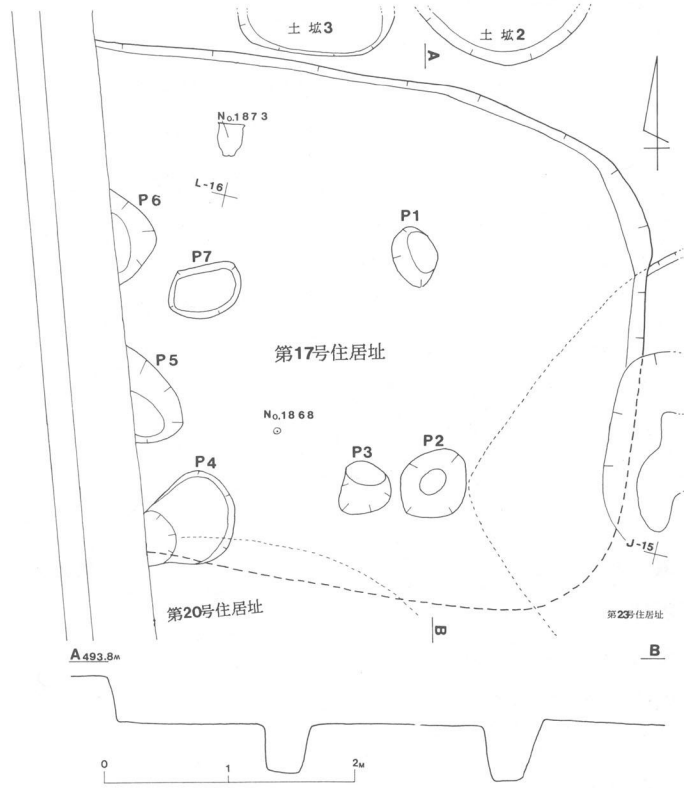
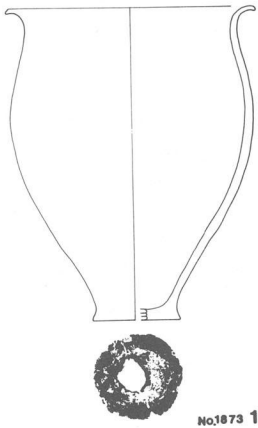
遺構 本住居址は、J～Lの14～16グリッドに発見されたもので、西側は道路敷で調査ができなかった。また東側は第23号住居址を切って作られたもの、南は第23号住居址を切った形である。従って住居址の規模を知ることができなかった。支柱穴はP1、P2、P4、P7と考えたが、P3、P5、P6は補助穴か、または建替柱によるものか現地では分類することができなかった。炉址は東側には検出されなかったので、あるいは西側道路敷の方にあるのではないかと思われる。

遺物 (第61・62図・図版16-2、17-3～5)

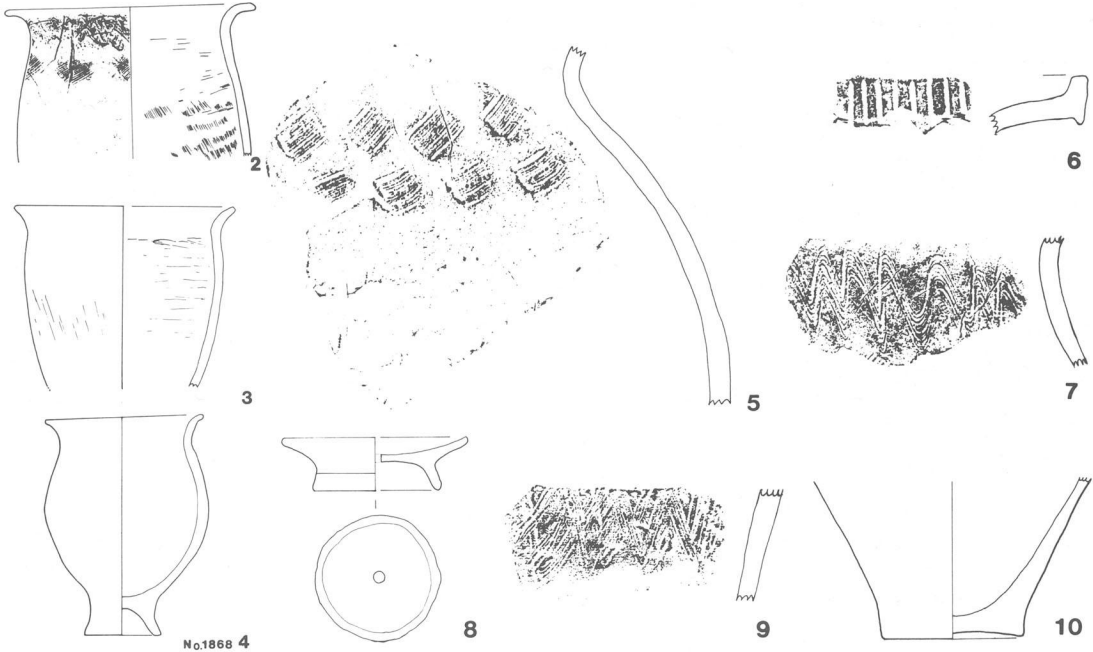
土器 1. 口縁部の返りが強い無文の甕形土器で、底部に穴がけられている。2. 頸部に波状文と斜軸短線文のある土器。3. 口縁の返りの少ない無文土器。4. 無文の台付土器。5. 頸部下に二段の斜軸短線文がある壺形土器。6. 壺形土器の口縁部。7. 波状文と斜軸短線文が施された土器。8. 小形の有孔器台。9. 波状文の施された土器。10. やや上底の甕形土器の底部である。本址の出土遺

物は中島式に併行する土器と思われる。

石器 1. 鎌形石器で長さ13cm幅3cm、厚さ6mmで硬砂岩。湾曲した内部に刃がつけられており、背には両面加工の調製痕がみられる。石製の鎌は珍しい。2. 硬砂岩の短冊形の打製石斧。3. 緑色岩の分銅形の石斧。4. 緑色岩の分銅形の石斧。



第60図 第17号住居址実測図



第61図 第17号住居址出土土器拓影 1~4(1:6) 5~10(1:3)

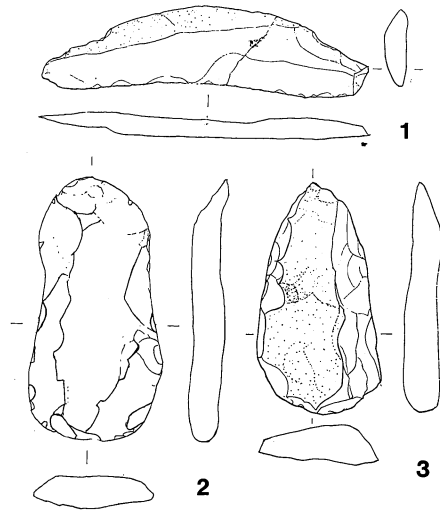
第18号住居址 (第63図)

遺 構 本址はG～Jの18～20グリッドに発見されたもので、北壁・東西壁は検出されたが、南壁は第19号住居址(縄文時代中期)に貼床をして作った関係上確認できなかった。P1～P4が拡張前の柱穴と考えられ、東西3.3m、南北3mほどの小形な住居址と推定される。後に拡張して作ったのが第18号住居址で、主な柱穴はP1・P5～P7と思われ、規模は東西が5.3m、南北4.7mの偶丸方形の住居址となった。床面の施設としては、東北に貼床が確認され、P2とP3との間に小形の石囲炉が発見された他に、西側と北側の壁にある台状の物は、何のためのものかはっきりはしていない。

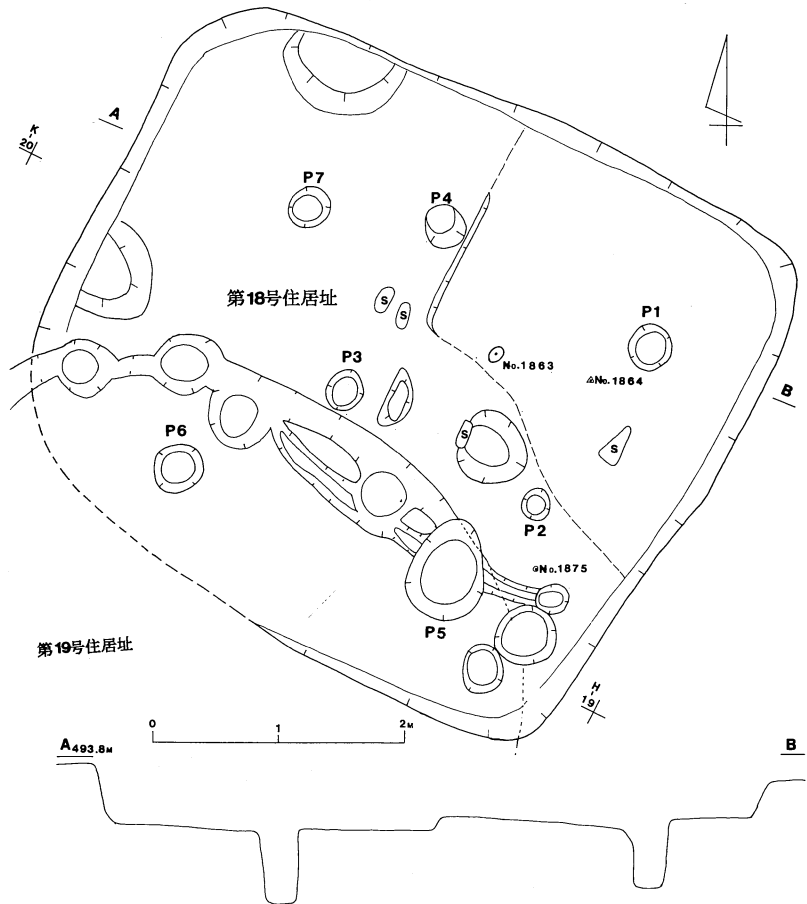
遺 物 (第64図・

図版12-3・16-1.16-2)

土器 1. 頸部に斜軸短線文が二段施された、甕形土器の口縁部。
 2. 口縁部の返りが強く、波状文が施された土器。
 3. 波状文と斜軸短線文の施された土器。
 4. 大型の壺形土器の口縁部である。口縁が内側に屈折し立ち上がる特徴をもち、その面に平行に篋による沈線が引かれている中島式土器。
 5は4と同形であるが小型の壺形土器の口縁部。屈折した口縁には櫛歯状施文具で縦位に浅く引いた文様が付され、頸部には波状文と直線文が施されている。
 6. 土器の破



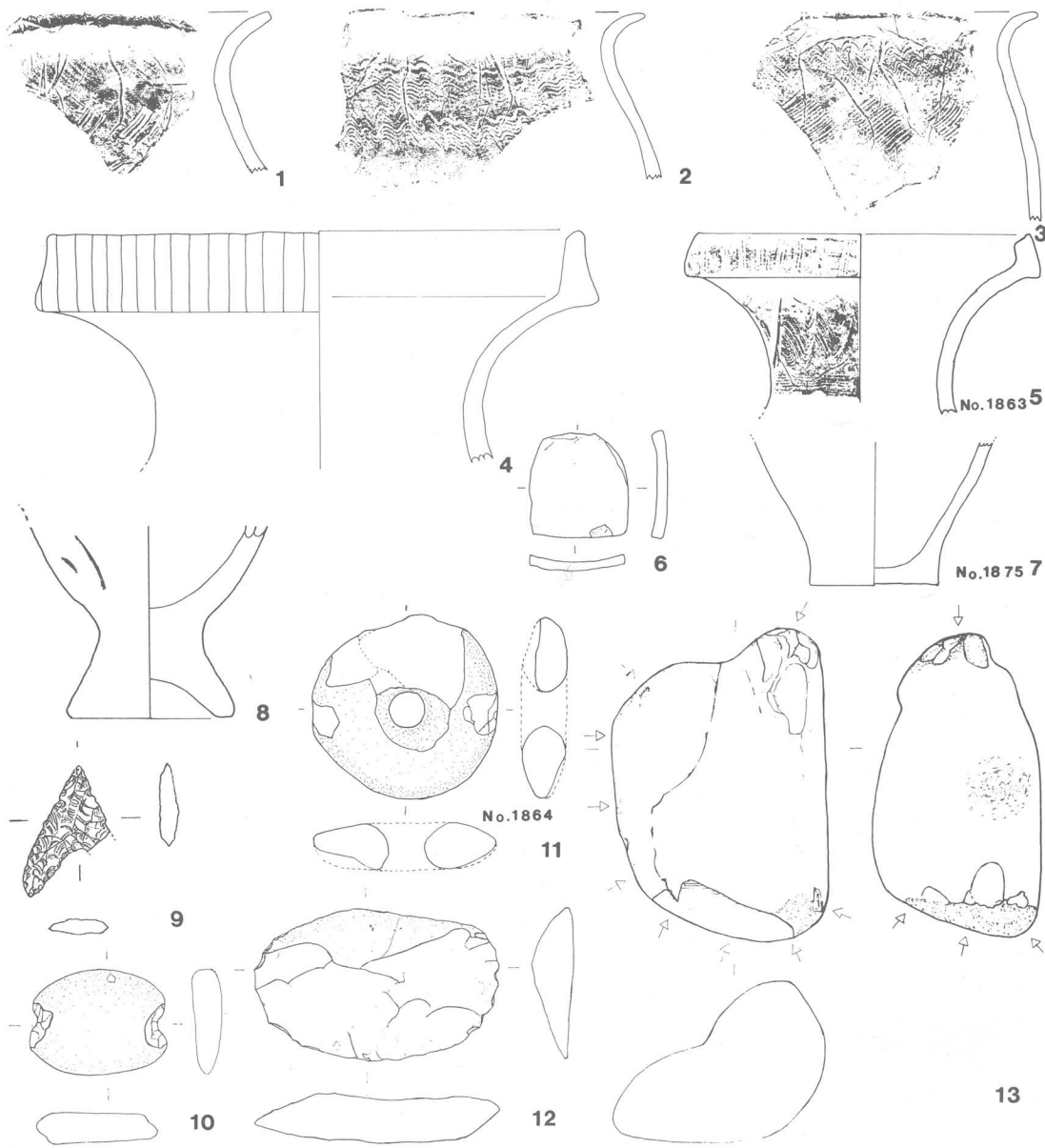
第62図 第17号住居址出土石器実測図(1:3)



第63図 第18号住居址実測図

片を半円状に磨いて作られた用途不明の遺物。今後類例を見て命名したい。7. 甕形土器の底部で、表裏に朱彩されているようである。8. ミニチュアの高杯で、現高4.1cm、口径4.6cm。手つくね土器である。本址の土器は総じて中島式に比定されると考えられる。

石器 9. 扶の強い黒曜石の石鏃。10. 粘板岩の石錘。11. 粘板岩の環石。12. 硬砂岩の横刃形石器。13. 緑色岩で台形の敲打器。



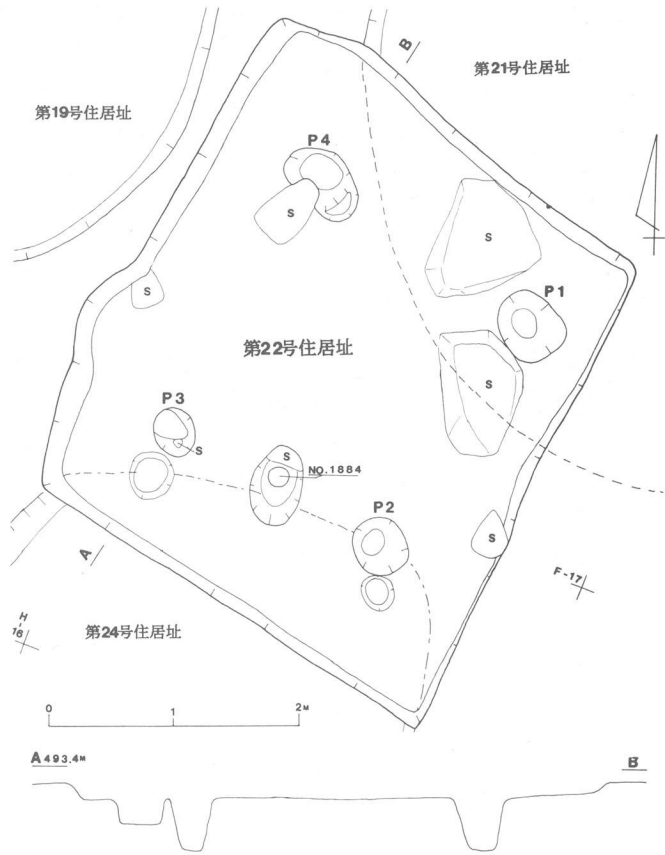
第64図 第18号住居址出土土器拓影及び石器実測図 1~7・10~13(1:3) 8・9(1:1.5)

第22号住居址（第65図）

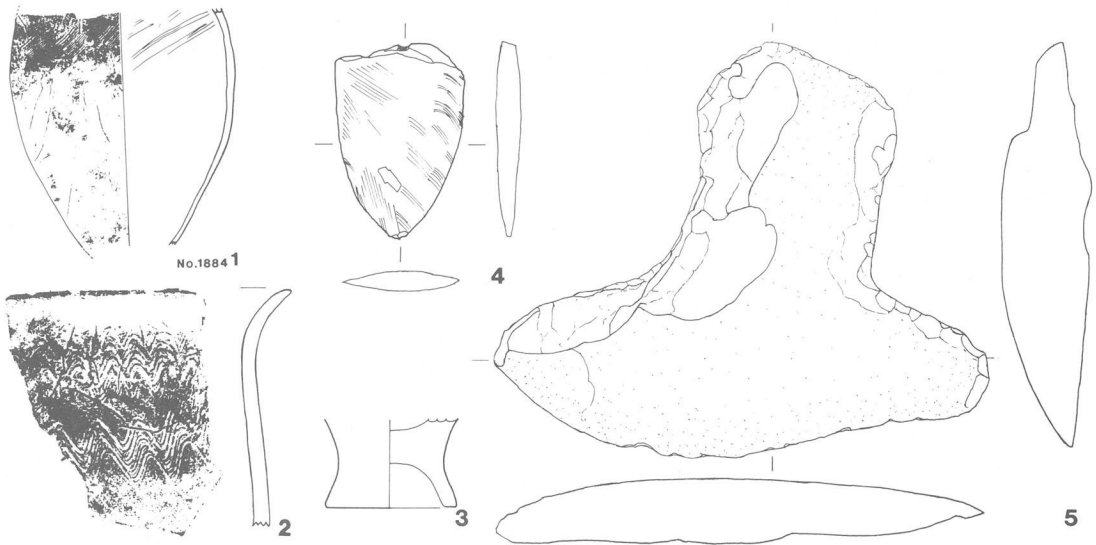
遺構 本址はF～Hの16～18グリッドに発見された住居址である。北側の第21号住居址と南側の第24号住居址（共に縄文時代中期）の中間に切り込んだ形である。規模は東西3.6m、南北4.05mの方形の住居址。支柱穴はP1～P4かと思われ、P2とP3横の柱穴は第24号住居址のものと考えられる。炉址はP1とP3のほぼ中間にNo.1884の土器を埋めた、埋甕炉が発見された。

遺物（第66図・図版16-2）

土器 1. 埋甕は炉址に使われていた土器で、口縁部を欠いているものである。文様は頸部に波状文とその下に斜軸短線文を施した土器で、径15.5cm、高さ18cm底部も欠いている。2. 頸部に波状文が二段に施された甕形土器の口縁部。3. 小形の台付土器の底部である。



第65図 第22号住居址実測図

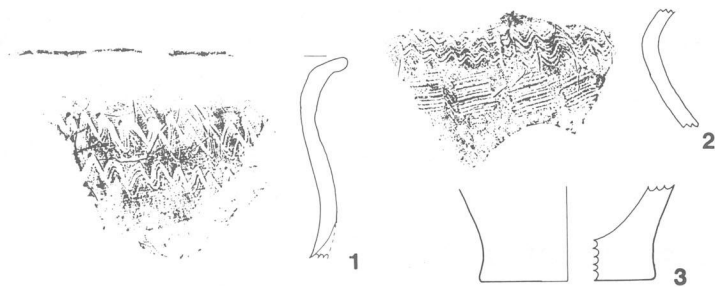


第66図 第22号住居址出土土器拓影及び石器実測図 1(1:6) 2・3・5(1:3) 4(1:1.5)

石器 4. 有孔磨製石鏃で、現長3.8 cm、最大幅2.5 cm、厚さ4.5 mm。粘板岩で、孔は両側から抉られた1孔であり、長野県の弥生時代の遺物としては一般的な大きさである。5. 縦14.8 cm、刃部が19.8 cm、最大厚2.9 cm、握部幅7.7 cm。表面は自然面を用い、刃部も自然面の鋭利面を最大にいかし他は剥離して刃部としている。肩部の剥離は刃潰しで調整しており、岩質は緑色変岩を用いた有肩扇状型石器である。

第27号住居址 (第46図)

遺構 本址はMNの17～19グリッドに発見された住居址で、東側の第28号住居址(縄文時代中期)に貼床をして作られたものと考えられる。西側は道路敷のため、住居址のごく一部のみしか調査できず、規模や形態等くわしく明らかにすることができなかった。



第67図 第27号住居址出土土器拓影 (1:3)

遺物 (第67図)

土器 1. 口縁部の返りが強く、頸部に二段の波状文が施された甕形土器の口縁部。2. 頸部に波状文と平行に近い斜軸短線文が施された中島式に比定される土器。3. 甕形土器の底部。やはり中島式と思われる。

石器 本住居址より石器の出土は確認できなかった。

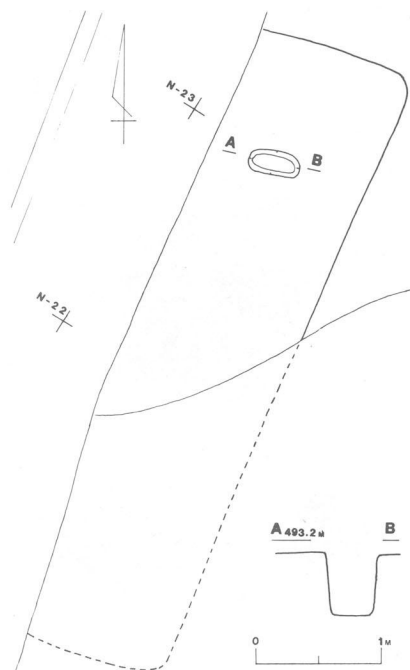
第30号住居址 (第68図)

遺構 本址はMNの21・22グリッドに発見された住居址である。本住居址は、古墳の周溝を発掘中に発見されたもので、西側は道路敷で、南側は周溝内に埋没しており、規模や形態をくわしく知ることができなかった。柱穴も一個だけ確認できただけである。

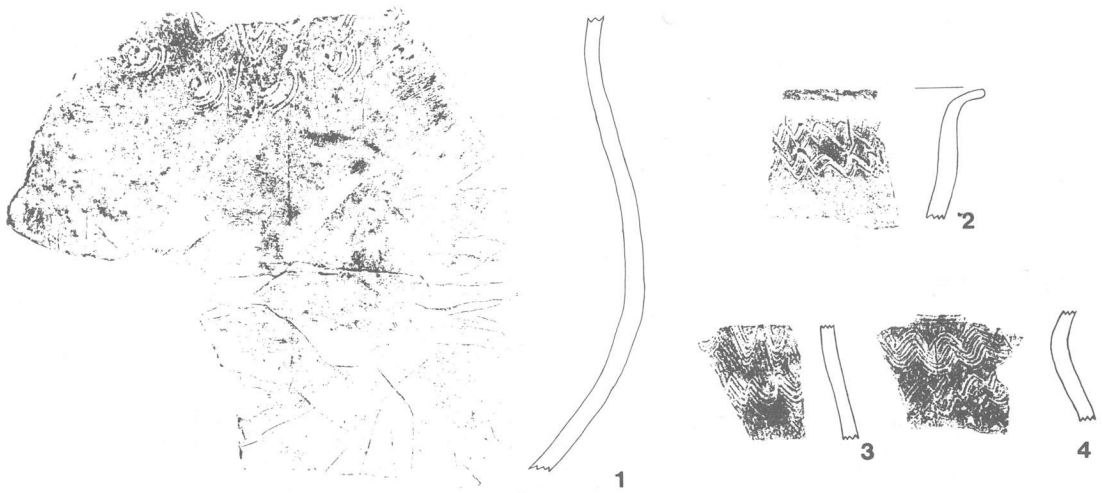
遺物 (第69図)

土器 1. 床面上より出土した頸部に波状文と $\frac{1}{4}$ 円弧文が施された壺形土器。2. 3. 頸部に二段の波状文が施された土器。4. 頸部に沈線を施しその下に波状文を施した中島系の土器。

石器 本址より石器の出土は確認できなかった。



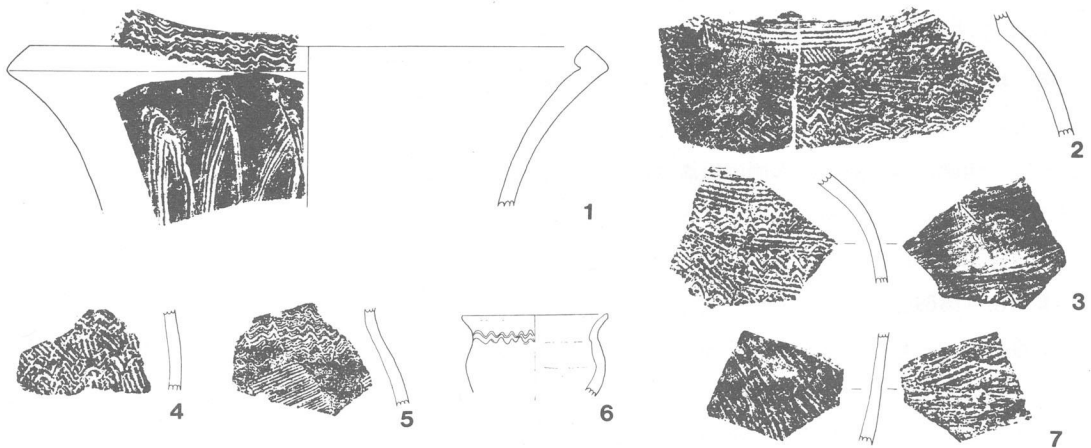
第68図 第30号住居址実測図



第69図 第30号住居址出土土器拓影（1：3）

遺構外出土遺物（第70図）

土器 1. 口縁が内側に屈折する壺形土器。口唇には短い波状文を施文、頸部に大ぶりの波状文が描かれている座光寺原式に比定されるもの。2. 甕形土器の頸部から胴部にかけての破片である。頸部に押引直線文が施され、胴部には同一施文具による重複した波状文を施した特徴のある土器。この土器の波状文の手法は座光寺原式土器の口縁部と類似しているところから、時期的には座光寺原式に併行すると考えられる。3. 4. は2と同類の土器である。5. 甕形土器の頸部で、波状文と斜軸短線文が施された土器。6. 小型の甕形土器の口縁部。7. 竹管具で施文した条痕文の土器で、厚さ3mmの焼成の良好な土器。裏面は整形条痕によるもの。2. 3. 7の土器は中期の文様の要素がうかがえるところから、今後類例を見て位置付をしたい。

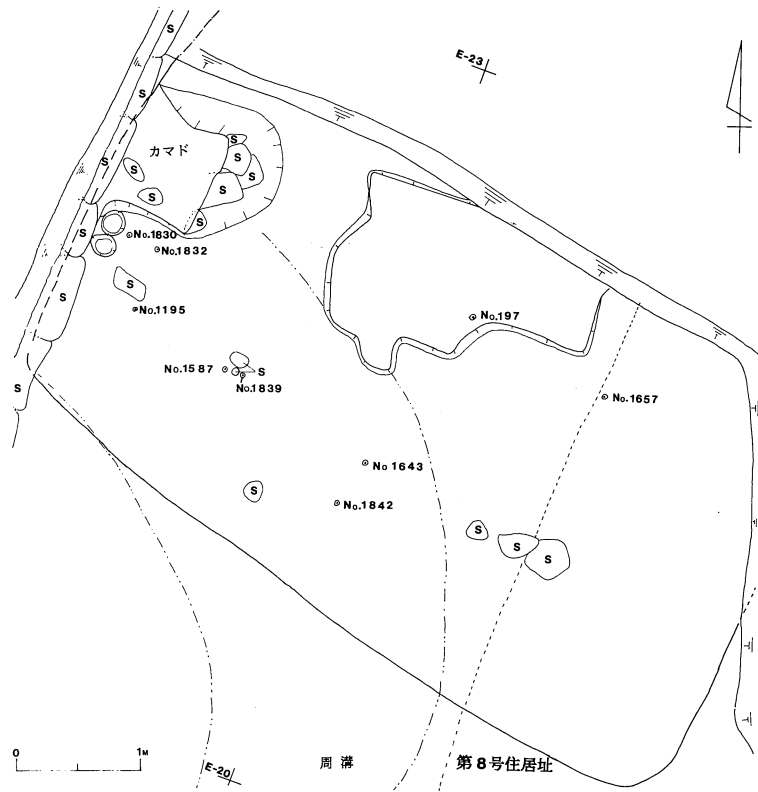


第70図 弥生時代遺構外出土土器拓影（1：3）

第6節 奈良時代末から平安時代の遺構と遺物

第5号住居址 (第71図・図版8)

遺構 本遺構はC～Fの20～22グリッドに発見された住居址である。遺構の東側は弥生時代の第8号住居址に貼床をし、南側は時期不明の遺構を切って、西側は古墳の周溝を切り込んで作ってある。この住居址は黒色土中に作られたため床面がカマドの前に一部確認することができたが、その他には認めることができなかった。従って柱穴も検出できずに終わった。床面の下の一部から縄文時代中期や弥生時代後期の土器片が出土したことは、本住居址が作られる以前に、前時代の遺構か、遺物の捨場などがあつたかも知れない。とにかく、住居址の規模については、カマドの位置を中心に推定するにとどまってしまった。カマドは西壁のほぼ中央と思われる所に設けられ、石芯の粘土ガマドである。カマドの周辺には須恵器が出土したり、焼土が広がっていた。カマドの断面は図版8の1～7で表わした。

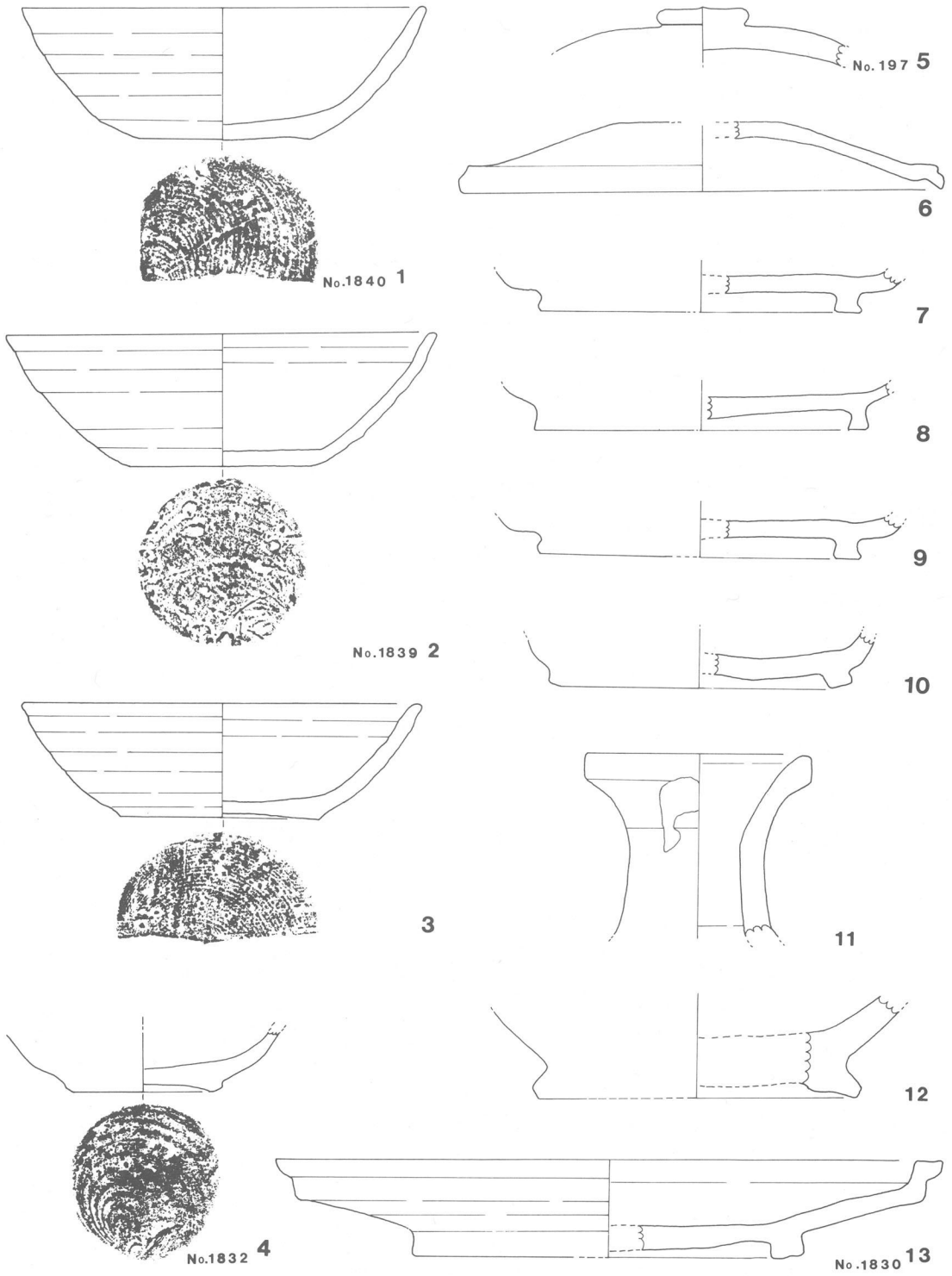


第71図 第5号住居址実測図

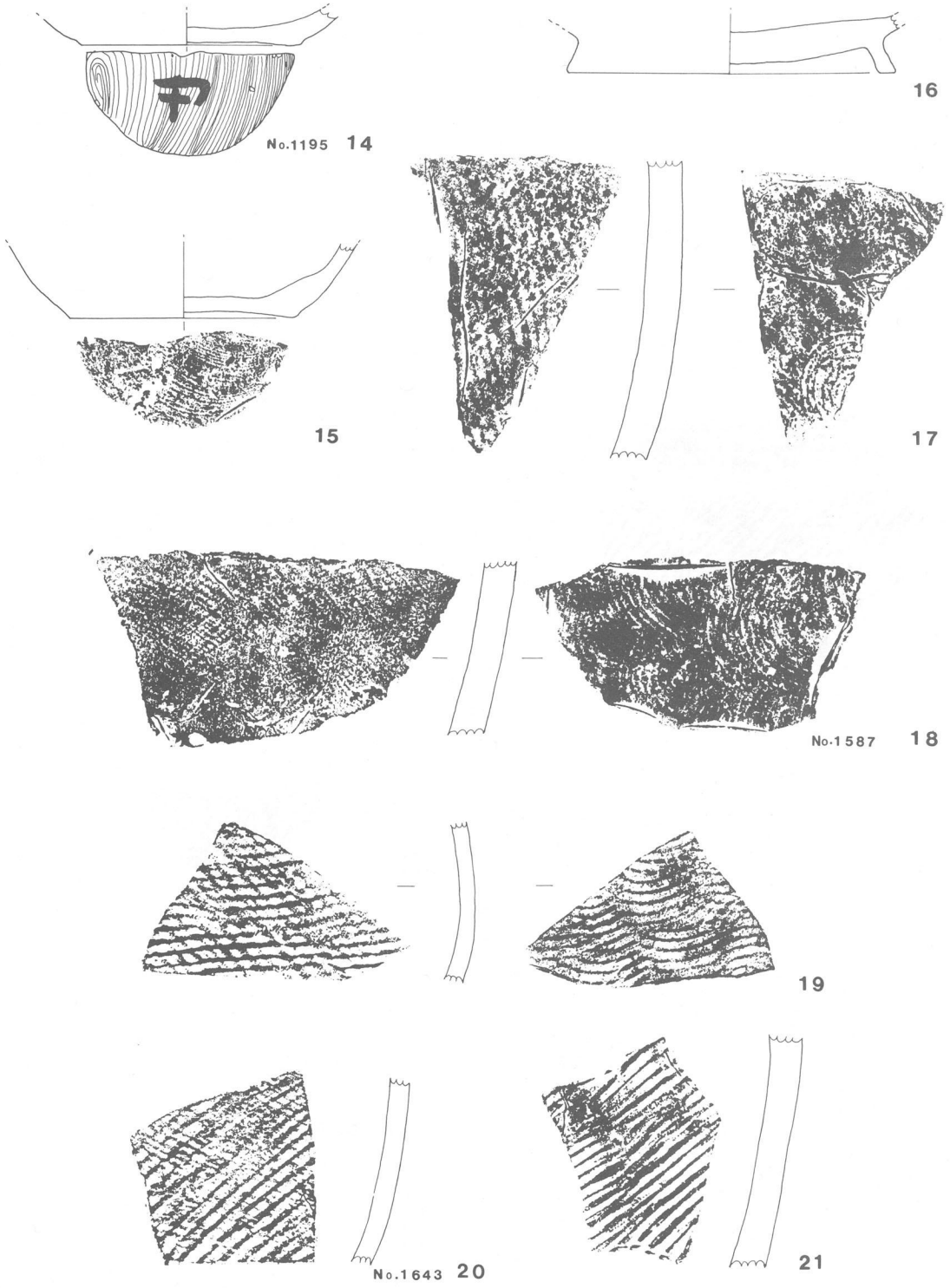
位置を中心に推定するにとどまってしまった。カマドは西壁のほぼ中央と思われる所に設けられ、石芯の粘土ガマドである。カマドの周辺には須恵器が出土したり、焼土が広がっていた。カマドの断面は図版8の1～7で表わした。

遺物 (第72・73・74図、図版8-8・17-7・18-1・18-3～7)

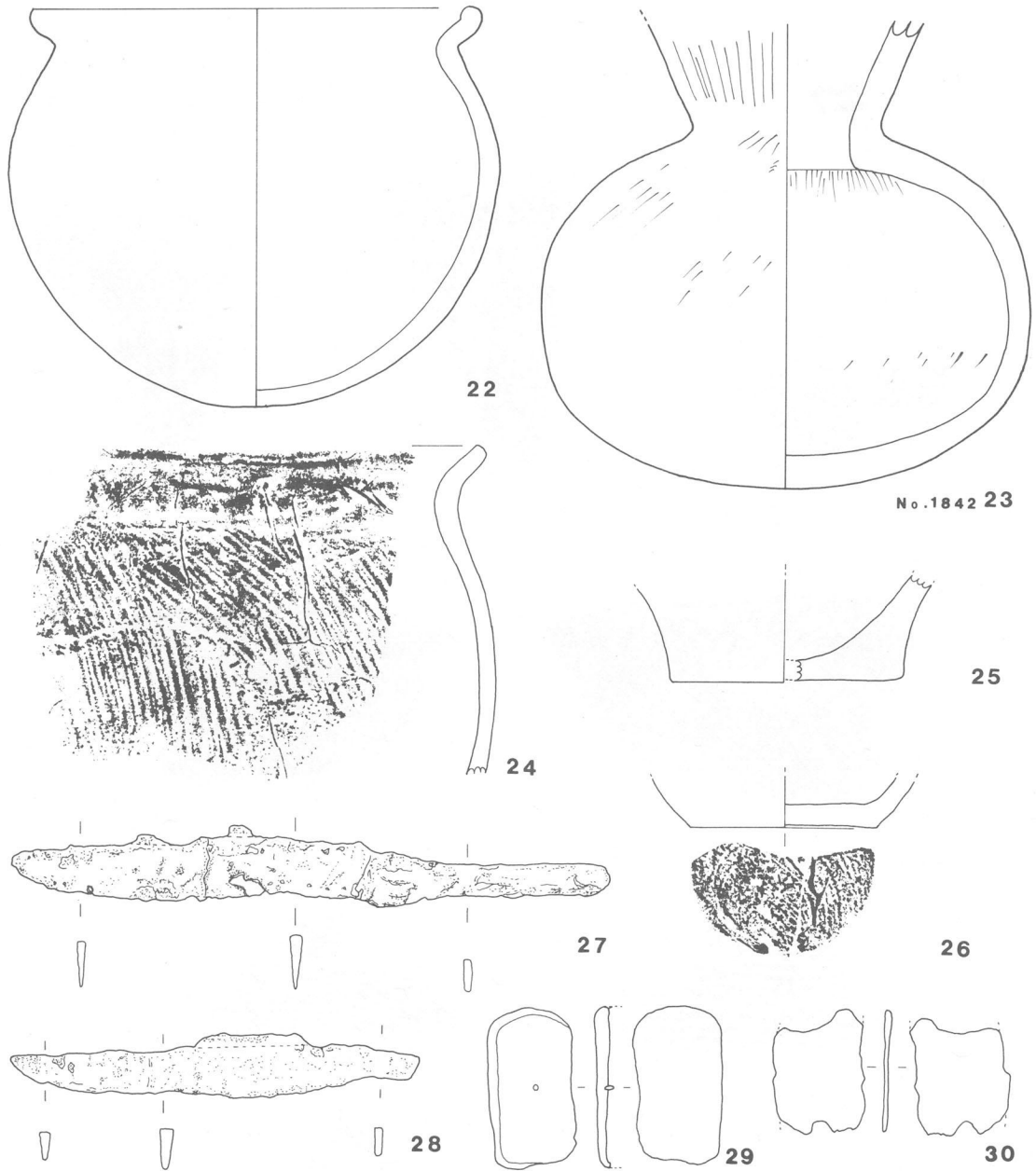
須恵器 1～4は糸切底の杯で、1と4は土器洞窯出土の杯に類似している。5・6は宝珠ツマミの蓋、7～10は高台の皿で、その内8と10は土器洞産に類似している。11は長頸壺の頸部で自然釉などから、これも土器洞と考えられる。12は甕の底部。13は高台の皿で在地産ではない。(以上第72図) 14・15は糸切底の杯で、14は墨書のあるもので「中」と読める。16は胎土が灰白色の底部で、在地産ではない。17～21は甕の胴部破片で、17は叩目と裏面に青海波痕がある。18は格子目文の叩で裏面に青海波痕がある。19は胎土が灰白色で格子目文の叩と裏面に青海波痕がある。20は格子目文の叩で裏面は整形されている。21は叩目のあるもの。(以上第73図)



第72图 第5号住居址出土须惠器实测图(1:2)



第73図 第5号住居址出土須恵器実測図及び拓影（1：2）



第74図 第5号住居址出土土師器・刀子・銅製品実測図（1：2）

土師器 22は頸部にわずかにカキ目らしき痕が残る小型甕。23は小形の壺。24はカキ目のある甕の口縁部から胴部。25は底部。26はカマド内出土の内黒の杯で、糸切のある底部。

刀子 27は長さ17.2 cm、幅1.5 cm、厚さ3.5 cm。28は長さ11.5 cm、幅1.2 cm、厚さ4 mm。

銅製品 29は金銅張りの柄兜金具で中央に留鉾が残る。30は金銅製飾金具の破片。（以上第74図）

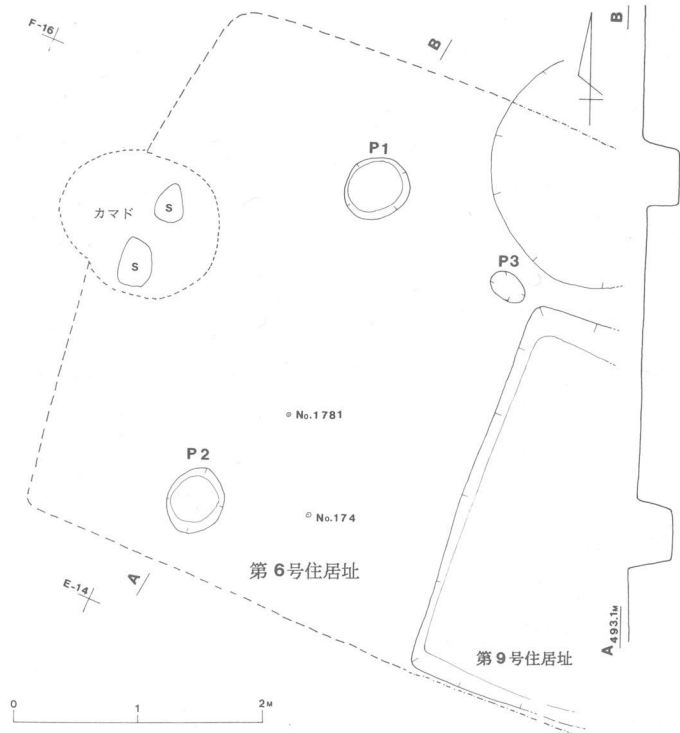
その他に鉄滓も出土した。以上9世紀中頃～末にかけての遺物である。

第6号住居址 (第75図・図版5-1)

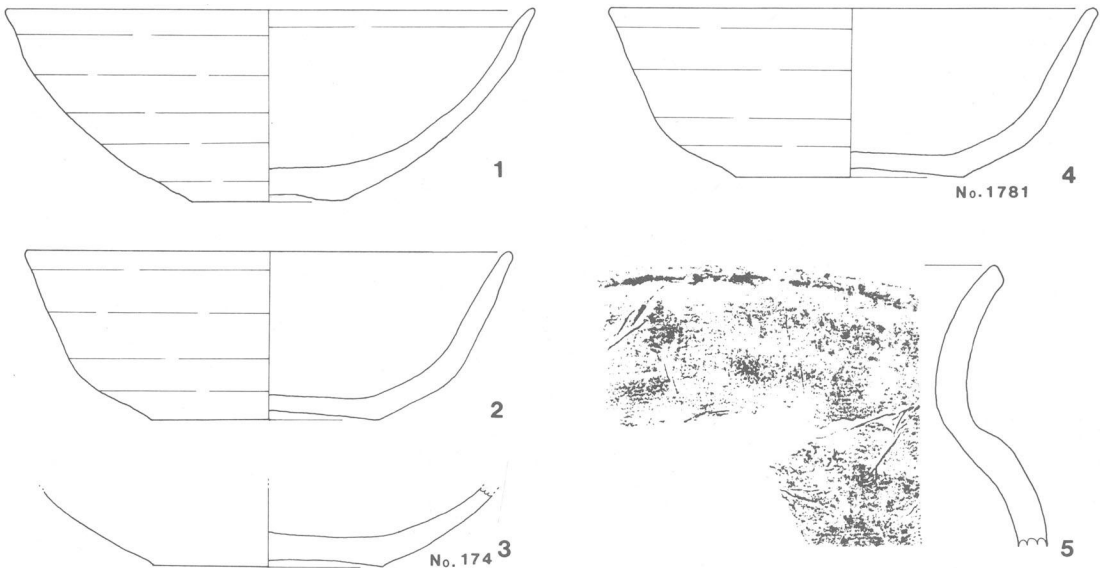
遺構 本住居址は、C～Eの14・15グリッドに発見されたもので、南壁と西壁の一部とカマドが検出されただけで、北壁は黒土のために確認ができなかった。東側は弥生時代の第9号住居址に貼床したかたちである。床面は南側に認められたが、北から東にかけては黒土の堆積が多く、柱穴を検出することができなかった。本址の支柱穴はP1・P2と思われる、他のピットは補助穴か建替穴かは不明である。

遺物 (第76・77図)

土師器 1～4は内黒糸切底杯で、1は径14cm・高さ5cm。2は径12.5cm、高さ4cm。3は底部のみ。4は径12.8cm。高さが4.2cm。5は甕形土器の破片で無文である。(以上第76図) 土



第75図 第6号住居址実測図



第76図 第6号住居址出土土師器実測図 (1:2)

器の型式からみて、平安時代中頃と推定される住居址である。

石器 第77図は硬砂岩の環石の破片である。

第7号住居址 (第78図・図版5—2)

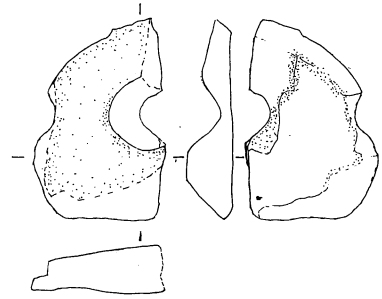
遺構 本住居址は、C～Eの17～19グリッドに発見されたものである。住居址の西側は古墳の周溝の一部を、また、北東の一角は弥生時代の第8号住居址を、それぞれ切り込んで作られている。カマドは西壁に接して作られており、石芯粘土カマドである。支柱穴はP1～P4と考えられる。

遺物 (第79・80図・図版18—9)

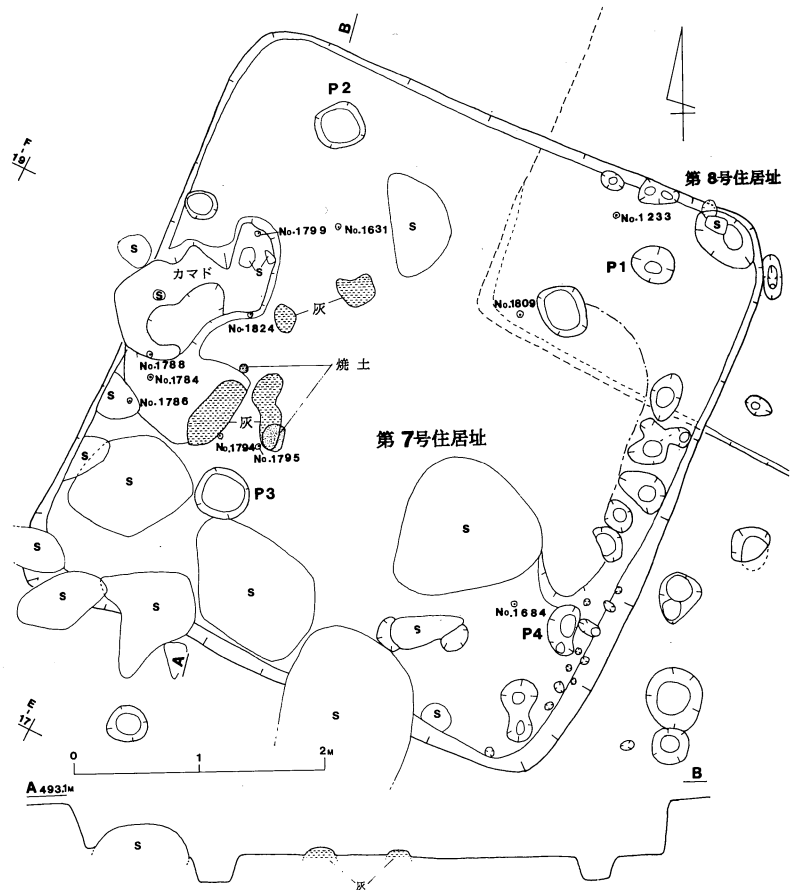
須恵器 1～3は糸切底の杯。4は長頸壺。5～8は高台碗の底部で、7は土器洞のものに類似している。10～12は蓋の破片で、9については擬宝珠ツマミである。13は高台の鉢で、在地の窯で生産されたものには見られない。(以上第79図) 14・15は甕形の胴部破片で、14は格子目文の叩で裏面は青海波痕がある。これも在地の窯で生産されたものには見られない。15は叩目で裏面は青海波痕を削り取ってある。

土師器 16・17はカキ目の甕形土器の口縁部から胴部の破片。18は甕形土器の底部。19は杯で、糸切底である。

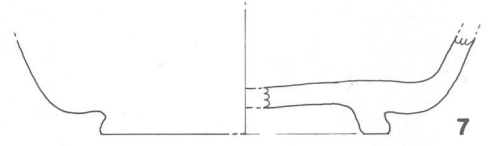
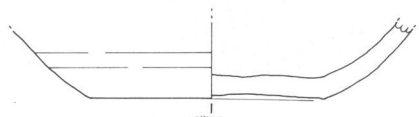
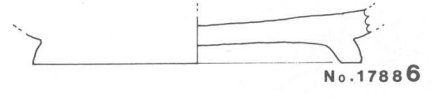
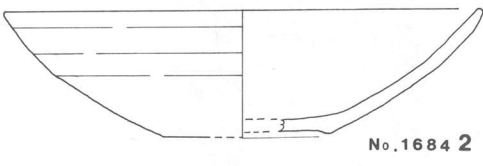
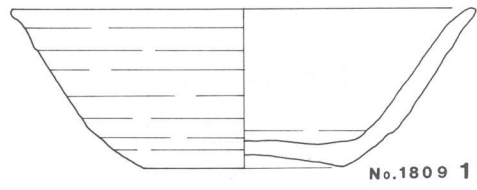
(以上第80図)



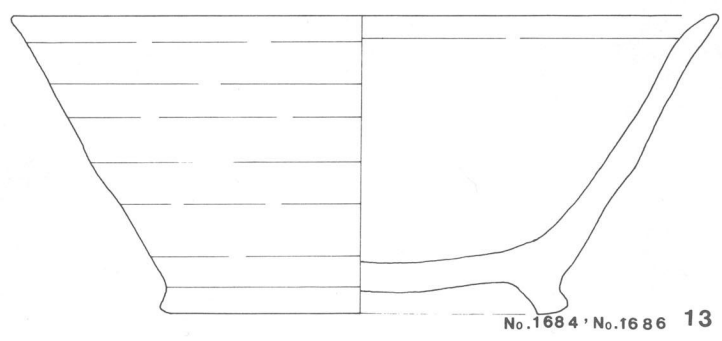
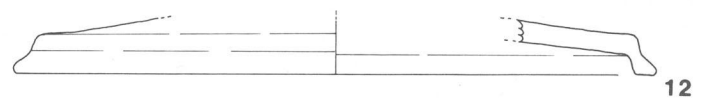
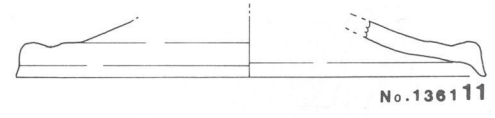
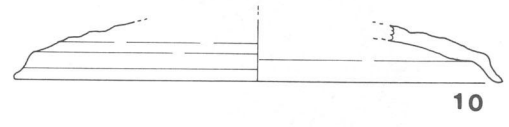
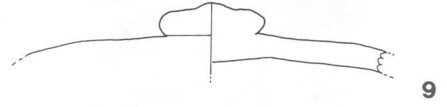
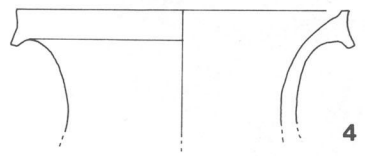
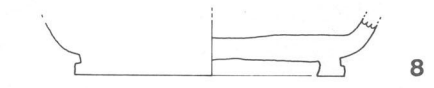
第77図 第6号住居址出土石器
実測図(1:3)



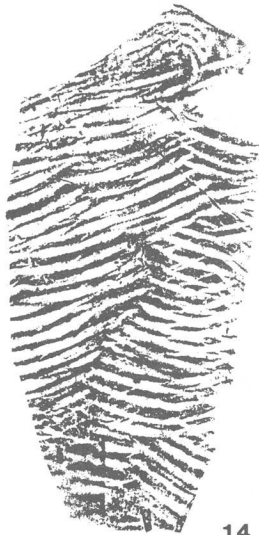
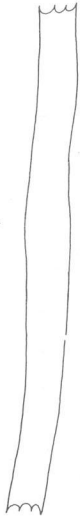
第78図 第7号住居址実測図



3



第79图 第7号住居址出土須恵器実測图(1:2)



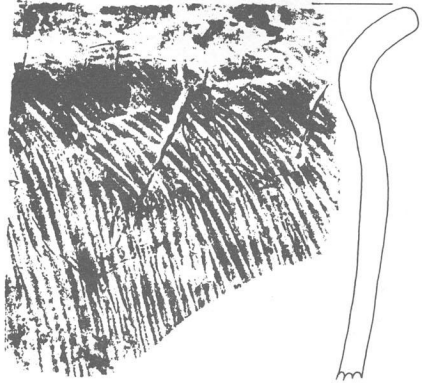
No.1233 14



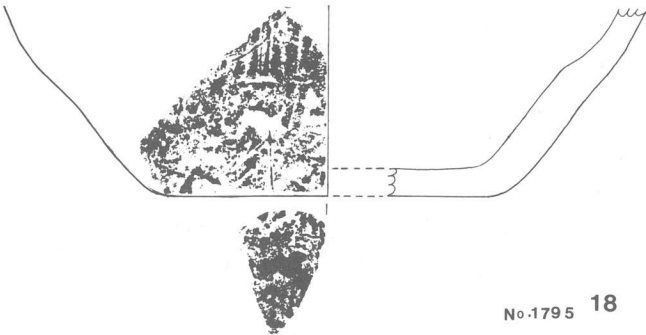
15



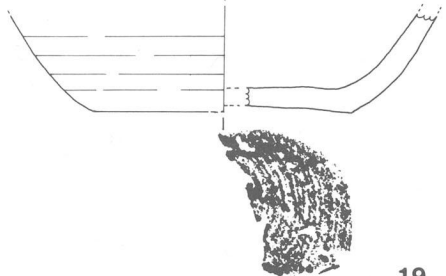
No.1794 16



No.1799 17



No.1795 18



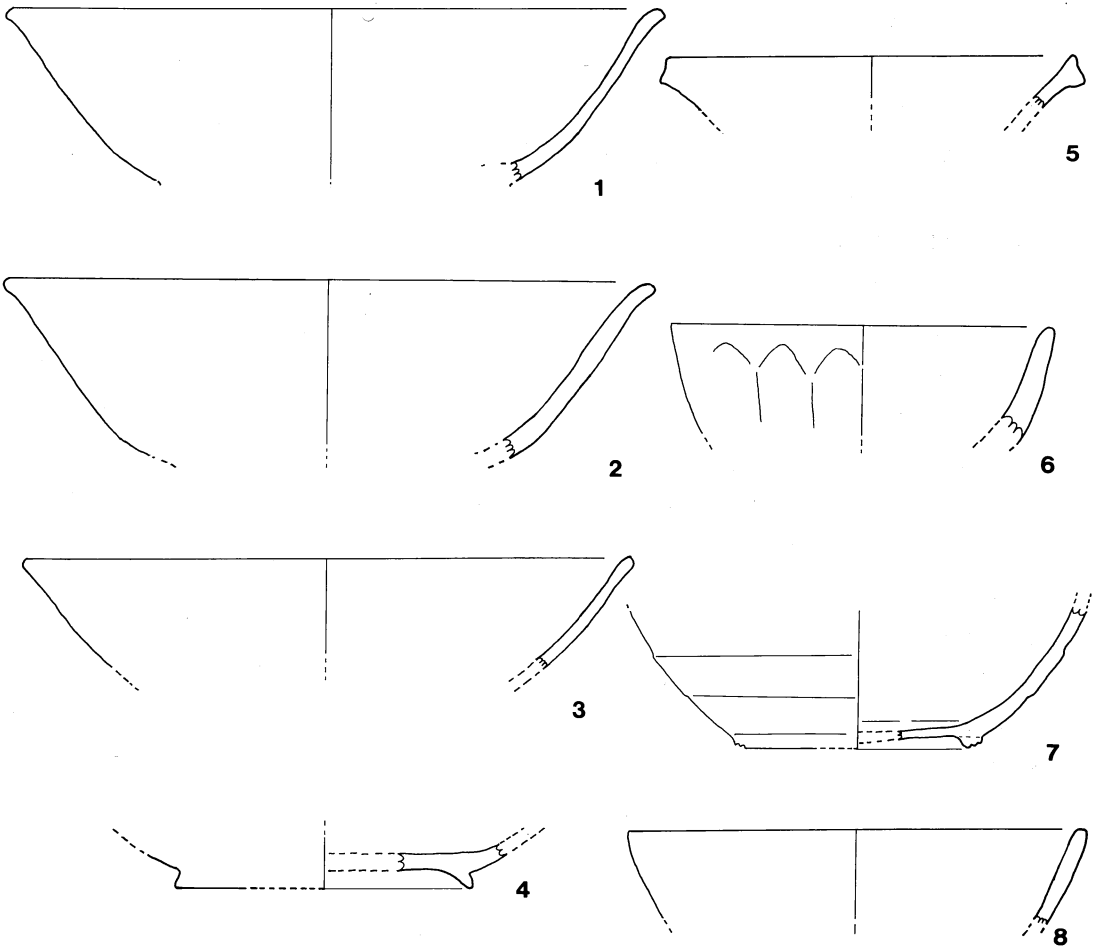
No.1824 19

第80図 第7号住居址出土須恵器及び土師器拓影（1：2）

第7節 中村遺跡から出土した陶器

今回の調査では、思ったより陶器の出土は少なかった。ここではその中の8点について記載することとした。(第81図・図版18-2)

1. 第5号住居址のフク土中より出土した。折戸53号窯期の灰釉碗。2. 表採として発見したもので、1と同時期のものと思われる。3. 周溝の調査中に出土したもので、やはり前記と同時期のもの。
4. 第5号住居址フク土中より検出された、高台のある灰釉の皿。5. 表採で、灰釉の長頸壺の口縁部。
6. 表採で得たもので、外側に連弁文の文様が印花されている。おそらく中国竜泉窯の写しではないかと考えられるもので、15世紀末頃に瀬戸古窯で焼かれたものと思われる。7. 表採で得たもので13世紀頃と思われる山茶碗。8. 表採で発見された17世紀頃の瀬戸系天目茶碗である。



第81図 中村遺跡出土陶器実測図(1:2)

第8節 古墳時代の遺構と遺物

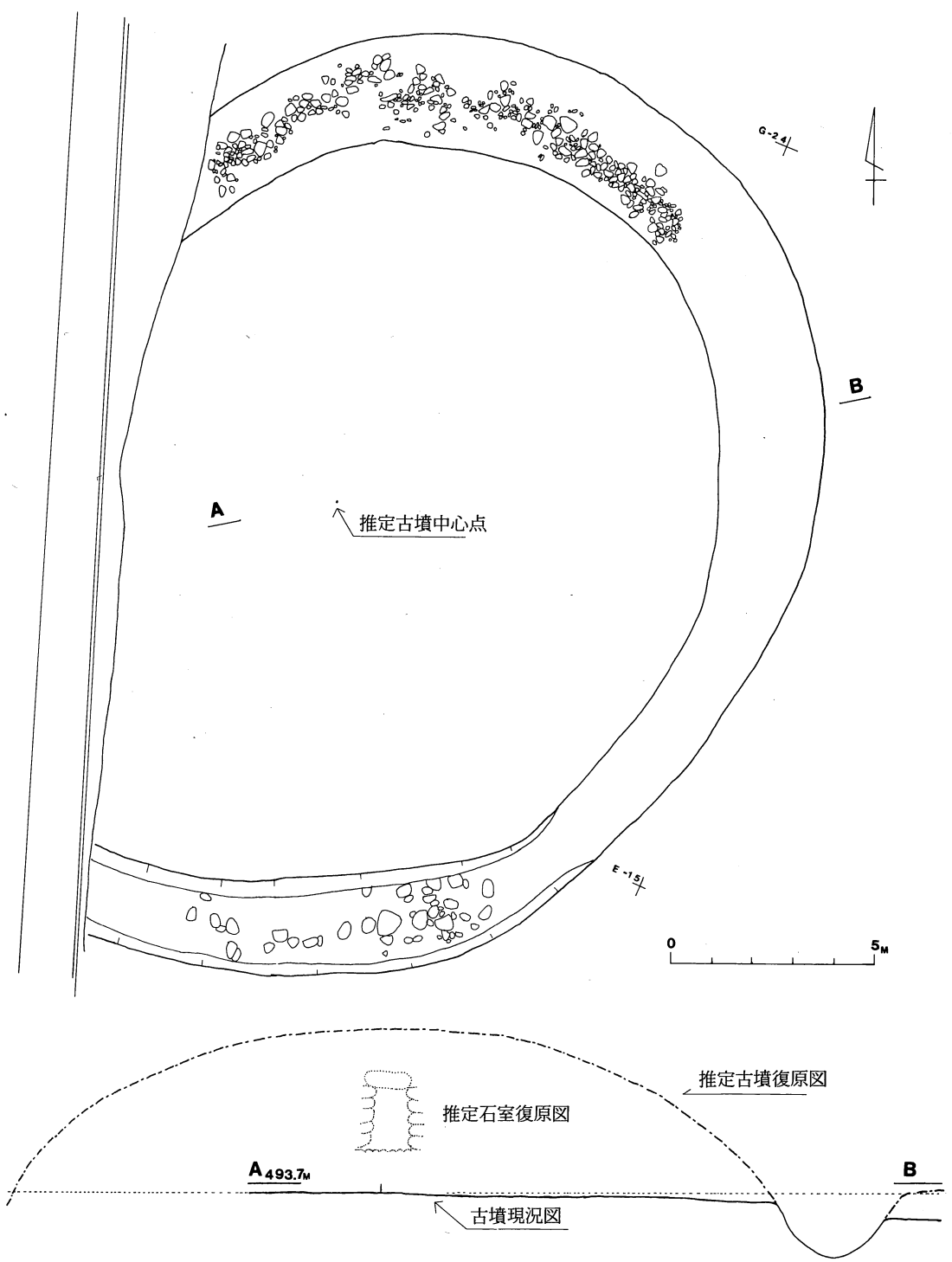
堅錐1号古墳（第82図・図版7-1・4）

遺構 本古墳は今回の発掘中で思いがけない発見であった。E～Pの12～13グリッド内に位置するもので、上の水田（N～Fグリッド）と下の水田（B～Fグリッド）にまたがって分布していた。この古墳の確認は、上の水田の東側の畦（Fグリッド中間のライン）に大きさ1.0m×75cm・厚さ25～30cmほどの見事に並んだ平盤石で石垣が築かれているのを見て、古墳の石室に使用された石ではないかという考え方と、第5号住居址を調査中の出土遺物や、床面下の黒土確認、それに上の水田の調査で、第16号住居址を発掘中、西側道路の断面に周溝の断面が明瞭に判別できたことにより、本古墳の発見となった。調査は、第16号住居址調査終了後、南側から東側へ向かい、埋没した黒土を掘上げていくと、南側に発見されたものと同じ周溝が検出された。葺石については、南側是水田造成工事のため切り取られてしまったが、北側の一部にはほぼ完全な形で検出された。こうしたことから、径18m、周溝幅3.5～4.0m、深さ1.2～1.5、丸底の規模を有する円形墳であると確認された。墳丘については、よほど古い時期（今日迄古墳があったという話は伝わっていないところより）畑耕作あるいは水田造成の時に破壊されたものと思われる。従って、内部構造については知る由もないが、39個の平盤石と、周溝から出土した須恵器の型式から、5世紀末から6世紀に移行する時期の竪穴式の石室の古墳ではないかと判断した。

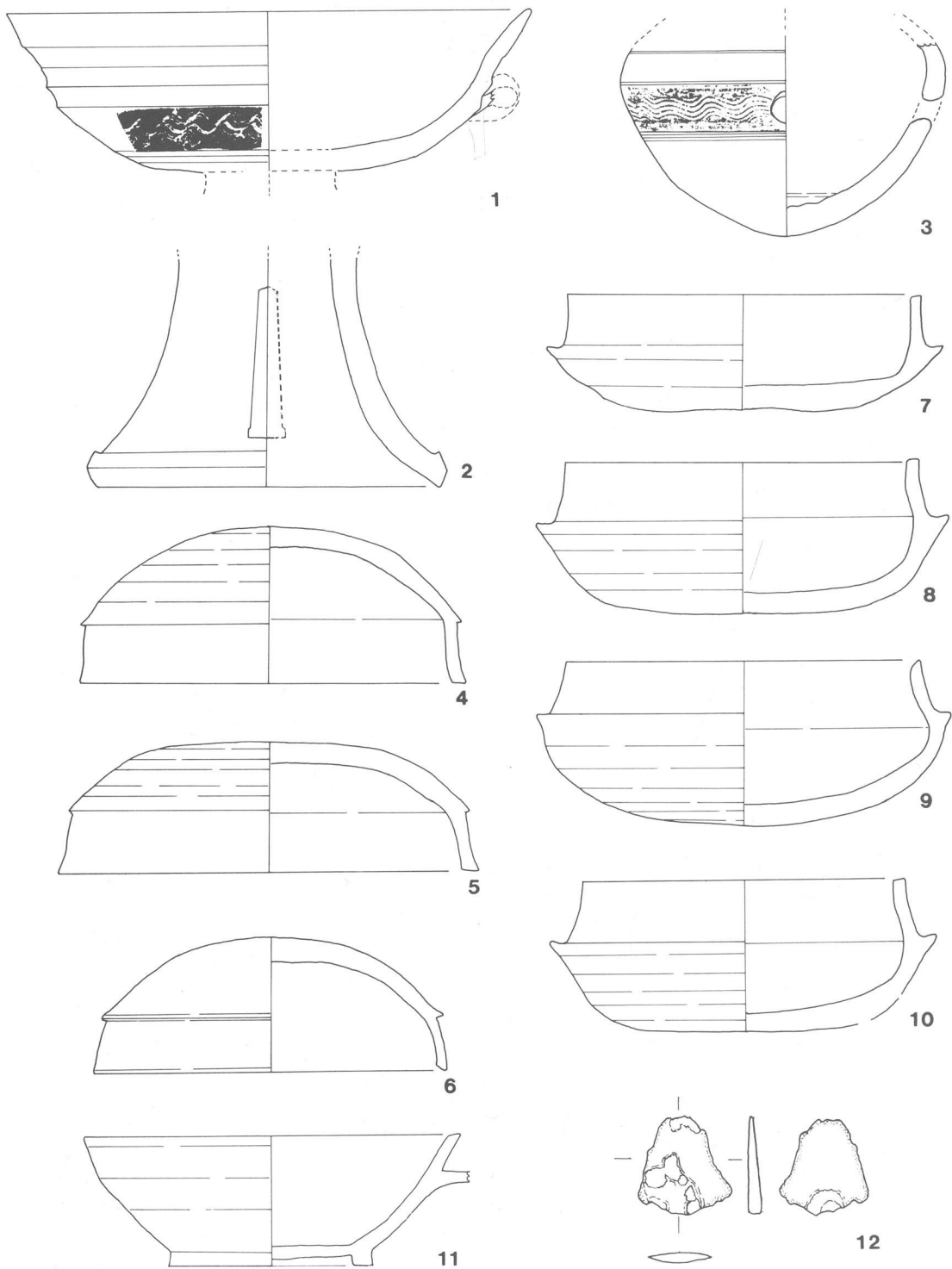
遺物（第83図・図版7-2、7-3・18-8）

須恵器 古墳の遺物はほとんど周溝より出土したものである。1. 脚部を欠いた高杯部で、口縁が外反し、杯体部には上下を明瞭な稜線で区分した文様体があり、その下部に波状文が横位にめぐる。また、杯の上下の稜線上に「つまみ」がつけられている高杯で、TK208に比定されるもの。2. 高杯の脚部破片で、1段透しのあるもの。3. 口縁部と底部を欠いている甕の胴部破片である。甕としては小型の分類で、胴の最も張り出したところに円孔を穿っている。円孔の線上に櫛描の波状文が施されている。4～6は杯の蓋で天井全面へら削している。口縁部はわずかに外へ開き、稜線部の径より口径の方が大きい。7～10は杯でたちあがりはずかに内傾し、受部からの高さは1.7cm前後である。体・底部は5分の4をへら削りし、底は平に仕上げている。以上の遺物は須恵邑編年より高杯・杯はTK208に類似しており、甕はTK23に類似例がある。本古墳の出土遺物は5世紀代後半に比定されるものと考えられる。11は高台でつまみの付された碗で、7世紀後半頃と推定され、本古墳には直接結びつかない。

鉄鏃 12. 周溝底面より出土した平根の鉄鏃である。



第82図 堅錐1号古墳実測図



第83図 堅錐1号古墳出土遺物実測図(1:2)

所 見

中村遺跡調査結果については前章で詳細に述べてあるので、ここでは調査及遺物の整理中に問題になった諸点について記して所見としたい。

1. 中村遺跡は、中川村片桐中央部落(旧字)藤七垣外地籍に発見された。この遺跡の地理的環境をみると、前沢川が天竜川に合流する地点に所在する。遺跡地の標高は494 mで、中川村片桐地籍としては底地に属する場所である。遺跡の北側には牧ヶ原台地が広がっている。この牧ヶ原の基盤は岩盤であるため、天竜川は東に大きくゴウ・ラウンドし、岩盤の軟弱地帯の釜淵峡を流れそれがさらに北林地籍の西端の岩盤に阻害され、流れは大きく西方前沢川の合流点の方向に迂回する。それからの流れは前沢川の沖積地にあたって合流し南流するという、上伊那地域では例を見ない地形を形成している場所である。坂戸峡から小和田、そして釜淵峡に至る地形の環境は見事である。このため、多くの地理学徒の注目の場所となっている。

前沢川と遺跡。前沢川は駒ヶ岳の前山である飯島町七久保烏帽子岳(2,194.5 m)の東方宝石山・小八郎・三林・金五郎・丸山・権現山・行者山・鳴尾山など大小多数の山々が連なり、これらの諸山の溪谷から流れ出る水は日向沢・矢ノ沢となり下流で合流し前沢川となって天竜川に合流する。前沢川の水源地帯は古い断層が多いところであるため、災害の起り易い構造地帯である。大正12年の大災害は前沢川の田畑及び家屋を流出し、大きな災害となった。また、昭和36年災害梅雨前線の際にも前沢川の各所の堤防の欠壊で田畑や人家に多くの被害をもたらした。その度毎に中村地籍は土砂が堆積していった。こうして中村遺跡附近の古い村は埋没したのである。

この前沢川を数理的な面から見ると、流域面積は、19.38平方キロメートル、河川の延長は7.5キロメートル、最大勾配は山地で44%、平坦地で6%の急勾配の河川である。また、その断面積は33万平方メートルと広い断面を形成している。こうした数理面から観察しても前沢川は荒れ河川と言うことができる。

2. 中村遺跡の歴史的環境

1) 昭和59年9～10月に実施された前沢河原の中央に所在している「天伯古墳」の発掘中に、古墳の周溝から縄文中期、及び後期の土器が地表下約1メートルの所から発見された。こうしたことより古墳発掘と合せ調査を進めたところ、古墳の覆土中にも縄文時代中期の土器が発見された。古墳の覆土はおそらく、古墳附近から採土されたものであろうことより推定して、古墳の南側と東側の畑を調査したところ、わずかではあったが、縄文時代中期の土器片を採取することができた。このことを、古墳の所有者である松下昇氏に話したところ「田島郵便局の北側に工場(現在の長野アテネ)を建設する時に多くの縄文時代の土器が発見されたという話を聞いたことがある」と言うので、早速松下昇氏に案内してもらい、長野アテネの敷地内を訪ねた。表採という訳にはいかなかったが、運よく敷地内に掘られたゴミ焼の穴の盛土の中から、小さいものではあったが、縄文時代中期・弥生時代後期の土器片

や土師器・須恵器の破片を発見することができた。こうしたことより前沢河原は縄文時代少なくとも中期の頃より、古墳時代までは各時期の人々が居住したという確証を得たのである。私はこうした研究経緯を考え、中村遺跡の発掘を進めることとした。

2) 中村遺跡との関係をもつ遺跡

前項第Ⅱ章第3節で述べたので、ここではそれら遺跡との関連性について一・二問題点を記してみたい。中村遺跡より上の段丘上には、大林・西ヶ原・針ヶ平・横前・茶堂・刈谷原・原田・溝林などの遺跡がある。その中で中村遺跡と同じ遺物が発見されているのは、縄文時代早期についてはいまだ明らかではないが、縄文時代前期では「刈谷原遺跡」出土の中越式の土器、「茶堂遺跡」からは土器のほかにも、住居址の一部と思われる遺構が発見されている。現在「中村遺跡」「刈谷原遺跡」「茶堂遺跡」の比較研究はなされていないが、今後この三遺跡の比較研究を考えていきたい。そして、その中から土器型式などを通じて「中越期」のかかえている土器型式・遺構などの問題点をさぐってみたいものである。

3) 出土遺物からみた中村遺跡

縄文時代前期としては、中越につぐ関山及び黒浜系の遺物は見られなかったが、前期後半の関東系の諸磯C式の遺物がかかなり多かった。それにつぎ、関東系の十三菩提式と関西系の大歳山式が出土したことは、縄文時代前期における関東・関西の文化圏の在り方を考える上に注目しなければならない問題の一つである。

縄文時代中期としては、中期中葉の遺物が少なく、中期後葉の初頭の曾利Ⅰ式がわずかに出土したが、主には曾利Ⅱ～Ⅳ式が多かった。また、小破片ではあったが、加曾利E式の土器も認められた。このことは、伊那谷中部の一般的なこの時期の在り方でもある。またこの時期の土偶も発見されている。

縄文後晩期としては、堀之内Ⅰ・Ⅲ式と工字文の水Ⅰ式土器が発見された。

弥生時代では、本村の横前刈谷原や原田・茶堂遺跡からも、水神平式に併行する土器が発見されているが、中村遺跡からはついにこの時期の土器は検出することは出来なかった。中村遺跡と同様な沖積地の遺跡もかなり多いので、今後発掘の折には注意していきたいものである。今回の調査では、弥生時代後期の座光寺原式と中島式が主体となった。また、同時期でも中村遺跡の様な天竜川の沖積地の所にある遺跡と、100m～120m高い段丘上に営まれた遺跡との関係については、単に底地と段丘上との関係としての捉え方で良いのかどうかいつもいつも疑問に思っているところである。

奈良時代末から平安時代の遺構が発見出来たことは、今回の調査における縄文時代前期初頭の遺構発見に対比でき得る収穫と思う。この事実は丁度この時期が東山道堅錐駅の置かれた時期に当たるからである。しかも「円面硯」と思われる須恵器小破片と墨書のある須恵器の出土は駅運営に直接かわりを持つ遺物として、重要視しなければならない事柄と考えられる。

堅錐1号古墳の発見も今回の調査では重要の一つである。この古墳の墳丘は相当古い時期に失われたものらしく、言い伝えさえもなかった。しかし、今回の調査で周溝と墳丘の一部の葺石が発見され、遺物も出土し、古墳であると確認することが出来た。石室は取り去られたが、附近の水田造成に積ま

れてあった石が形から石室に使用された石と考えられる点と、周溝中から5世紀末の須恵器が出土した点から考えて、5世紀末の古墳と推定される。5世紀時代の古墳は下伊那地方では発見されているが、問題となっている5世紀代の古墳が、上伊那で確認されたのは本古墳が初見である。また、沖積地帯に営まれた5世紀代の古墳は、本古墳のみではなからうか、という2点については今後の研究課題にしていきたい。

調査団長 友野良一

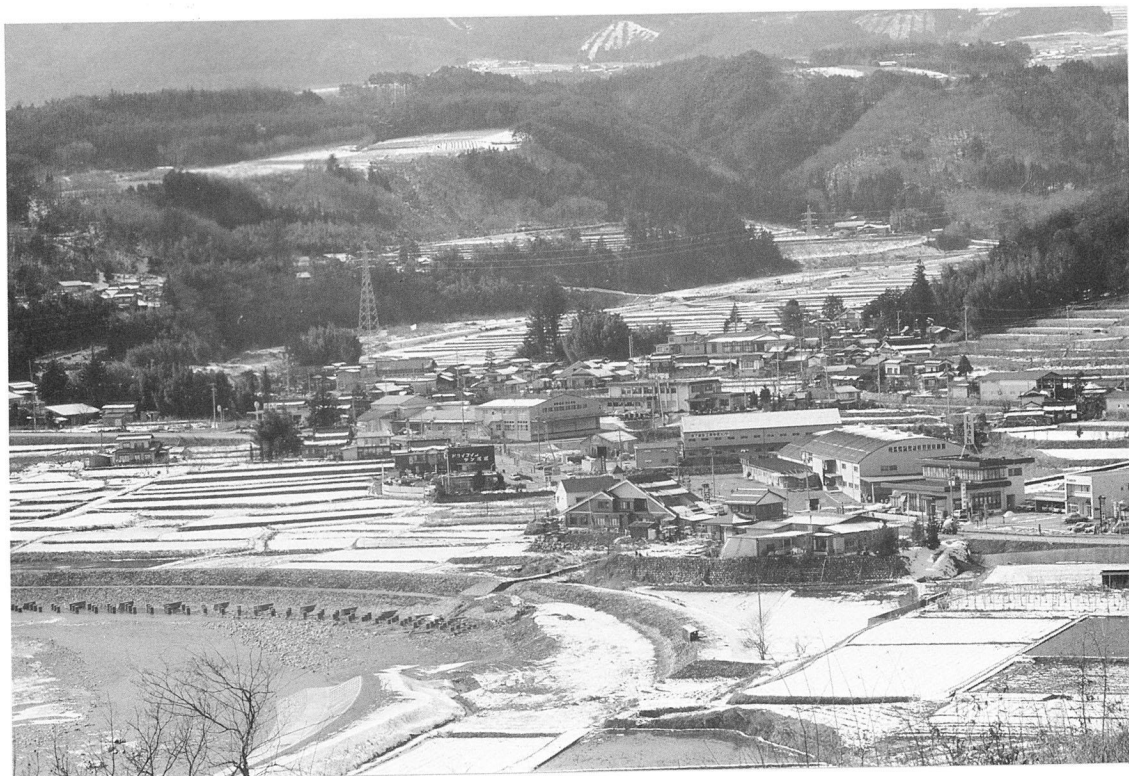
《参考文献》

- | | | |
|-----------|------|---|
| 梅原 末治 | 1960 | 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」京都府史跡名勝天然記念物調査報告16 |
| 紅村 弘 | 1962 | 「東海の先史遺跡」総括編 |
| 山内 清男 | 1964 | 「日本先史土器図譜」 |
| 磯部幸男・杉崎章他 | 1965 | 「愛知県知多半島南端における縄文文化早期末～前期初頭の遺跡群」『古代学研究』41号 |
| 戸沢充則・岡本 勇 | 1965 | 「縄文文化の発展と地域性—関係」日本考古学Ⅱ【河出書房】 |
| 上伊那教育会 | 1965 | 「長野県上伊那誌」歴史編 |
| | 1966 | 「日本考古学」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ【河出書房】 |
| 中 川 村 | 1966 | 「片桐村誌」 |
| 藤沢 宗平 | 1969 | 「中越遺跡—昭和43年度緊急発掘調査報告」宮田村教育委員会 |
| 友野 良一 | 1972 | 「長野県における縄文期復原住宅の現状と問題点」『信濃』24巻5号 |
| 戸沢 充則 | 1973 | 「岡谷市史」上巻 |
| 小林 正春 他 | 1974 | 「千鹿頭社遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財・包蔵地発掘調査報告書(諏訪市その4)』長野県教育委員会、日本道路公団名古屋建設局 |
| 紅村 弘・増子康真 | 1975 | 「東海先史文化の諸段階」(本文編) |
| 芹沢 長介 | 1975 | 「縄 文」陶磁大系1【平凡社】 |
| 樋口昇・宮沢恒之他 | 1975 | 「十二ノ后遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財・包蔵地発掘調査報告書(諏訪市その4)』長野県教育委員会 日本道路公団名古屋建設局 |
| 山下勝年・杉崎 章 | 1976 | 「清水上貝塚」南知多町教育委員会 |
| 大場 磐雄 | 1976 | 「伊那村第一次調査概報」『信濃』3巻6号 |
| 麻生優・高橋敦他 | 1978 | 「打越遺跡」富士見市教育委員会 |
| 八幡 一郎 | 1978 | 「日本史の黎明」【有斐閣】 |
| 武藤 雄六 | 1978 | 「曾 利」富士見町教育委員会 |
| 笹沢浩・青沼博之他 | 1978 | 「長野県諏訪郡原村久阿遺跡調査報告概報」昭和51・52年 長野県教育委員会、日本道路公団名古屋建設局 |
| 長野県教育委員会 | 1978 | 「長野県中央道埋蔵文化財・包蔵地発掘調査報告書(原村その3)」昭和51・52・53年 日本道路公団名古屋建設局 |
| 中川村教育委員会 | 1978 | 「西ヶ原」西ヶ原遺跡緊急発掘調査報告書 |
| 今村 啓爾 | 1979 | 「諸磯式土器の施文工程の変遷」『人類学雑誌』88巻2号 |
| 岡田 篤子 | 1979 | 「中越式土器をめぐる周辺」『地域研究の方向(研究ノート3)』 |
| 森川昌和・岡村勇他 | 1979 | 「鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低地遺跡調査」 |

- 遮那 藤麻呂 1979 「信濃の土器洞の窯跡」下伊那歴史考古学研究所調査報告第2冊
 小林 幸雄 1979 「縄文土器」【講談社】
 新井 和之 1980 「黒浜式土器小考」『日本考古学研究集報Ⅱ』日本考古学研究所
 桑山 龍進 1980 「菊名貝塚研究」菊名貝塚研究会
 中川村教育委員会 1980 「信濃片桐古墳」（六万部古墳）
 中川村教育委員会 1980 「溝林遺跡」緊急発掘調査報告書
 中川村教育委員会 1980 「原田遺跡」緊急発掘調査報告書
 大江 上 1981 「岐阜県内に於ける縄文式前期の土器Ⅱ」『岐阜県考古』8号
 藤沢 宗平 1981 「中越遺跡について」『伊那路』1巻3号
 大場 磐雄 1982 「上原」長野県教育委員会
 樋口 昇一 1982 「中部山岳地帯における前期縄文時代住居址」『信濃』9巻11号
 日本考古学協会 1982 「日本考古学辞典」日本考古学協会編
 宮田村教育委員会 1982 「宮田村誌」上巻
 1982 「縄文土器大成」1・2・3・4【講談社】
 麻生 優 1983 「長野県下水内郡南大原遺跡出土土器」『考古学手帖』5
 江坂 輝弥 1984 「縄文式土器編年表」『世界考古学事典』上巻【平凡社】
 中川村教育委員会 1984 「茶堂遺跡」緊急発掘調査報告書
 中川村教育委員会 1985 「天伯古墳」

図 版

図版1



天竜川東より中村遺跡遠望



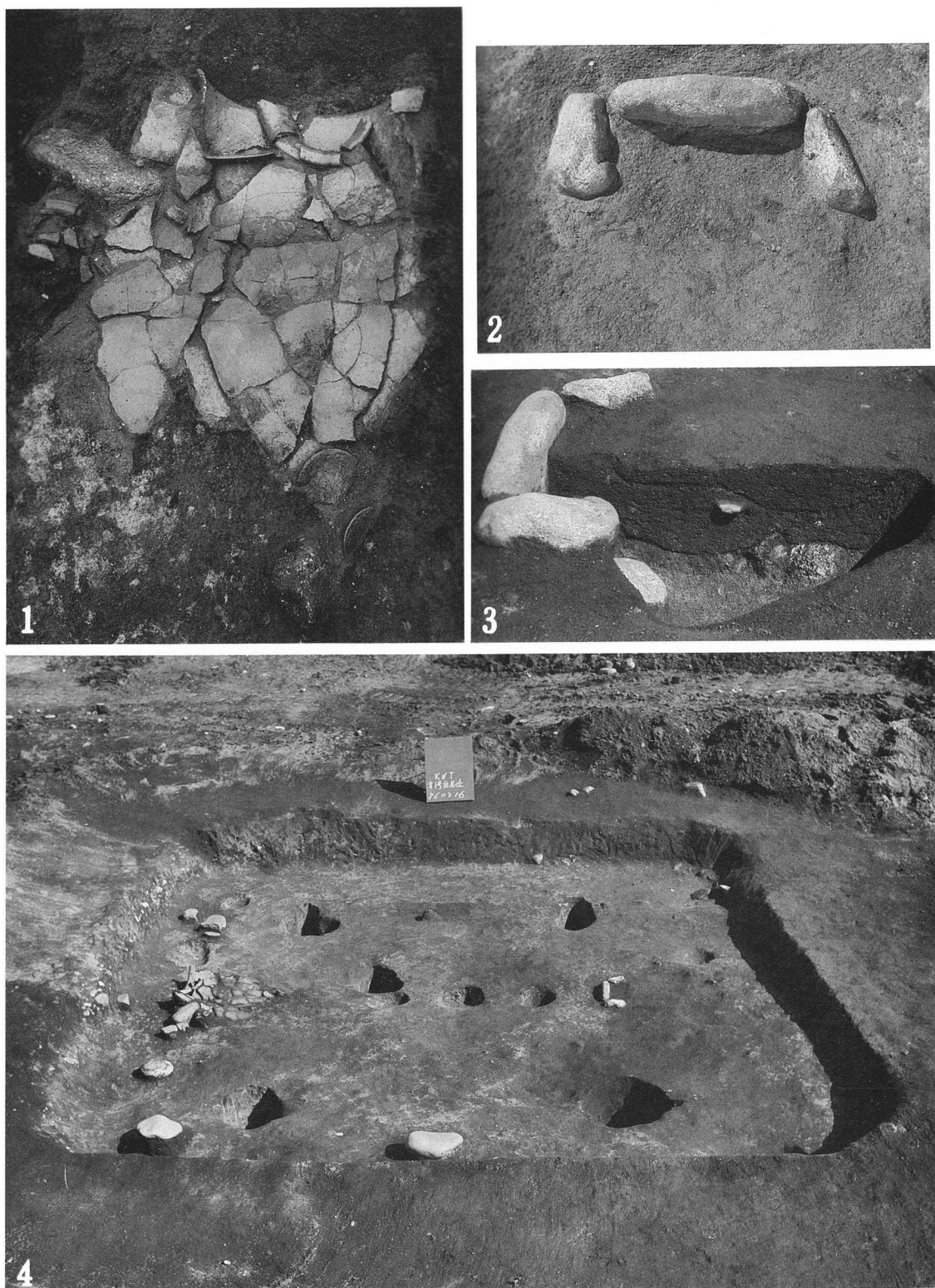
北より中村遺跡 発掘前

図版 2



住居址群（下の田）南より

图版 3

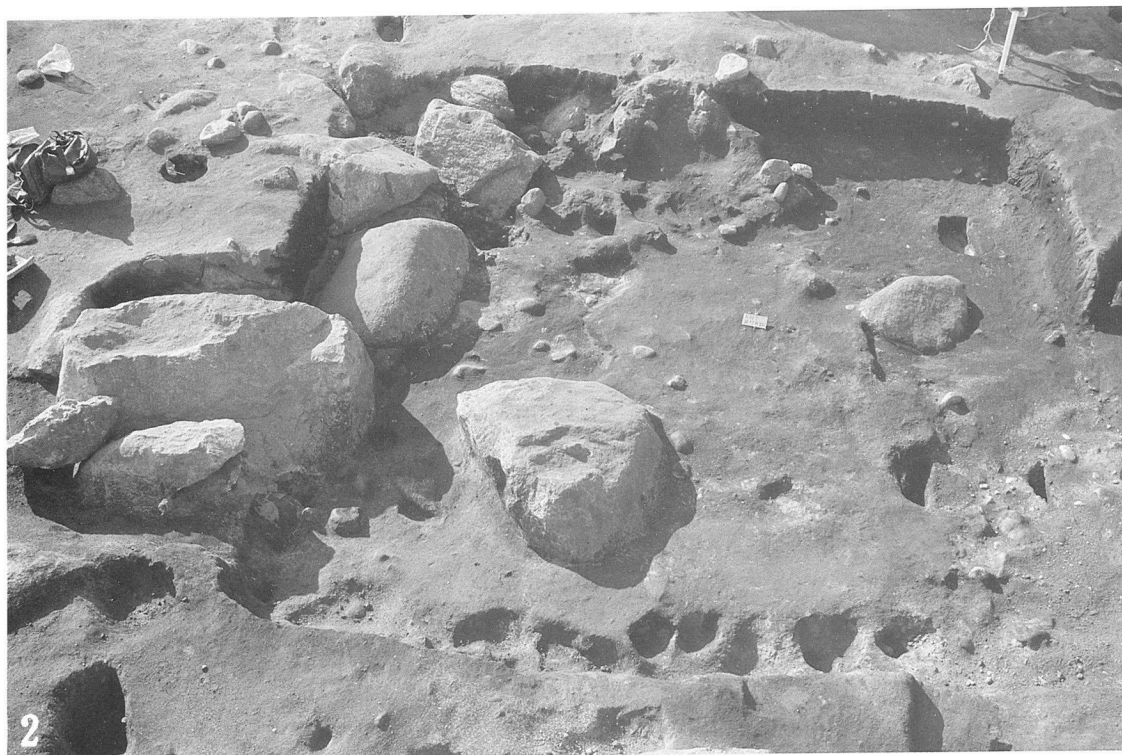


第 1 号住居址 1. No.1851土器出土状态 2·3 炉址 4. 住居址全体

図版 4



1. 第2号・3号・4号住居址(南側手前より) 2. 第4号住居址



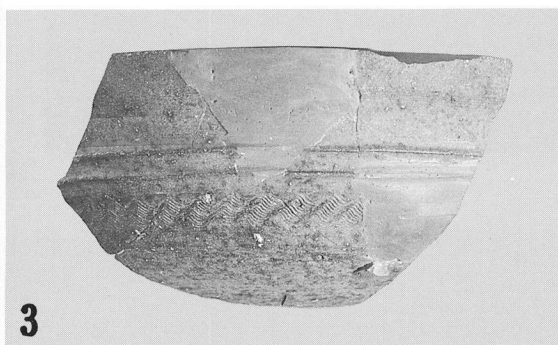
1. 第6号住居址 2. 第7号住居址

図版 6



第11号住居址 1. 土器出土状態 2. No.1895(1:5) 3. 住居址全体

图版 7



竖锥 1 号古墳 1. 南西側周溝 2・3 周溝出土須恵器 4. 東北側周溝と葺石残存状態